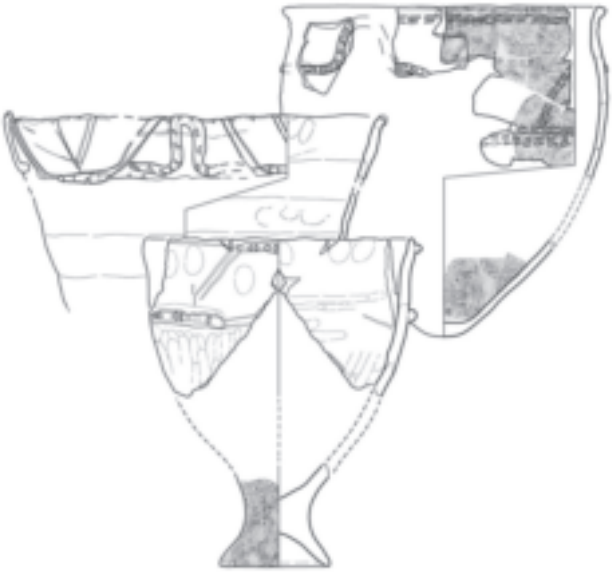
北谷町文化財調査報告書　第35集

伊礼原（いれいばる）D遺跡

－桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成18・19年度）－



2013（平成25）年８月

沖縄県　北谷町教育委員会

北谷町文化財調査報告書　第35集

伊礼原（いれいばる）D遺跡

－桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成18・19年度）－

2013（平成25）年８月

沖縄県　北谷町教育委員会

はじめに

本報告書は、平成 18 年度から平成 19 年度までにおいて本町教育委員会が事業者の委託を受けて実施した桑江伊平土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査の成果をまとめたものです。

本町桑江伊平土地区画整理事業は、平成 15 年 3 月末に返還された米軍施設跡地（キャンプ桑江北側部分）にて施行されています。米軍施設跡地（キャンプ桑江北側部分）地域の返還前の状況は、埋蔵文化財の有無が不明であったため文化庁の補助事業により試掘調査などを実施しており、平成 9 年度に伊礼原 D 遺跡は発見されました。

本遺跡は試掘調査等及び今回の本発掘調査の結果、近代の道路跡、グスク時代の柱穴群や高床式建物址が 1 棟、貝塚時代後期のイモガイ貝集積遺構が検出されました。遺物では近代より本土産陶磁器、沖縄産陶器など、グスク時代より中国産陶磁器、タイ産陶器など、貝塚時代後期より土器、石器、貝製品など多数出土し、貝塚時代後期から近代に至る複合遺跡であることが判明しました。

本遺跡は貝塚時代及びグスク時代は集落を形成し、近代は水田だと推察されます。貝塚時代後期では、貝交易に利用される貝製腕輪の素材となるイモガイのストック状況が確認されております。これらは往時の人々の九州との交流・交易を考える上で大変貴重な発見であります。また、グスク時代においては住居等の構築物の痕跡が重複して検出されることから建て替えを行っていた状況が窺えます。近代には南西に伊平集落、北に平安山集落をかまえており、両集落の立地や形成、変遷を考える上でも貴重な成果が得られた遺跡であります。

今回、本遺跡の調査成果を報告書にまとめ刊行することとなりました。本書及び出土資料が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、さらに、文化財保護の普及、そして本町をはじめ地域の歴史を考える学術研究資料として活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、ご助言とご指導を賜りました諸先生方に厚く御礼申しあげるとともに、発掘調査現場や資料整理作業にご尽力頂きました関係各位に対し、心からの謝意を表します。

平成25年 8 月

北谷町教育委員会
教育長　川上　啓一

例　言

1．本報告書は、北谷町教育委員会が桑江伊平土地区画整理事業に伴い、平成 18 年度～ 19 年度に実施した「伊礼原Ｄ遺跡」発掘調査の成果をまとめたものである。

2．本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1/2,500 地形図（昭和 54 年測量）を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本報告の方位は磁北をさす。

3．遺物の同定等については、下記の方にご協力をいただいた。（敬称略）記して感謝申し上げます。

脊椎動物遺体	樋泉　岳二（早稲田大学）
貝 類 遺 体	黒住　耐二（千葉県立中央博物館　主任上席研究員）
石　　質	大城　逸朗（おきなわ石の会）

4．貝類遺体、脊椎動物遺体については、黒住耐二氏・樋泉岳二氏の監修による種名一覧、図版を掲載した。

5．放射性炭素年代測定は、パリノ・サーヴェイ（株）に依頼した。

6．本報告書の編集は、山城安生、島袋春美が行い執筆分担は下記のとおりである。

第Ⅰ章	松原　哲志
第Ⅱ章	山城　安生
第Ⅲ章　第１節	松原　哲志
第Ⅲ章　第２節	山城　安生
第Ⅲ章　第３節	島袋　春美
第Ⅲ章　第４節１・２（１・４・５）	島袋　春美
第Ⅲ章　第４節２（１）	呉屋　広江
第Ⅲ章　第４節２（２・３）	上地千賀子
第Ⅲ章　第５節１	東門　研治
第Ⅲ章　第５節２（１～７）	東門　研治
第Ⅲ章　第５節２（８～10）	山城　安生
第Ⅲ章　第６節１	山城　安生
第Ⅲ章　第６節２（１～３）	呉屋　広江
第Ⅲ章　第６節２（４・５・９～13）	山城　安生
第Ⅲ章　第６節２（６・７）	島袋　春美
第Ⅲ章　第６節２（８・14）	上地千賀子
第Ⅴ章	東門　研治

7．本遺跡の遺物の注記及び、遺構、取上の凡例は次のとおりである。（注記台帳は CD に収録）

・注記（遺構以外）

区分	台帳番号	大グリッド	小グリッド	層序	取上日
油ナシ	738	B5	H18	包含層 2	061006

→ 伊 D ナ 738B5H18 －包 2-061006

・注記（遺構）

区分	台帳番号	大グリッド	小グリッド	遺構	取上日
油ナシ	1893	B5	H16	1047P	070509

→ 伊 D ナ 1893B5H16 1047P-070509

・注記（調査地区南側）

区分	台帳番号	大グリッド	小グリッド	層序	取上日
南	153	B5	H18	砂③	080226

→ 伊Ｄミ 153B5H18 －砂③－ 080226

・遺構記号

性格	溝・河川	土坑	柱穴・穴	石列	貝集積	その他・現代	攪乱
遺構記号	ＳＤ	ＳＫ	ＳＰ	ＳＬ	ＳＳ	ＳＸ	ＳＺ

・遺物取上番号

台帳番号	グリッド	遺構名	層序	種別	取上番号	取上日	X	Y	Z
4812	H17	－	包砂(Ｖｂ)	土器	288	07.12.11	35934.624	25735.029	3.002

観察一覧 出土地表記 →
（調査時表記の層序は（ ）で示した）

H17　Ｖｂ層（包砂）
X: 35934.624
Y: 25735.029　Z: 3.002
取 288　台 4812

8．本報告の編年表記は沖縄編年を基本とするが、出土遺物には時代幅があり、その種類によって時代表記が異なるため、下記の表を示した。

〈参考〉**沖縄・九州の時代区分対照表**

九州	縄文時代							弥生時代					古墳時代			奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代（南北朝時代）	戦国時代	安土桃山時代	江戸時代	近代	現代	
	草創・早期	前期	中期	後期	後期末	晩期	晩期末	前期	中期前半	中期後半	後期前半	後期後半	前期	中期	後期									

沖縄	貝塚時代											グスク時代前期			グスク時代後期／古琉球	近世琉球	近代沖縄	戦後沖縄	
	早期			前期		中期		後期				12世紀～15世紀			15世紀～1609年	1609～1879年	1879～1945年	1945～1972年	1972年～
	前Ⅰ期	前Ⅱ期	前Ⅲ期	前Ⅳ期前～中葉	前Ⅳ期後葉～前Ⅴ期前葉	前Ⅴ期中葉～後葉	前Ⅴ期末	後期前半（古）	後期前半（中）	後期前半（新）	後期後半	グスク時代	三山	第一尚氏王朝	第二尚氏王朝前期	第二尚氏王朝後期	沖縄県の設置	アメリカ統治時代	沖縄県 日本復帰
事項															1609 島津進入	1879 琉球処分		1945 沖縄戦	1972

註：戦史時代については多和田編年・高宮廣衞編年を併記した「南西諸島先史時代葬墓制」（新里貴之 2011）、歴史時代については『琉球の時代』（高良倉吉 1980）、『宜野湾はじまりや！』（2013）を参考に加筆

9．本書に掲載した発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物全ては北谷町教育委員会に保管している。

本 文 目 次

はじめに
例　言
巻首図版
第Ⅰ章　調査経緯・経過…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査体制…… 2
　第３節　調査経過…… 4
第Ⅱ章　位置と環境…… 6
第Ⅲ章　調査の方法と成果…… 11
　第１節　調査の方法…… 11
　第２節　層序…… 13
　第３節　遺物の出土状況…… 29
　第４節　貝塚時代後期…… 32
　第５節　グスク時代……171
　第６節　近・現代……225
第Ⅳ章　理科学的分析……270
　第１節　貝類遺体……270
　第２節　脊椎動物遺体……278
　第３節　伊礼原Ｄ遺跡の自然科学分析……286
第Ⅴ章　まとめ……300
報告書抄録……307

図 版 目 次

巻首図版１　土器１（復元）
巻首図版２　伊礼原Ｄ遺跡周辺航空写真
巻首図版３　全景写真
巻首図版４　層序１
巻首図版５　層序２
巻首図版６　下層確認調査
巻首図版７　貝塚時代後期　遺構
巻首図版８　グスク時代　柱穴群
巻首図版９　グスク時代　高床式建物址（4450SB）
巻首図版10　近代　遺構
巻首図版11　遺物出土状況１
巻首図版12　土器２
巻首図版13　土器３
巻首図版14　石器
巻首図版15　貝製品・骨製品
巻首図版16　白磁・青磁・染付
巻首図版17　褐釉陶器・三彩
巻首図版18　銭貨・人形・土製品・簪・金属製品
巻首図版19　遺物出土状況２
巻首図版20　胎土薄片１
巻首図版21　胎土薄片２
巻首図版22　作業風景
図版１　4409SX 検出状況…… 34
図版２　サガリバナ検出状況…… 34
図版３　貝製品出土状況…… 34
図版４　自然木・石出土状況…… 34
図版５　4318SK　検出状況（南東より）…… 38
図版６　4318SK　検出状況（北より）…… 38
図版７　イモガイ貝集積検出状況（4317SS）…… 41
図版８　軽石の種類…… 44
図版９　土器１（Ⅰ群）…… 59
図版10　土器２（Ⅱ－Ⅰ類）…… 61
図版11　土器３（Ⅱ－Ⅱ類）…… 63
図版12　土器４（Ⅱ－Ⅱ類）…… 65
図版13　土器５（Ⅱ－Ⅱ・Ⅲ類）…… 67
図版14　土器６（Ⅱ－Ⅳ類）…… 69

図版15　土器７（Ⅱ－Ⅴ・Ⅵ類）…… 71
図版16　土器８（Ⅱ－Ⅵ類）…… 73
図版17　土器９（Ⅱ－Ⅵ類）…… 75
図版18　土器10（Ⅱ－Ⅵ・Ⅶ類）…… 77
図版19　土器11（Ⅱ－Ⅷ・Ⅸ類）…… 79
図版20　土器12　底部（丸底・尖底）…… 87
図版21　土器13　底部（乳房状尖底・平底）…… 89
図版22　土器14　底部（くびれ平底）…… 90
図版23　4409SX　土器１
（Ⅰ群・Ⅱ－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ・Ⅷ類）…… 101
図版24　4409SX　土器２（Ⅱ－Ⅷ類）…… 103
図版25　4409SX　土器３（Ⅱ－Ⅷ類）…… 105
図版26　4409SX　土器４（Ⅱ－Ⅷ・Ⅹ類・底部１）…… 107
図版27　4409SX　土器５（底部２）…… 109
図版28　土製品…… 111
図版29　石器１（石斧）…… 123
図版30　石器２（石斧）…… 125
図版31　石器３（敲打器類）…… 127
図版32　石器４（敲打器類）…… 129
図版33　石器５（敲打器類）…… 131
図版34　石器６（敲打器類）…… 133
図版35　石器７（敲打器類）…… 135
図版36　石器８（台石・石皿）…… 137
図版37　石器９（石皿）…… 139
図版38　石器10（チャート剥片・砥石）…… 141
図版39　穿孔貝…… 157
図版40　貝製品１…… 159
図版41　貝製品２…… 161
図版42　貝製品３…… 163
図版43　貝製品４　…… 165
図版44　貝製品５…… 167
図版45　貝製品６…… 169
図版46　骨製品…… 170
図版47　検出状況（南西より）…… 172
図版48　完掘状況（南西より）…… 172
図版49　完掘状況（柱想定）…… 172
図版50　柱穴検出状況…… 173
図版51　カムィヤキ…… 181
図版52　白磁１…… 185
図版53　白磁２…… 186
図版54　青磁１…… 193
図版55　青磁２…… 195
図版56　青磁３…… 197
図版57　染付１…… 203
図版58　染付２…… 205
図版59　染付３・瑠璃釉…… 207
図版60　褐釉陶器１…… 213
図版61　褐釉陶器２…… 215
図版62　褐釉陶器３…… 217
図版63　三彩…… 219
図版64　瓦質土器…… 221
図版65　焼土…… 223
図版66　銭貨…… 224
図版67　0008SF　検出状況（北東より）…… 229
図版68　4442SZ と0008SF の検出状況（南西側より）…… 229
図版69　水路①・②検出状況（東側より）…… 229
図版70　水路①（東側より）…… 229
図版71　F10・11検出状況（南東より）…… 229
図版72　沖縄産施釉陶器１…… 237
図版73　沖縄産施釉陶器２…… 239
図版74　沖縄産無釉陶器１…… 245
図版75　沖縄産無釉陶器２…… 247
図版76　沖縄産無釉陶器３…… 249
図版77　陶質土器…… 253
図版78　本土産陶器…… 255
図版79　本土産磁器…… 257
図版80　先島系土器…… 258
図版81　木製品…… 259
図版82　円盤状製品…… 263
図版83　瓦…… 265
図版84　簪…… 266
図版85　煙管…… 266
図版86　人形…… 267
図版87　金属製品…… 268
図版88　軽石製品…… 269
図版89　貝類遺体１（巻貝）…… 272
図版90　貝類遺体２（巻貝）…… 273
図版91　貝類遺体３（巻貝）…… 274
図版92　貝類遺体４（上：巻貝・下：陸産貝）…… 275
図版93　貝類遺体５（二枚貝）…… 276
図版94　貝類遺体６（上：二枚貝・下：巻貝、陸産貝）…… 277
図版95　脊椎動物遺体１（サカナ類）…… 278
図版96　脊椎動物遺体２（上面：イルカ、ウミガメ・
下面：ジュゴン、クジラ、ヘビ類）…… 280
図版97　脊椎動物遺体３
（上面：イヌ・下面：イヌ、ネコ、ネズミ）…… 281
図版98　脊椎動物遺体４（ウマ類）…… 282
図版99　脊椎動物遺体５（イノシシ・ブタ類）…… 283
図版100 脊椎動物遺体６（ウシ類）…… 284

挿 図 目 次

第１図　伊礼原Ｄ遺跡の位置とキャンプ桑江北側地区の遺跡…… 8
第２図　北谷町の位置と遺跡分布…… 9
第３図　グリッド設定…… 12
第４図　旧汀線の復元と試掘検出箇所…… 12
第５図　各層の検出面…… 18
第６図　①層序（東壁１）…… 19
②層序（東壁２）…… 20
第７図　層序（南壁）…… 21
第８図　層序（下層確認調査）…… 22
第９図①南区（H16 ～18･I18）下層の遺物平面･垂直分布…… 23
②南区（H16 ～18･I18）下層の遺物別平面分布…… 24
第10図　遺物平面・垂直分布（取上げ）…… 26

第11図　4409SX　平面・断面図…… 35
第12図　4409SX　層別出土遺物…… 36
第13図　4318SK　平面･断面図（H16）…… 38
第14図　自然貝と貝集積の殻径比較…… 39
第15図　イモガイ貝集積（4317SS）…… 40
第16図　イモガイ貝集積・貝だまり…… 43
第17図　軽石グリッド別出土分布…… 44
第18図　軽石平面分布（伊礼原Ｄ遺跡・伊礼原遺跡）…… 44
第19図　土器重量別平面分布…… 45
第20図　土器１（Ⅰ群）…… 58
第21図　土器２（Ⅱ－Ⅰ類）…… 60
第22図　土器３（Ⅱ－Ⅱ類）…… 62
第23図　土器４（Ⅱ－Ⅱ類）…… 64
第24図　土器５（Ⅱ－Ⅱ・Ⅲ類）…… 66
第25図　土器６（Ⅱ－Ⅳ類）…… 68
第26図　土器７（Ⅱ－Ⅴ・Ⅵ類）…… 70
第27図　土器８（Ⅱ－Ⅵ類）…… 72
第28図　土器９（Ⅱ－Ⅵ類）…… 74
第29図　土器10（Ⅱ－Ⅵ・Ⅶ類）…… 76
第30図　土器11（Ⅱ－Ⅷ・Ⅸ類）…… 78
第31図　土器12　底部（丸底・尖底）…… 86
第32図　土器13　底部（乳房状尖底・平底）…… 88
第33図　土器14　底部（くびれ平底）…… 90
第34図　Ⅱ群Ⅵ･Ⅷ類口縁部傾き別構成比…… 91
第35図　4409SX　土器１
（Ⅰ群・Ⅱ－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ・Ⅷ類）…… 100
第36図　4409SX　土器２　（Ⅱ－Ⅷ類）…… 102
第37図　4409SX　土器３　（Ⅱ－Ⅷ類）…… 104
第38図　4409SX　土器４　（Ⅱ－Ⅷ・Ｘ類・底部１）…… 106
第39図　4409SX　土器５　（底部２）…… 108
第40図　土製品…… 111
第41図　石器平面分布…… 115
第42図　石器器種別素材重量比…… 116
第43図　石器１（石斧）…… 122
第44図　石器２（石斧）…… 124
第45図　石器３（敲打器類）…… 126
第46図　石器４（敲打器類）…… 128
第47図　石器５（敲打器類）…… 130
第48図　石器６（敲打器類）…… 132
第49図　石器７（敲打器類）…… 134
第50図　石器８（台石・石皿）…… 136
第51図　石器９（石皿）…… 138
第52図　石器10（チャート剥片・砥石）…… 140
第53図　ヤコウガイ使用部位…… 146
第54図　ヤコウガイの蓋刃分布…… 149
第55図　スイジガイ突起番号…… 150
第56図　二枚貝有孔製品観察部位…… 150
第57図　二枚貝有孔製品の重量分布と殻長比較…… 151
第58図　貝製品１…… 158
第59図　貝製品２…… 160
第60図　貝製品３…… 162
第61図　貝製品４…… 164
第62図　貝製品５…… 166
第63図　貝製品６…… 168
第64図　骨製品…… 170
第65図　高床式建物址（4450SB）平面・断面図…… 172
第66図　カムィヤキ…… 181
第67図　白磁１…… 184
第68図　白磁２…… 186
第69図　青磁平面分布…… 189
第70図　青磁１…… 192
第71図　青磁２…… 194
第72図　青磁３…… 196
第73図　染付平面分布…… 199
第74図　染付１…… 202
第75図　染付２…… 204
第76図　染付３・瑠璃釉…… 206
第77図　褐釉陶器平面分布…… 209
第78図　褐釉陶器１…… 212
第79図　褐釉陶器２…… 214
第80図　褐釉陶器３…… 216
第81図　鶴型水注の出土部位…… 218
第82図　三彩…… 219
第83図　瓦質土器…… 220
第84図　焼土平面分布…… 222
第85図　焼土…… 223
第86図　銭貨…… 224
第87図　伊礼原Ｄ遺跡と戦前集落…… 225
第88図　平安山・伊礼の戦前集落…… 227
第89図　0008SF　平面図…… 228
第90図　沖縄産施釉陶器平面分布…… 233
第91図　沖縄産施釉陶器１…… 236
第92図　沖縄産施釉陶器２…… 238
第93図　沖縄産無釉陶器平面分布…… 243
第94図　沖縄産無釉陶器１…… 244
第95図　沖縄産無釉陶器２…… 246
第96図　沖縄産無釉陶器３…… 248
第97図　陶質土器…… 252
第98図　本土産陶器…… 255
第99図　本土産磁器…… 257
第100図 先島系土器…… 258
第101図 木製品…… 259
第102図 円盤状製品素材別比較…… 261
第103図 円盤状製品平面分布…… 261
第104図 円盤状製品…… 262
第105図 瓦平面分布…… 264
第106図 瓦…… 265
第107図 簪…… 266
第108図 煙管…… 266
第109図 人形…… 267
第110図 金属製品…… 268
第111図 軽石製品…… 269
第112図 胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（１）…… 298
第113図 胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（２）…… 299
第114図 砕屑物・基質・孔隙の割合…… 299
第115図 時代別出土遺物変遷…… 305
第116図 Ⅲ層面遺構（柱穴）平面・断面図……別紙

表 目 次

第１表　北谷町遺跡一覧…… 10
第２表　層序観察一覧…… 16
第３表　取上遺物一覧…… 25
第４表　伊礼原Ｄ遺跡の遺物出土量…… 29
第５表　南区（H16～18・I18）土器分類別出土量…… 32
第６表　4409SX 遺物出土量…… 33
第７表　大型イモガイ貝集積計測一覧…… 39
第８表　軽石出土量…… 44
第９表　Ⅰ群土器出土量…… 46
第10表　Ⅱ群土器（口縁・胴部）出土量…… 48
第11表　Ⅱ群土器（Ⅵ・Ⅷ類）出土量…… 52
第12表　Ⅰ群・Ⅱ群土器観察一覧…… 54
第13表　Ⅱ群土器底部（分類別）出土量…… 81
第14表　Ⅱ群土器底部胎土別出土量…… 81
第15表　Ⅱ群土器（底部）観察一覧…… 85
第16表　4409SX 出土　土器観察一覧…… 97
第17表　Ⅱ群Ⅵ・Ⅷ類口縁部形態と傾きの関係…… 110
第18表　土製品観察一覧…… 111
第19表　石器出土量…… 112
第20表　遺構出土石器…… 114
第21表　4409SX　石器出土量…… 116
第22表　石器器種別素材重量…… 117
第23表　石器観察一覧…… 118
第24表　石器出土一覧…… 121
第25表　貝製品出土量…… 142
第26表　オオツタノハ製品観察一覧…… 142
第27表　オオベッコウガサ製品観察一覧…… 143
第28表　ゴホウラ・アツソデガイ製品及び自然貝出土量…… 143
第29表　ゴホウラ・アツソデガイ製品・未製品観察一覧…… 144
第30表　貝玉観察一覧…… 144
第31表　イモガイ製品観察一覧…… 144
第32表　タカラガイ製品観察一覧…… 145
第33表　ヤコウガイ製品出土量…… 146
第34表　ヤコウガイ製品観察一覧…… 148
第35表　ホラガイ有孔製品観察一覧…… 149
第36表　螺蓋製貝斧観察一覧…… 149
第37表　スイジガイ製品観察一覧…… 150
第38表　二枚貝有孔製品出土量…… 151
第39表　ヒメジャコ殻長比較（範囲確認・本調査）…… 151
第40表　二枚貝有孔製品観察一覧…… 152
第41表　穿孔貝観察一覧…… 157
第42表　骨製品観察一覧…… 170
第43表　遺構別遺物出土量…… 171
第44表　柱穴・土坑計測一覧…… 174
第45表　白磁出土量…… 182
第46表　白磁観察一覧…… 183
第47表　青磁出土量…… 189
第48表　青磁観察一覧…… 190
第49表　染付出土量…… 199
第50表　染付観察一覧…… 200
第51表　褐釉陶器（中国産・タイ産）出土量…… 210
第52表　褐釉陶器観察一覧…… 210
第53表　三彩出土量…… 218
第54表　三彩観察一覧…… 218
第55表　瓦質土器出土量…… 220
第56表　焼土出土量…… 222
第57表　銭貨観察一覧…… 224
第58表　0008SF 遺物出土量…… 227
第59表　近・現代遺物出土量…… 230
第60表　沖縄産施釉陶器出土量…… 233
第61表　沖縄産施釉陶器観察一覧…… 234
第62表　沖縄産無釉陶器出土量…… 241
第63表　沖縄産無釉陶器観察一覧…… 242
第64表　陶質土器出土量…… 251
第65表　陶質土器観察一覧…… 251
第66表　本土産陶器出土量…… 254
第67表　本土産陶器観察一覧…… 254
第68表　本土産磁器出土量…… 256
第69表　本土産磁器観察一覧…… 256
第70表　先島系土器胎土分類…… 257
第71表　先島系土器出土量…… 258
第72表　円盤状製品出土量…… 260
第73表　円盤状製品観察一覧…… 261
第74表　瓦出土量…… 264
第75表　伊礼原Ｄ遺跡出土貝類とその生息場所類型…… 270
第76表　伊礼原Ｄ遺跡から採集された脊椎動物遺体の
種名一覧…… 285
第77表　放射性炭素年代測定結果…… 287
第78表　暦年較正結果…… 287
第79表　放射性炭素年代測定結果…… 289
第80表　暦年較正結果…… 289
第81表　試料一覧…… 290
第82表　放射性炭素年代測定結果…… 292
第83表　暦年較正結果…… 292
第84表　薄片観察結果…… 296
第85表　伊礼原Ｄ遺跡・小堀原遺跡土器分類別比較…… 301
第86表　伊礼原Ｄ遺跡の時期
（九州・沖縄の時代区分対照表）…… 304



巻首図版 1　**土器 1**（復元）



巻首図版２　伊礼原Ｄ遺跡周辺航空写真



Ⅲ層面完掘状況　（北東から）



完掘状況　（東から）

調査終了後　（南東から）

巻首図版３　全景写真



東壁２　(C16 ～ 18)



南壁　(J19 周辺)



南壁　(G19 周辺)

巻首図版４　層序１



東壁 2 （A8 ～ A10）1 面目検出時

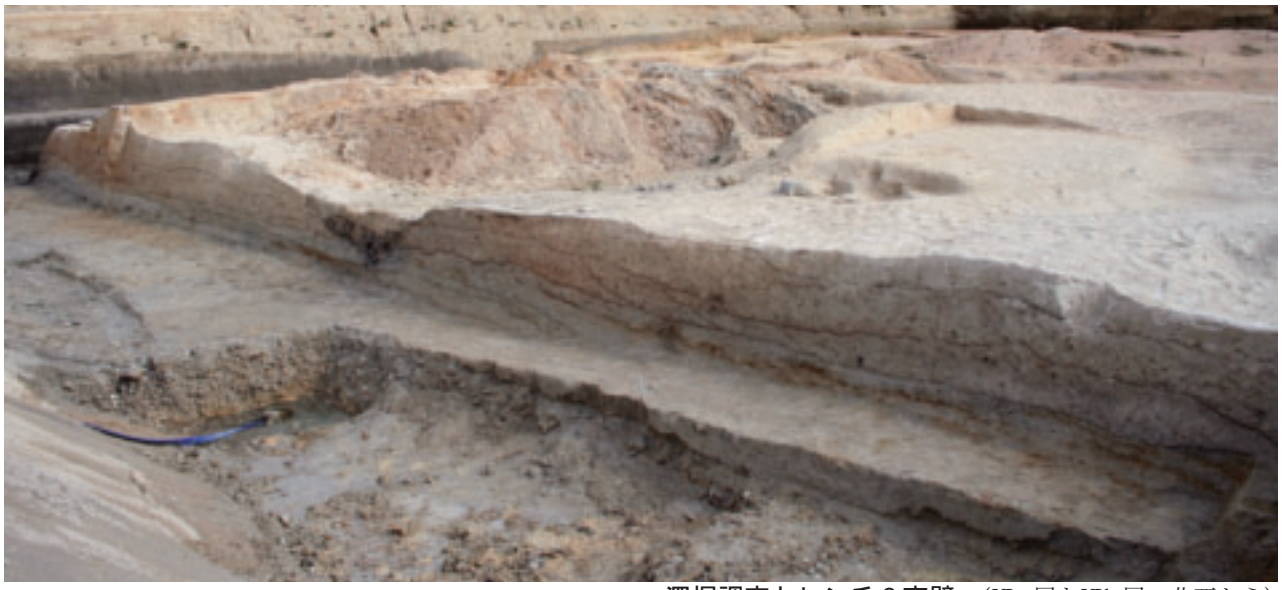


東壁 1 （D8 ～ 14）完掘時



北壁 （A ～ E8）完掘時

巻首図版 5　層序 2



深掘調査トレンチ２南壁　（VIa 層とVIb 層、北西から）





深掘調査トレンチ２　（左：VIa・VIb 層　右：VIb 層、北から）



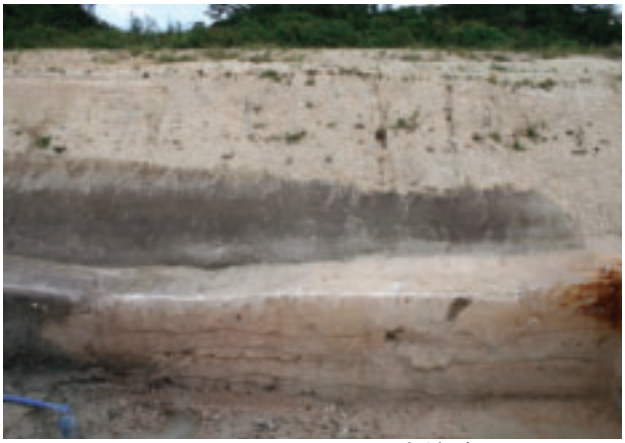
センニンガイ　（VIb 層：ビーチロック中）



室川下層式土器　（VIb 層：ビーチロック中）



4409SX 北端壁面　（西から）



4409SX 南端壁面　（西から）

巻首図版６　下層確認調査



東壁 2（4409SX 周辺　左端：範囲確認 4 トレンチ跡）



4409SX 完掘状況（西から）



サガリバナ検出状況



イモガイ貝集積（4317SS）**検出状況**

巻首図版 7　貝塚時代後期　遺構



巻首図版８　グスク時代　柱穴群



検出状況



完掘状況



完掘状況

巻首図版 9　グスク時代　高床式建物址（4450SB）



0008SF　（ビーチロック道）



石列　（0019SL）



石列　（0019SL）

巻首図版10　近代　遺構



土器　(第 28 図 109)



土器　(第 28 図 109)



土器　(第 22 図 44)



石器　(第 43 図 1)



貝製品　(第 59 図 16)



石器　(第 44 図 7)



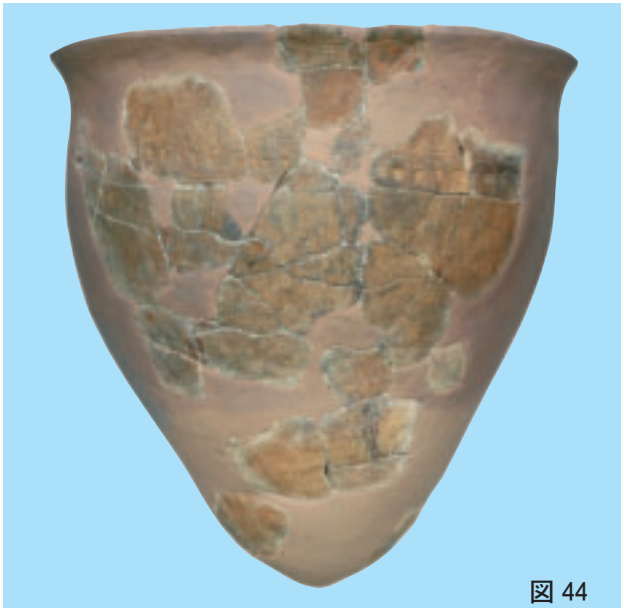
貝製品　(第 60 図 21)



貝製品　(第 60 図 25)

巻首図版11　遺物出土状況 1



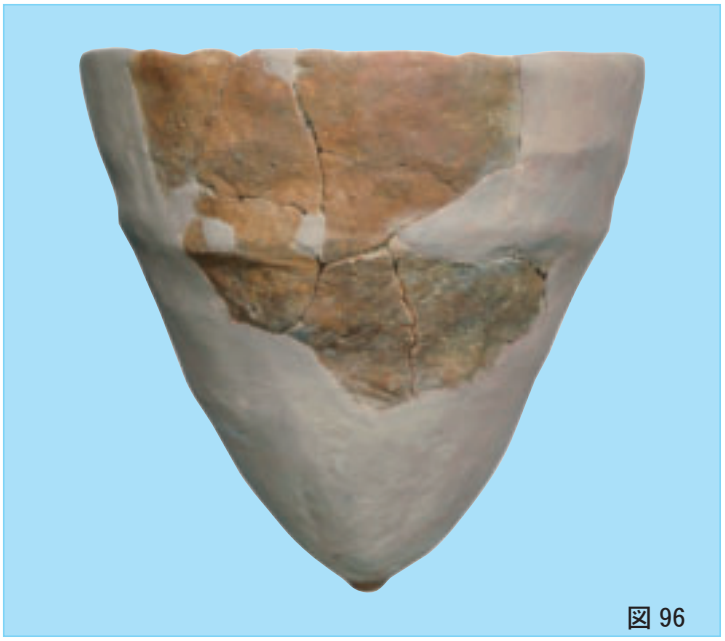


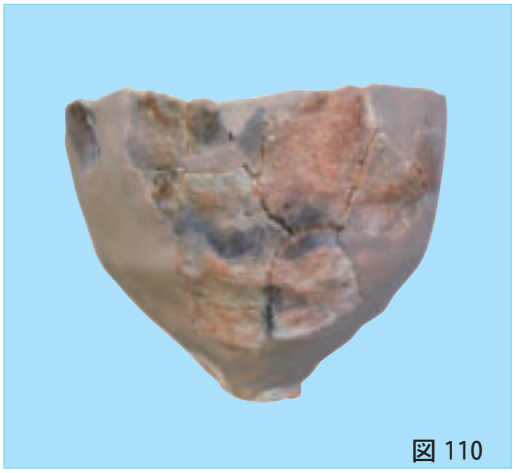


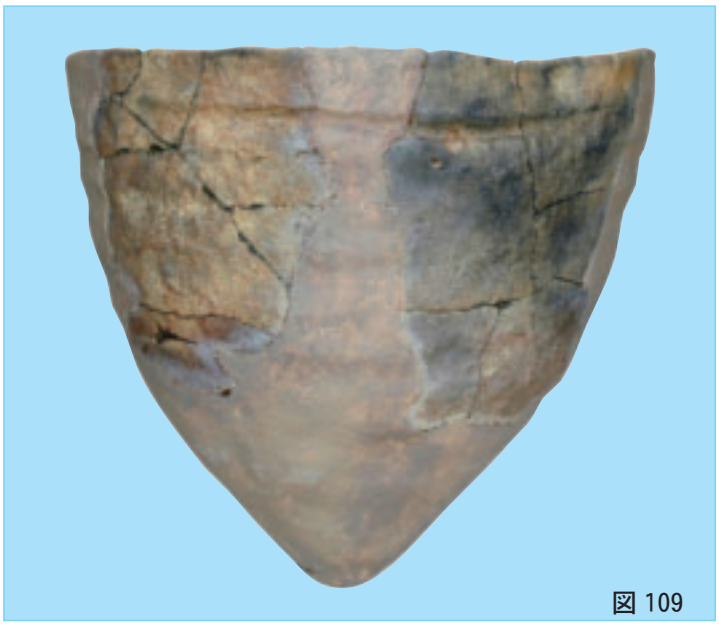




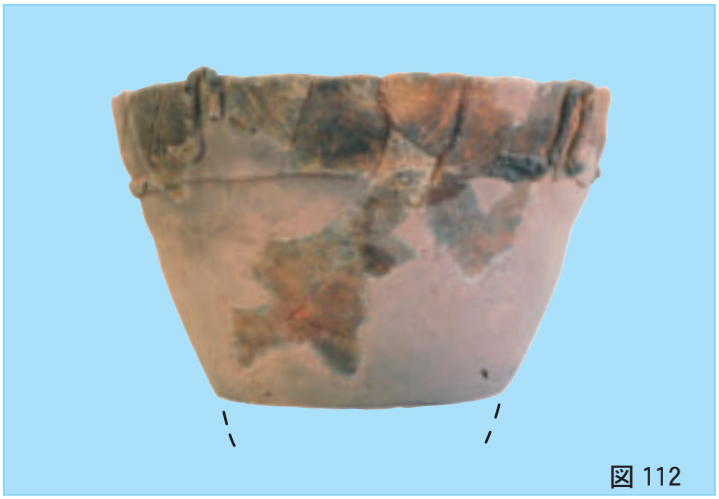
巻首図版12　土器 2（遺物番号は図版番号と一致）













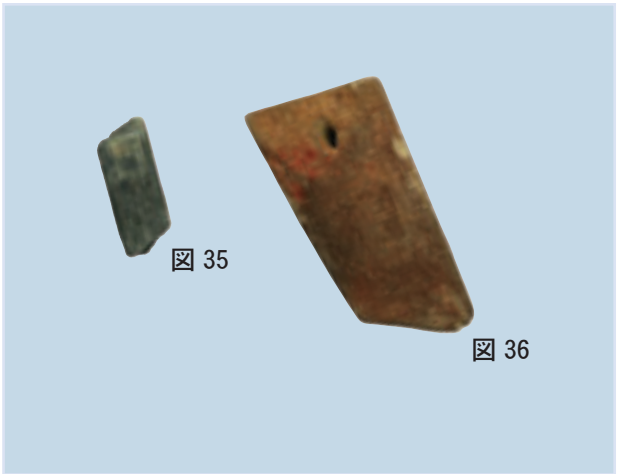
巻首図版13　土器 3（遺物番号は図版番号と一致）



石斧



磨り石



有孔砥石



石皿

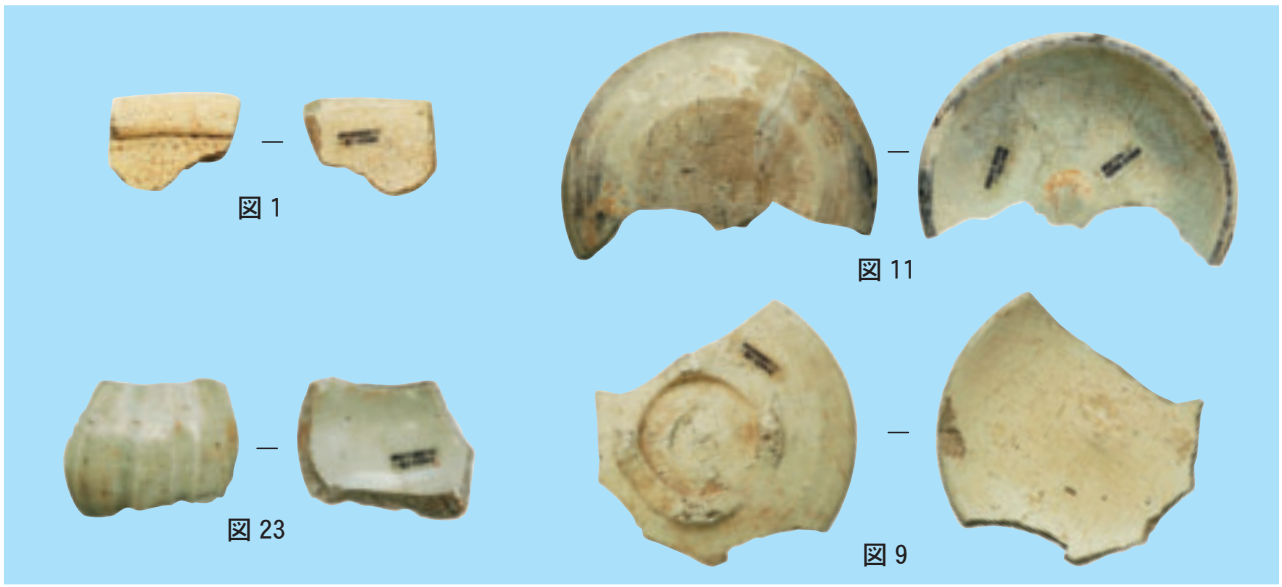
巻首図版14　石器（遺物番号は図版番号と一致）



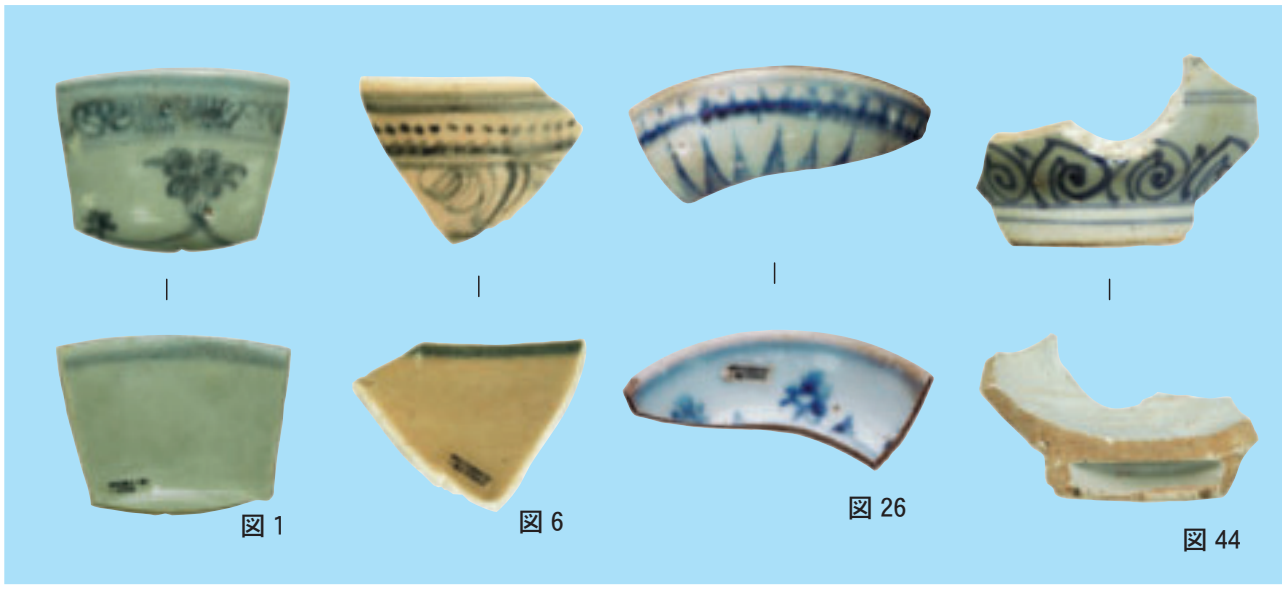




巻首図版15　貝製品・骨製品（遺物番号は図版番号と一致）

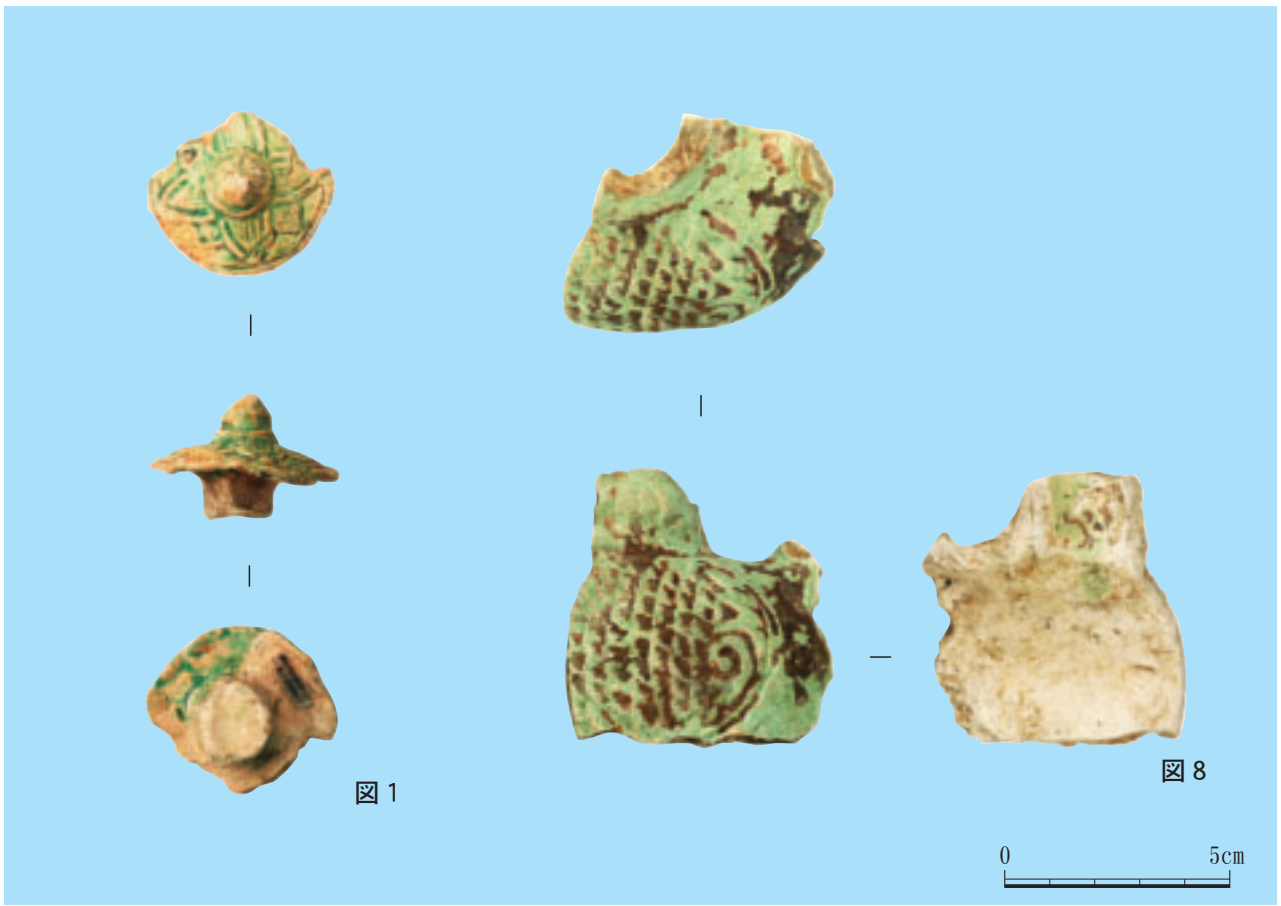




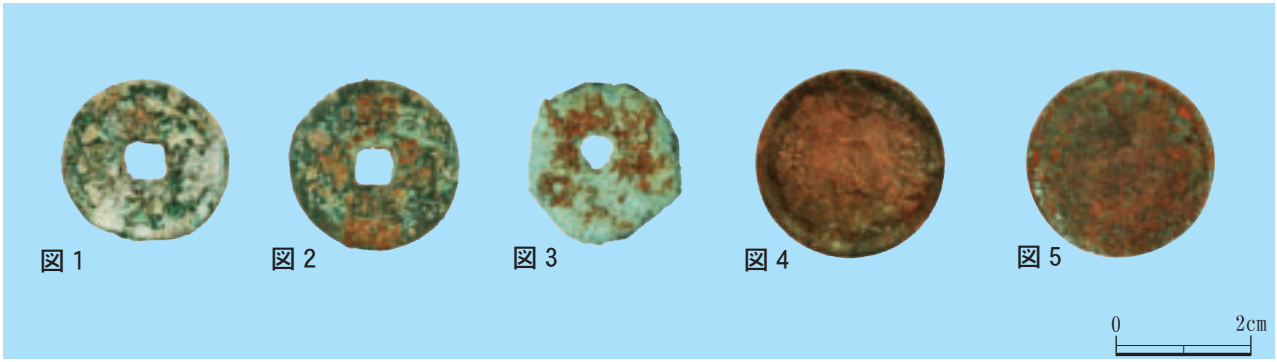


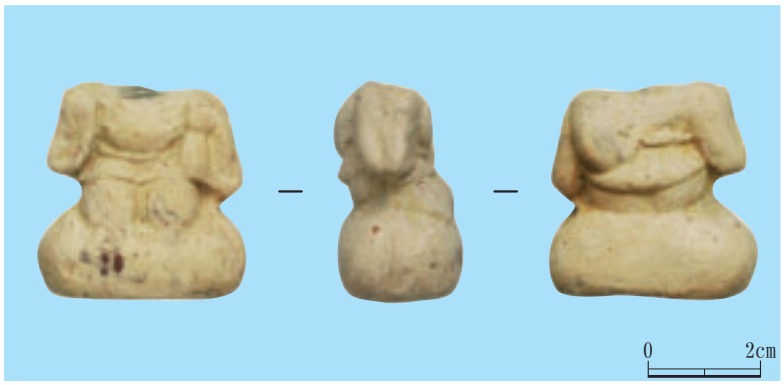
巻首図版16　白磁・青磁・染付（遺物番号は図版番号と一致）

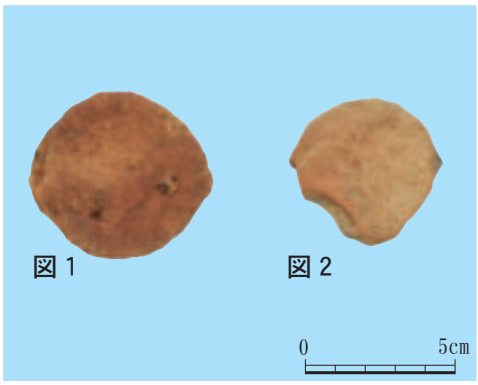




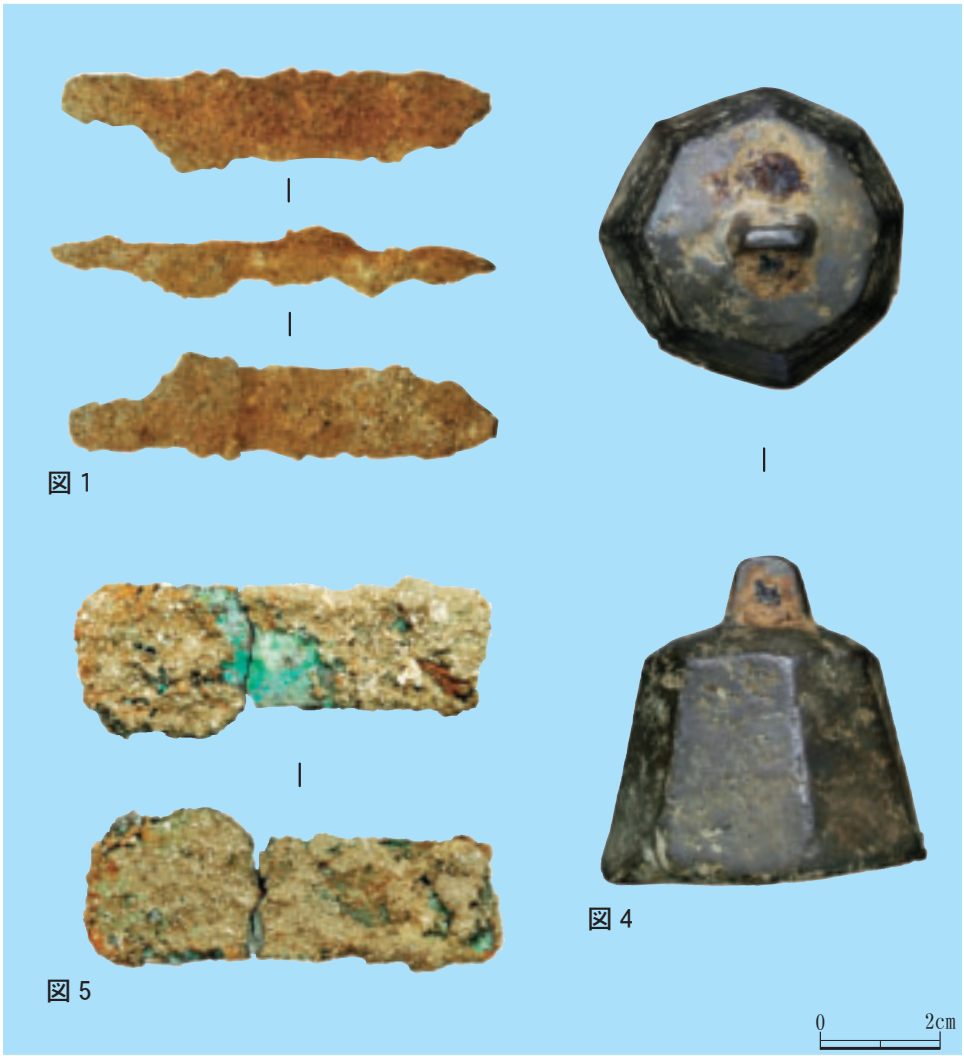
巻首図版17　褐釉陶器・三彩（遺物番号は図版番号と一致）











巻首図版18　銭貨・人形・土製品・簪・金属製品（遺物番号は図版番号と一致）



貝製品　（製品番号 696･812･824）



ゴホウラ貝　（第 59 図③）



イノシシ骨　（第 9 図①）



貝製品　（第 61 図 30）



褐釉陶器　（第 79 図 25）



青磁　（第 72 図 33）

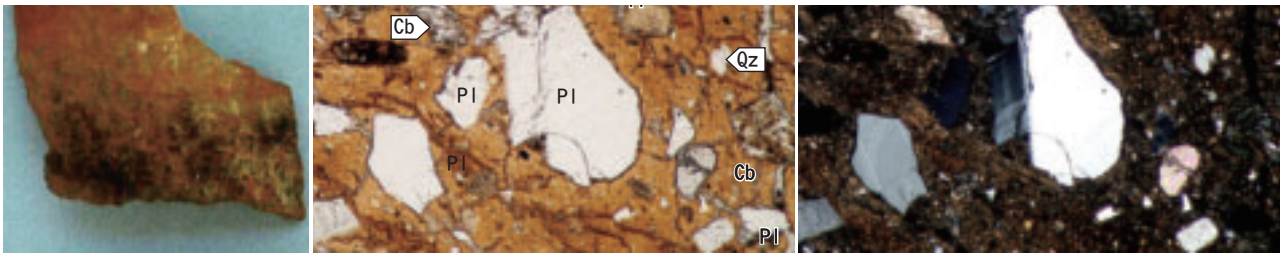


三彩　（第 82 図 8）

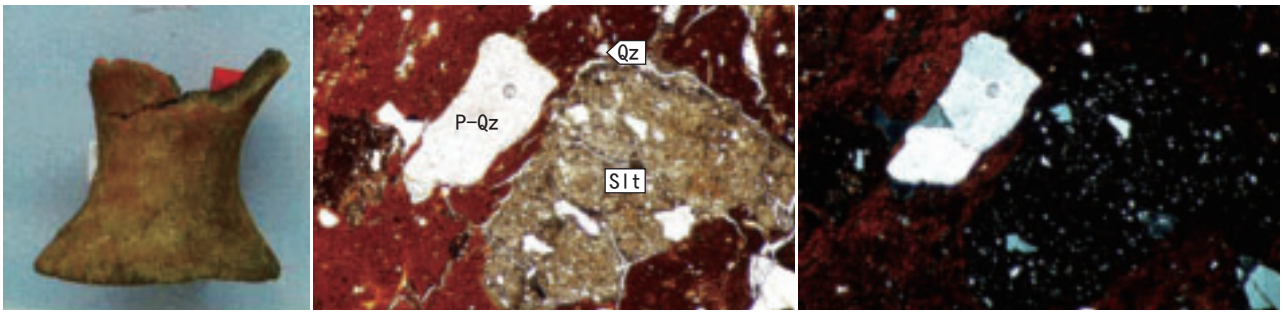


沖縄産無釉陶器　（第 95 図 20）

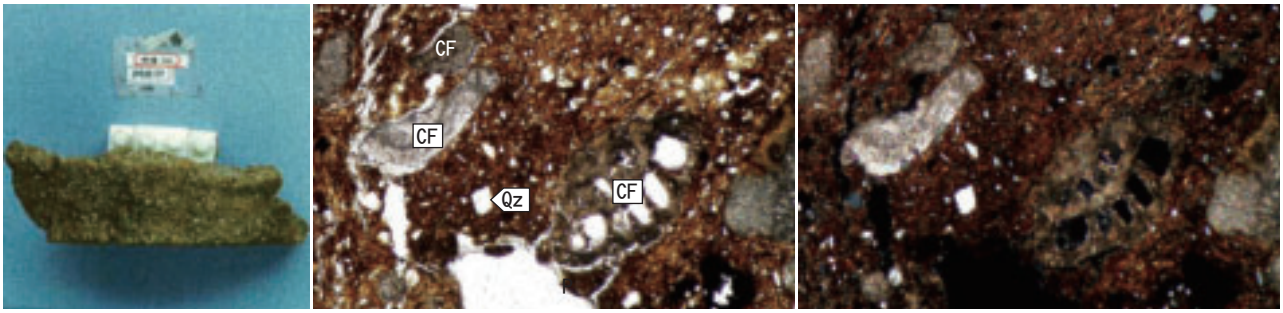
巻首図版19　遺物出土状況 2



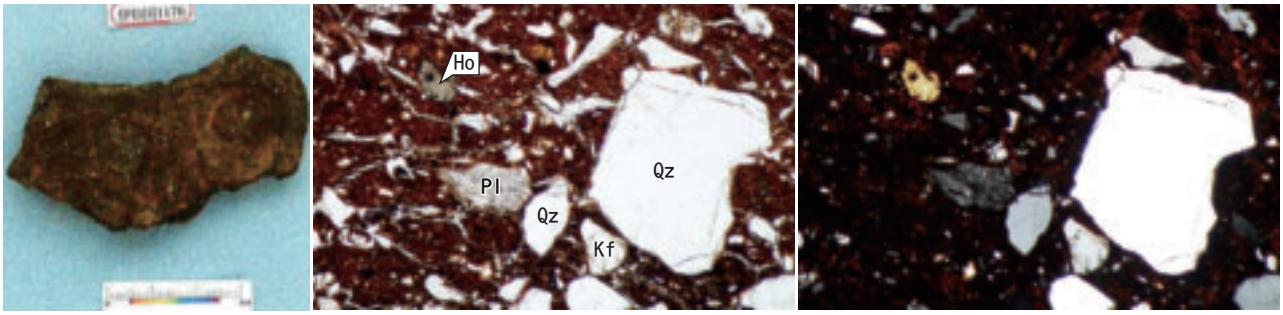
1. **試料番号1**　平安山原B　型式不明　P2白砂層一括下層確認トレンチ3



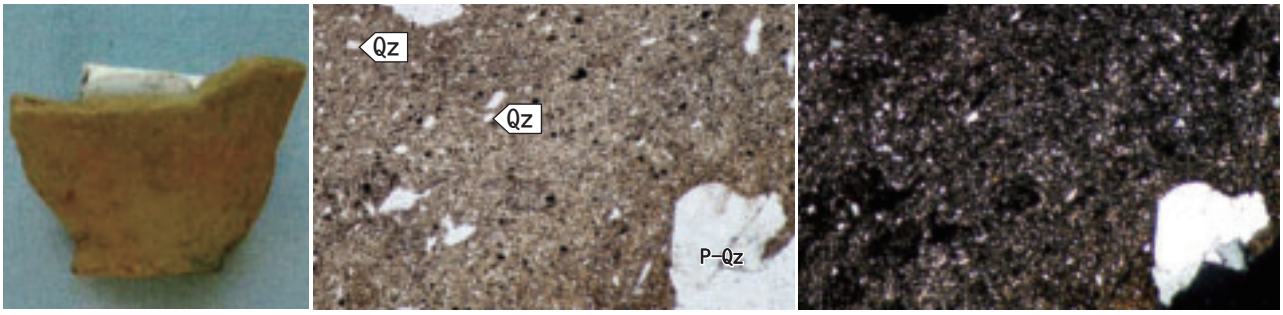
2. **試料番号2**　伊礼原D　スセン當式　第21図33



3. **試料番号3**　伊礼原D　平底(搬入)　第21図27



4. **試料番号4**　伊礼原D　船元系　第20図1

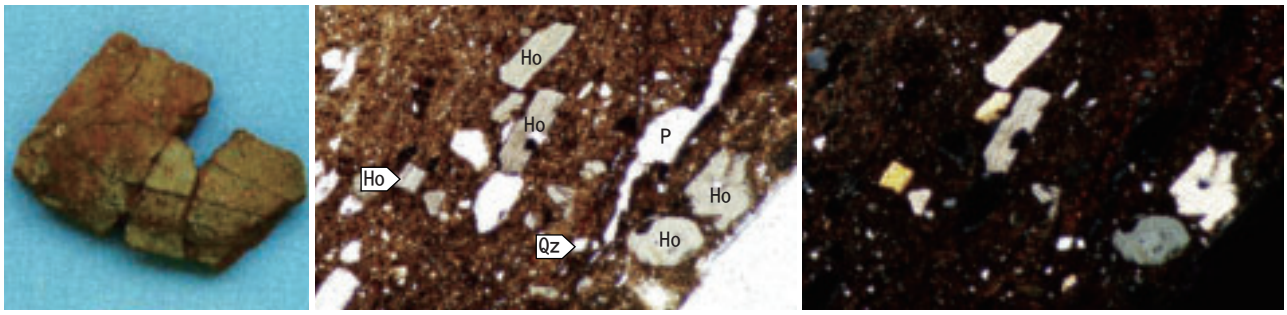


5. **試料番号5**　伊礼原D　くびれ平底(泥)　第39図101

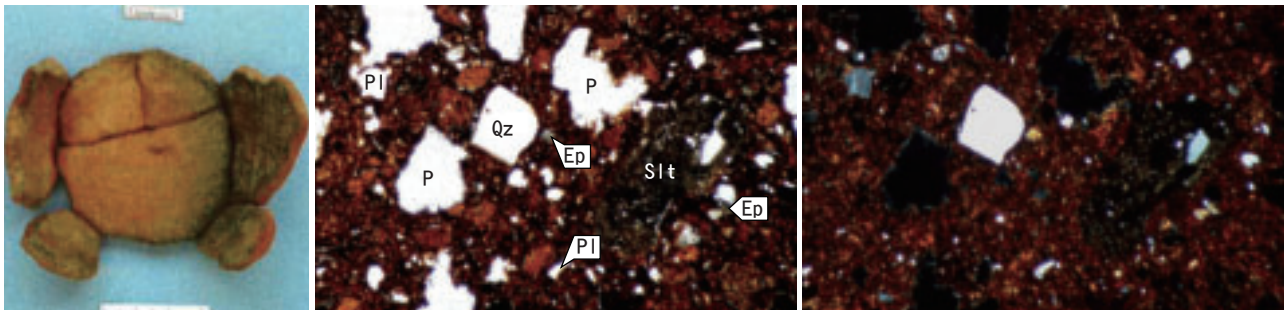
0.5mm

(写真中列は下方ポーラー・写真右列は直交ポーラー下)
Qz：石英．Kf：カリ長石．Pl：斜長石．Ho：角閃石．Cb：炭酸塩鉱物．Tf：凝灰岩．
P-Qz：多結晶石英．Slt：砂質シルト塊．CF：石灰質化石．P：孔隙．

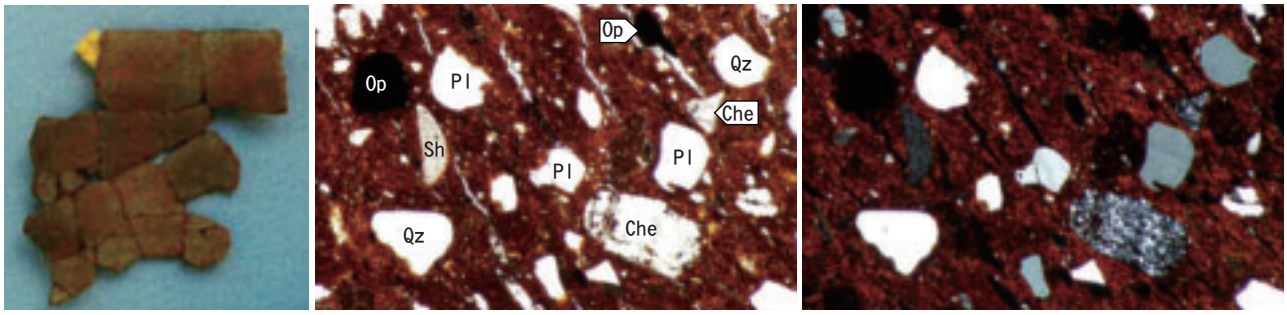
巻首図版20　胎土薄片 1



6. 試料番号7　伊礼原D　有段・沈線文　第29図116



7. 試料番号8　伊礼原D　くびれ平底(砂)　第33図188



8. 試料番号9　伊礼原D　縄文時代晩期系　第22図39

0.5mm

(写真中列は下方ポーラー・写真右列は直交ポーラー下)
Qz：石英．Pl：斜長石．Ho：角閃石．Ep：縁レン石．Op：不透明鉱物．Che：チャート．
Sh：頁岩．P-Qz：多結晶石英．Slt：砂質シルト塊．P：孔隙．

巻首図版 21　胎土薄片 2



4トレンチ　(0001SZ)



0008SF



包含層検出



包含層検出



グスク遺構検出



グスク遺構検出



土器検出



遺物洗浄

巻首図版22　作業風景

第Ⅰ章　調査経緯・経過

第１節　調査に至る経緯

伊礼原Ｄ遺跡は、平成15年３月に返還された在沖米海兵隊基地（キャンプ桑江北側地区）内に位置し、基地返還に先立つ予備調査で発見された「周知の埋蔵文化財包蔵地」である。本報告書は、桑江伊平土地区画整理事業に係る記録保存目的の緊急発掘調査成果をまとめたものである。上記予備調査の結果、キャンプ桑江北側地区には、９遺跡６遺物散布地（延べ13ヘクタール）が確認され、伊礼原Ｄ遺跡が位置する字伊平小字伊礼原160番地一帯には、貝塚時代後期（弥生から平安並行期）とグスク時代、近世の遺構が確認された（註１・２）。

キャンプ桑江北側地区は返還後の跡地利用促進が重要な課題となっており、課題の整理と解決に向け、北谷町内の関係部署間で定期的に会議の場を設けた。埋蔵文化財については、事業調整の段階でほとんどの遺跡が開発行為の影響を受ける事が判明した。その理由として、事業地内のほぼ全域で盛土による造成工事が施工されるためであった。国道58号に東接するキャンプ桑江北側地区は、国道よりも地盤面が低く、大雨時に度々冠水を引き起こしていたことから、返還跡地一帯を盛土造成し上記現象を解消する必要があった。同地域は、本町でも数少ない平坦地であり、かつ、地理的に本町の中心部であることから、返還後は町の中核ゾーンとして、職住近接型の都市環境の創出及び地域活性化を図る計画がなされていた（註３）。返還跡地を有効かつ効率的に利用するためには、国道との段差を解消する盛土造成工事は避けられないものであり、盛土高は、地下の埋蔵文化財に悪影響を及ぼす可能性が十分に考えられる規模も認められた。ただし、盛土の高さが一様ではない事から、盛土の高さや恒久的工作物の範囲を割り出すことにより、緊急発掘調査の対象地及び対象外範囲の抽出作業を進めたが、同作業は困難を極めた。

また、連絡会議と並行して、沖縄県内の政府関係機関、沖縄県並びに北谷町で「キャンプ桑江北側地区跡地利用支援関係機関連絡会議（以下「連絡会議」という。）」が、平成11年９月14日から平成12年10月27日にかけ延べ10回開かれた。連絡会議では、返還跡地で確認された遺跡の取扱等について、調査費用・調査期間・文化財保護・地権者への負担等の総合的観点から、今後の方針を導き出すため検討が行われた。連絡会議では、遺跡の取扱いについて以下の２案が持ち上がった。

１、区画整理事業期間中に対象遺跡の全てを全面調査する。

２、区画整理事業期間中には事業に係る範囲（遺跡の一部）のみを調査し（第１段階）、その他の一般宅地等範囲については、事業完了後に土地所有者が建築行為を計画した時点において、原因者負担や文化庁補助を受けて発掘調査を実施する。

１案のメリット（２案のデメリット）として、

①従前地から埋蔵文化財包蔵地へ換地されないため、この点において地権者へ不利益が生じない。

②第１段階で全ての発掘調査を行うため、２案に比べ調査期間の短縮が考えられる。

が想定され、デメリット（２案のメリット）としては、

①発掘調査を実施した箇所でその後開発行為が行われない場合、不必要な調査となってしまう。

②遺跡の一部のみの調査に比べ調査費用が増大し（減歩率の上昇）、地権者への負担が大きくなる。

③事業完了後に宅地建設の殺到が予想されることから、第２段階の発掘調査の対応が困難となり、地権者に不利益を与える。

が挙げられた。幾多の会議を重ねた結果、最終的には地権者への負担軽減及び盛土高を考慮し、１案を採用する事となった。同時に、現地保存すべき遺跡に伊礼原Ｃ遺跡（当時の名称）が挙げられ、今後は保存範囲を確定させるべく範囲確認調査を継続して取り組む事となった（註４）。

平成15年３月15日には「桑江伊平土地区画整理事業（施行者　北谷町）」が事業認可され、伊礼原遺跡を除く他の遺跡は、現状保存が図れないことから次善の策として記録保存調査を行うこととなった。平成16年10月27日、北谷町教育委員会は、桑江伊平土地区画整理事業施行区域における埋蔵文化財の取扱について北谷町と協定を締結した。

伊礼原Ｄ遺跡における文化財保護法上の手続きとして、北谷町は、文化財保護法第94条第１項の規定に基づき、平成18年８月28日付北区18第3521号「埋蔵文化財発掘の通知について」を町教育委員会に提出、これを受けた教育委員会は、平成18年９月14日付北教社18第1849号で沖縄県教育委員会にこれを進達した。その後、沖縄県教育委員会より記録保存のための発掘調査が必要である旨の回答を受け（平成18年10月２日付教文第1034号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」）、発掘調査は、北谷町から委託を受けて町教育委員会が実施する事となった。町教育委員会においては、他事業との関係による専門員の事務負担量が著しく増大していたため、発掘調査に係る諸作業の軽減を図る目的で、現地調査の測量、発掘作業員の手配及び安全管理を民間組織に業務委託する事とした。

平成19年２月14日には、国際航業株式会社と「平成18年度伊礼原Ｄ遺跡埋蔵文化財発掘調査委託業務」を締結、３月２日から1,000㎡の表土掘削に着手した。その後、調査区の南東側で検出された遺構群が調査区外に広がる様相を示していた事から、関係部署との調整後、同年７月10日には改定契約を行い、東側に470㎡拡張した。下層調査時には未確認の遺物包含層が部分的に確認されたため、平成20年２月７日、国際航業株式会社と「平成19年伊礼原Ｄ遺跡南側埋蔵文化財発掘調査委託業務」を締結し、追加調査を実施した。同年２月29日には現地調査の全てを終了した。

註１　北谷町教育委員会2005『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査―伊礼原Ｂ遺跡ほか発掘調査事業―』

註２　北谷町教育委員会2008『伊礼原Ｄ遺跡―キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業（平成10年～13年度）―』

註３　返還に先立つ平成10年３月には、共同使用という形態で北谷町役場新庁舎がキャンプ桑江北側地区内に建設されている。

註４　同遺跡はその後『伊礼原遺跡』と名称が改められ、平成22年２月22日に約17,000㎡が国史跡に指定されるに至った。

第２節　調査体制

調査体制は以下のとおりである。

事業主体	教　育　長	瑞慶覧　朝　宏（平成18・19年度）
	同	川　上　啓　一（平成24・25年度）
事業総括	教 育 次 長	阿波根　　進（平成18年度）
	同	謝　花　良　継（平成19年度）
	同	大　城　　操（平成24年度）
	同	比　嘉　良　典（平成25年度）
	社会教育課長	大　城　　操（平成18・19年度）
	同	嘉陽田　朝　栄（平成24年度）
	同	比　嘉　敬　文（平成25年度）

調査総括	文化係長	中　村　　愿	（平成18・19年度）
	同	嘉陽田　朝　栄	（平成19年度）
	同	米　須　　健	（平成24・25年度）
調査担当	主任主事	山　城　安　生	（平成19・24年度）
	同	東　門　研　治	（平成18・19・24・25年度）
	同	松　原　哲　志	（平成24・25年度）
	主　　事	松　原　哲　志	（平成18・19年度）

発掘調査及び資料整理作業員

（平成18年度）

嘱託　上間真寿美・佐久間クリエ・島袋保・照屋元子・豊里初江・仲田浩二・東順子・細川愛
山城小百合

臨時　新城とよ子・大城俊・古謝かなえ・知念栄子・知念真衣・前田武士・山田裕二

（平成19年度）

嘱託　新城とよ子・上間真寿美・佐久間クリエ・島袋春美・知念栄子・照屋元子・豊里初江
西原美草・東順子・細川愛

臨時　青木絵美・池原絵利香・池宮秀晃・喜友名香織・喜友名正和・黒須裕太・幸地　優
島田靖之・曽木菊枝・照屋久洋・比嘉　学・松長　稔・吉田美百合・湧川　卓・渡辺美幸

（平成24年度）

嘱託　上地千賀子・上間真寿美・大城　光・呉屋広江・佐久間クリエ・島袋春美・曽木菊枝
知念栄子・照屋元子・富平砂綾子・豊里初江・西原美草・東順子・山城小百合

臨時　島袋　和・城間志津香・祖堅弥生・照屋朝子・渡嘉敷ゆみ子・普久原香・宮里由夏
湧川米子

（平成25年度）

嘱託　上地千賀子・上間真寿美・大城　光・呉屋広江・佐久間クリエ・島袋春美・曽木菊枝
知念栄子・照屋元子・富平砂綾子・豊里初江・西原美草・東順子・山城小百合

臨時　稲嶺律子・金城綾乃・城間志津香・田中英子・仲栄真麻美・宮里美也子

（平成18・19・24年度）

北谷町シルバー人材センター

発掘調査及び資料整理に係る業務委託

（平成18年度）

伊礼原Ｄ遺跡埋蔵文化財発掘調査委託業務委託　国際航業株式会社

（平成19年度）

伊礼原Ｄ遺跡南側埋蔵文化財発掘調査委託業務委託　国際航業株式会社

（平成22年度）

伊礼原Ｄ遺跡出土樹根の放射性炭素年代測定業務委託　パリノ・サーヴェイ株式会社

伊礼原Ｄ遺跡の自然科学分析業務委託　パリノ・サーヴェイ株式会社

調査指導及び助言（敬称略、所属五十音順）

おきなわ石の会	大城逸朗
沖縄県教育庁文化課	島袋洋・知念隆博
沖縄市文化財調査審議会	比嘉賀盛
宜野湾市立博物館	知念勇
鹿児島大学法文学部	渡辺芳郎
史跡鴻池新田会所管理事務所	松田順一郎
千葉県立中央博物館	黒住耐二
土井ヶ浜人類学ミュージアム	松下孝幸
琉球大学医学部	土肥直美
早稲田大学教育学部	樋泉岳二

第３節　調査経過

発掘作業

発掘作業は平成18年度から平成19年度にかけて実施し、資料整理作業は平成24年度から25年度にかけて実施した。以下、年度毎に記述する。

（平成18年度）

平成18年度は、２月下旬から調査区設定に取りかかり（1,000㎡）、磁気探査実施後の３月からは重機による表土（米軍基地造成土）掘削を行った。予備調査の成果から、表土厚は１ｍ前後である事が判明していたため機械力で一気に掘り下げた。造成土の除去後、旧地表面の砂質層上面に５ｍ間隔でグリッド杭を打設、３月15日には新規入場作業員に安全教育を実施し、翌16日からはベルトコンベアの設置等、環境整備と人力掘削を開始した。人力掘削では、確認調査時に埋め戻したトレンチ内の遺構を再検出し、周囲の遺構検出の指標とした（遺構番号0008SF）。３月30、31日には0008SF の検出状況の写真撮影を行い、18年度の調査は終了した。

（平成19年度）

平成19年度は４月２日から現場作業を開始した。初めに、調査区の南西側から遺物包含層の掘削を開始し、掘削作業を追いかけるように遺構検出作業を並行して行った。遺物包含層は、上層（Ⅱ層）・下層（Ⅲ層）に分けられ、上層は下層が削平された後に堆積している様相が見られた（詳細は「第Ⅲ章第２節層序」に記述）。包含層からは、沖縄貝塚時代後期（以下、本章で「貝塚後期」）の土器や沖縄産陶器等の遺物が混在して出土し、上記の堆積状況に起因するものと考えられた。

Ⅲ層を掘削すると１㎡当たり６基程度の密度でピットが検出され、特に南壁付近の17・18ラインでは高密度のためプランの把握は困難であった。４月20日からは遺構掘削に取りかかり、５月11日にはスカイマスターを用いて完掘状況の写真撮影を行った。調査区南東側では、調査区外に遺構が広がる様相を示していた事から、町内関係部署との調整後、７月10日に国際航業株式会社と改定契約を締結し東側に470㎡拡張した。８月20日には境界測量を行い、翌日からは磁気探査と並行して重機による表土掘削を行った。磁気探査では６インチの艦砲弾が確認されたため、町内関係部署、沖縄警察署及び那覇防衛施設局（当時）に報告し、９月４日には自衛隊による撤去作業が行われた。９月中旬までには遺構検出を終え、全景の写真撮影を行い遺構掘削へ移行した。拡張した調査区中央の東壁付近では、直径約12ｍの落ち込みが確認された（遺構番号4409SX）。自然地形か人為的な

掘り込みかを確認するためサブトレンチを設定したところ、地山の砂層と埋土が互層を成していた事から自然地形と判断した。埋土は粘性の強い腐植土で、くびれ平底土器が主体的に出土しており、貝塚後期の後背湿地の一部と捉えた。10月17日には遺構掘削完了の写真撮影を行い、同26日にはNHKによるテレビ取材班が調査風景の取材に訪れた。平成20年２月７日には、下層確認調査にて部分的に認められた遺物包含層の性格を把握するため、国際航業株式会社と「平成19年伊礼原Ｄ遺跡南側埋蔵文化財発掘調査委託業務」を締結し、約50㎡の追加調査を実施した。

追加調査では、Ｖｂ層から貝塚後期の土器のほかイノシシなどの獣骨がまとまって出土したが、遺構は確認されなかった。Ｖｂ層の下位層にて遺物包含層が無いことを確認し、平成20年２月29日に全ての現地調査を終了した。

整理作業

本発掘調査から出土した遺物量は、標準的な遺物コンテナ（60cm×40cm×15cm）233箱であった。整理作業は、現場作業の雨天時を利用して遺物の洗浄・乾燥及び脆弱遺物の強化を行い、本格的な作業は現地調査終了後の平成24年度から開始した。乾燥後の出土遺物はナンバリングや接合作業等を行い、特徴的な資料を実測した。遺物実測図及び現場作業で作成した層序図や遺構図等は全てスキャンし、パソコン上でデジタルトレース作業を行った。報告書掲載写真はデジタルカメラで撮影したものを用い、35mmフィルムカメラの資料はアルバムにて整理・保管した。現場作業中に採取した炭化物やサンプル試料については、専門機関へ調査依頼・業務委託を行った。

第Ⅱ章　位置と環境

位置と周辺環境

北谷町は、沖縄本島中部の西海岸、県庁所在地の那覇市から北東約 16km に位置する。町の総面積は 13.78km^2 で、南北約 6km、東西約 4.3km。北は嘉手納町、東は沖縄市と北中城村、南は宜野湾市に接している。西は全域が東シナ海に面し、沖縄島の形で見ると中南部にかけてくびれた部分にあたり、彼方に慶良間諸島、高所からは浦添市から読谷村までの内湾する海岸線が眺望される。町役場の位置は、北緯 26 度 18 分 58 秒、東経 127 度 45 分 55 秒で、その北西約 700 mに伊礼原Ｄ遺跡は所在する。

本遺跡を第二次大戦中・戦後の米軍撮影航空写真や地形図などを参考に見ると、遺跡背後には標高約 20 ～ 30 mの丘陵が北東から南西方向に伸び、その谷間を抜けた低地では西側に蛇行し海へ至るナガサ（河川）が流れている。この河川東岸に当たる標高約 3.5 mの沖積低地に本遺跡は立地する。

戦後は米軍基地（キャンプ桑江）整備により、ナガサは本遺跡南側に流路変更され、遺跡を分断したものと見られる。本遺跡は貝塚時代後期、グスク時代の集落址、戦前の旧集落背後の耕作地の複合遺跡で、国指定史跡伊礼原遺跡のグスク時代の範囲とは同一遺跡(註1) と考えられる。本遺跡の範囲として捉えた内陸側の一部は縄文海進の痕跡等を有する範囲として国指定範囲となった経緯がある。

地理的環境

本町の地形を概観すると、台地・丘陵・カルスト地形・低地・海浜・サンゴ礁・埋立地などが見られ、東側には台地や丘陵、西側は低地や海浜が広がり、東から西に階段状に低くなる海岸段丘を成す。

海岸段丘の標高は 100 m以上の中位段丘上位面、100 ～ 50 mの中位段丘下位面、50 ～ 30 mの低位段丘面に分かれる。最高値 123 mが見られる台地は侵食により起伏に富んだ地形を呈している。

主な河川には、町域南側を流れる普天間川（佐阿天川）と町域中央部付近を流れる白比川があり、概ね白比川を境に東側の台地の縁辺部に小さな解析谷が発達し、湧水や河川が見られ、白比川以北では「ナルカー」、「クシヌカーラ」、「ナガサ」などが西流する。

町域北側には、石灰岩段丘下位面やカルスト地形の洞穴や石灰岩残丘、陥没ドリーネが見られ、白比川から南側では石灰岩段丘下位面と小起伏丘陵や石灰岩堤が見られ、主な湧水には「北谷ターブックヮ」と称された水田の源流であった町指定文化財の「チブガー」がある。

低地は谷底低地と海岸低地に分けられ、前者は大部分がジャーガル（泥岩層の風化土壌）、後者は海成砂を主体とするが、表層部はジャーガルやマージ（琉球層群の風化土壌）が堆積する。

海浜にはサンゴ礁が発達しているが、礁池（イノー）はあまり見られず、干潮時には干上がる礁原（ヒシ）だけで構成される。このサンゴ礁には、前述した河川などからの淡水の流入による深い切れ目も見られる。海岸部は公有水面埋立、人工ビーチ・護岸整備が行われ自然の海浜は僅かである。

地質をみると島尻層群を基盤に琉球層群が不整合に覆い、低地では琉球層群を沖積層が不整合に覆っている。琉球層群は大きく南北に区分され、北側が沖縄本島北部の非石灰質の国頭礫層、南側が沖縄本島中南部の石灰質の琉球石灰岩層をなしている。そのため、植生も北部に生育するイタジイ・イジュ・ヤマモモ等と、中南部に生息するアカギ・オオバギ・ヤブニッケイ等があり、本町の

台地・丘陵部は、両方の植物が混生している。しかし、戦争による破壊、戦後の米軍基地整備や戦後復興の狭小な丘陵地から始まる帰村、宅地開発に伴って土地は改変され、自然植生は一部の御嶽や拝所、墓所、城跡等のまわりや台地斜面に残るのみである。

歴史的環境

第二次大戦以前の北谷村は、近世の行政区域を近代までほぼ引き継いだ琉球王府時代の間切の範囲で、米軍上陸により基地使用が開始され極東最大の嘉手納基地によって現在の北谷、嘉手納に分村し現在に至る。本町では字砂辺に戦前の集落の様相を窺えるが、米軍の土地収容や基地整備によって、軽便鉄道から眺望された集落、「北谷ターブックヮ」と称された水田や畑の景観は失われた。

本町では現在、53 件の遺跡が確認されそのうち指定遺跡は国指定史跡 1 件、町指定文化財 4 件の合計 5 件である。町域の 53%を占める基地内に所在するものが多い。

北谷の村落変遷は、1609 年の島津侵入以前の歌謡集『おもろそうし』に「きたたん」・「くわい」など 5 つが見えており、その後 1649 年の「絵図郷村帳」では 9 ヶ村、「伊礼」「玉代勢」「伝道」などは 1670 年代に成立したと推測されている(註2)。その後、18 世紀末から 19 世紀始め頃に首里・那覇から移り住んだ士族による屋取集落が形成されたと考えられている。

近世の集落以外の遺跡としては古墓群があり、丘陵地の基盤の石灰岩を利用した横穴式の墓が見られる山川原古墓群や大作原古墓群などがあり、米軍基地内に点在する。

1840 年に台風によって座礁したイギリスの輸送船インディアン・オーク号の座礁地からは、中国産染付や銅製釘、ワイン瓶破片等の遺物が出土しており、現存する航海日誌から乗務員に対して行った北谷の人々や王府の様子を窺い知ることができる(註3)。

さらに時代を遡って遺跡を概観すると、町域東側の台地に旧石器時代の鹿化石出土地と桃原洞穴遺跡があり、後者は化石人骨（頭蓋骨）が検出され、鈴木尚氏により桃原洞人と命名されている。

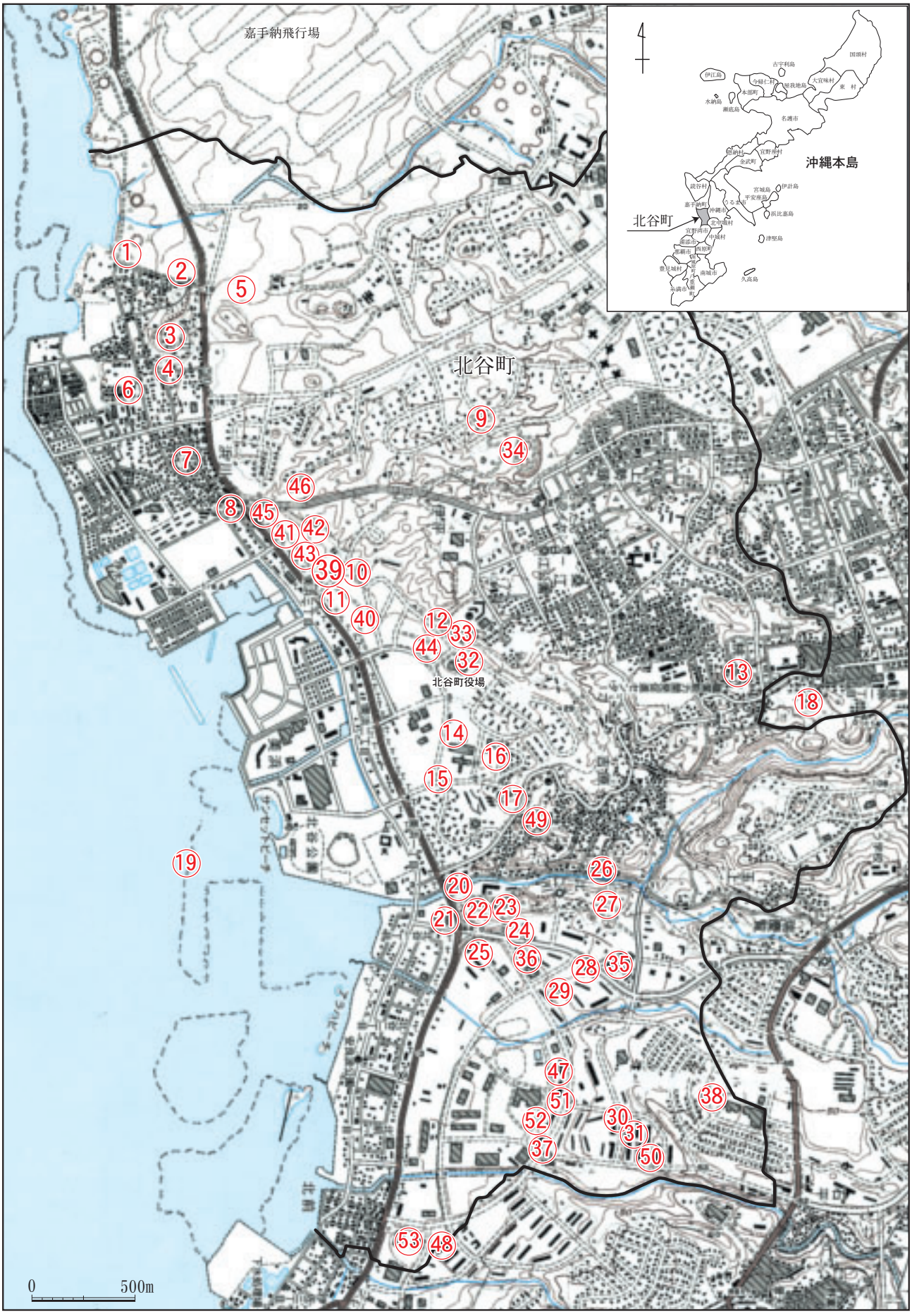
縄文時代に比定する遺跡は 12 遺跡あり、町北側の砂辺集落背後の石灰岩残丘に所在する砂辺貝塚からは台地上で縄文晩期の方形竪穴住居址、クマヤー洞穴遺跡は陥没ドリーネの洞穴で、縄文前期からグスク時代の遺物が得られ、特に縄文晩期の改葬人骨が多数検出され、グスク時代には祭祀場所として利用されたと考えられている。

平成 22 年に国指定史跡になった伊礼原遺跡は、沖縄諸島の先史時代からグスク時代までの編年体系が網羅できるほどの遺物が得られ、沖縄諸島最古の土器とされる爪形文土器、九州の縄文前期の曽畑式土器、室川下層式土器、面縄前庭式土器、宇佐浜式土器、縄文晩期系土器、弥生式土器、貝塚後期系土器、グスク時代の白磁玉縁口縁碗、滑石製品、カムィヤキ、青磁、染付などが出土した複合遺跡である。生活の場も丘陵側の湧水に近い低湿地区から砂丘へと展開するなど長きに亘る利用、自然災害の痕跡が砂丘の堆積に見られるなど各時期の変遷も含めた成果が明らかとなった。

伊礼原遺跡の南東側に位置する伊礼原Ｅ遺跡は、沖縄において初めて縄文が施文された土器（船元系土器）が確認され、また津波による自然災害を受けたことが明らかになった遺跡である。

貝塚時代後期（弥生～平安並行期）に比定する遺跡は 16 遺跡ある。主に沖積低地の砂地に立地しており、字砂辺北側の砂辺サーク原貝塚、基地返還跡地（旧キャンプ桑江北側）の沖積低地に立地する本遺跡や平安山原Ａ～Ｃ遺跡、伊礼原遺跡（砂丘区）、伊礼原Ｅ遺跡、小堀原遺跡などがある。これらの遺跡では、住居址や貝集積遺構、在地土器の浜屋原式土器・大当原式土器・アカジャンガー式土器などの出土に伴って弥生式土器の出土も見られ、貝製品（貝交易に関連する貝輪、ホラガイ製容器、漁網錘等）、サンゴ礁に棲息する大形貝や動物骨などの食料残滓が出土している。

グスク時代（おおよそ 12 ～ 17 世紀前半）に属する遺跡は 25 遺跡あるが、丘陵（石灰岩堤）に



第２図　北谷町の位置と遺跡分布

第１表　北谷町遺跡一覧

2012 年現在

No.	遺　跡　名	時　期	所　在　地
1	砂辺（すなべ）サーク原貝塚	弥生～平安並行期	字砂辺差久原
2	砂辺サーク原遺跡	縄文後期～近世	字砂辺加志原
3	砂辺貝塚	縄文後期～グスク	字砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	弥生終末～平安並行期	字砂辺加志原
5	カーシーノボントン遺物散布地	縄文晩期	字砂辺加志原
6	クマヤー洞穴遺跡	縄文前期～戦前	字砂辺村内原
7	浜川千原岩山（はまがわせんばるいわやま）遺物散布地	縄文晩期	字浜川浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	弥生終末～平安並行期	字浜川浜川
9	上･下勢頭区古墓群（かみ・しもせどくこぼぐん）	近世	字上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原･下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原（いれいばる）遺跡	縄文早期～戦前	字伊平伊礼原
11	伊礼原Ｂ遺跡	縄文前期～晩期・近世・戦前	字伊平伊礼原
12	桑江ノ殿（くわえのとぅん）遺物散布地	グスク～近世	字桑江小堀原
13	鹿化石出土地	旧石器	字吉原栄口原･桃原
14	前原古島（めーばるふるじま）Ａ遺跡	近世	字桑江桑江原･前原
15	前原古島Ｂ遺跡	近世	字桑江前原
16	伊地差久原（いじさくばる）古墓	近世	字桑江伊地差久原
17	前原古墓群	近世	字桑江前原
18	桃原（とうばる）洞穴遺跡	旧石器	字吉原東新川原
19	インディアン･オーク号の座礁地	近世	字北谷地先
20	池（いち）グスク	グスク	字吉原東字地原･西字地原
21	白比川（しらひがわ）河口遺物散布地	縄文前期	字北谷西表原
22	北谷城（ちゃたんぐすく）遺跡群	平安並行期～グスク	字大村城原
23	北谷城	平安並行期～グスク	字大村城原
24	北谷城第７遺跡	弥生～グスク	字大村城原
25	北谷番所址	グスク	字北谷北谷原
26	吉原東角双原（よしはらあがりちぬまたばる）遺物散布地	グスク	字吉原東角双原･西角双原
27	山川原（やまがーばる）古墓群	近世	字大村山川原
28	玉代勢原（たまよせばる）遺跡	平安並行期～グスク	字大村玉代勢原
29	長老山（ちょうろうやま）遺物散布地	グスク～近世	字大村玉代勢原
30	大道原（うふどうばる）Ａ遺跡	グスク	字北谷大道原
31	大道原Ｂ遺跡	縄文晩期	字北谷大道原
32	後兼久原（くしかにくばる）遺跡	グスク	字桑江後兼久原､字桑江小堀原
33	ジョーミーチャー古墓	グスク	字桑江小堀原
34	伊礼伊森原（いりーいーむいばる）遺跡	グスク	字上勢頭伊礼伊森原
35	後原（くしばる）遺跡	グスク～近世	字大村玉代勢原
36	塩川原（すーがーばる）遺跡	グスク	字北谷塩川原
37	稲干原（んにふしばる）遺跡	弥生並行期	字北前稲干原
38	横嵩原（よこたけばる）遺跡	グスク	字北前横嵩原
39	**伊礼原Ｄ遺跡**	弥生～グスク	字伊平伊礼原
40	伊礼原Ｅ遺跡	縄文前期～近世	字伊平伊礼原
41	平安山原（はんざんばる）Ａ遺跡	グスク～近世	字伊平平安山原
42	平安山原Ｂ遺跡	弥生～近世	字伊平平安山原
43	平安山原Ｃ遺跡	弥生～近世	字伊平平安山原
44	小堀原（くむいばる）遺跡	弥生～近世	字桑江小堀原
45	千原（せんばる）遺跡	グスク	字伊平千原
46	大作原（うふさくばる）古墓群	近世	字伊平大作原
47	東表原（あがりうむてぃばる）遺跡	縄文晩期	字北谷東表原
48	新城下原（あらぐすくしちゃばる）第２遺跡	縄文早期～近世	字北谷安仁屋原
49	東宇地原（あがりうじばる）古墓群	近世	字伝道原東宇地原
50	大道原Ｃ遺跡	近世	字北谷大道原
51	大道原Ｄ遺跡	グスク	字北谷大当原
52	高畔原（たかぶしばる）水田跡	近世～戦前	字北谷高畔原
53	安仁屋原（あにやばる）遺跡	グスク～近世	字北前安仁屋原

註：時代表記は概ね「縄文時代」→「貝塚時代前期」、「弥生～平安並行期」→「貝塚時代後期」、「グスク」→「12 ～ 17 世紀前半」、「近世」→「17 世紀後半～明治以前」、「戦前」→「1945 年以前」

《参考文献》

①中村愿･田場勝也ほか「北谷町の遺跡－詳細分布調査報告書－」『北谷町文化財調査報告書』第 14 集　北谷町教育委員会　1994 年
②中村愿･東門研治･島袋春美『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査－伊礼原Ｂ遺跡ほか発掘調査事業』北谷町文化財調査報告書　第 23 集　北谷町教育委員会　2005 年 3 月
③中村愿･東門研治･松原哲志･島袋春美ほか　伊礼原Ｂ遺跡･伊礼原Ｅ遺跡　『キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業（平成 10 ～ 14 年度)』北谷町文化財調査報告書　第 27 集　北谷町教育委員会　2008 年 3 月

＊番号は位置図に付随

立地する連郭式の城壁を有している北谷城（グスク）は、フェンサ下層式土器も出土するが 14 ～ 15 世紀の中国産の青磁や褐釉陶器などが得られており、このころが盛行期と考えられている。

北谷城とほぼ同時期の中国産陶磁器が出土し、「吹出原型掘立柱建物」の類似が見られる掘立柱住居址と高床式建物址がセットで確認され、砂鉄貯蔵穴、木棺墓の可能性がある土坑墓、畠跡などが検出された集落遺跡の後兼久原遺跡が丘陵麓と低地に立地し、類似する住居址や建物址、土壙墓などが確認され、沖縄県内最古（10 ～ 12 世紀）の麦、稲が確認された小堀原遺跡（2012）は緩斜面地から低地にかけて立地し、丘陵地では、水田または畑の可能性が考えられた谷間を横断する石列が検出された伊礼伊森原遺跡がある。

註１：北谷町教育委員会　2006『伊礼原Ｄ遺跡』北谷町文化財調査報告書　第 28 集

註２：北谷町役場　1986「北谷の村落変遷」『北谷町史　第二巻　資料編１前近代編 近代文献資料』

註３：北谷町役場　1986「インディアン・オーク号海難救助関係資料」『北谷町史　第二巻　資料編１前近代　編近代文献資料』

〈引用・参考文献〉

北谷町教育委員会　1994『北谷町の遺跡―詳細分布調査報告書―』

北谷町教育委員会　2007『伊礼原遺跡―伊礼原Ｂ遺跡ほか発掘調査―』

北谷町総務部企画財政課　2009『沖縄県北谷町・町勢要覧』

北谷町教育委員会　2005『北谷町史　第１巻　通史編』

北谷町　2010『北谷町緑の基本計画基礎調査〈報告書〉』

北谷町教育委員会　2006『北谷町の地名－戦前の北谷の姿－』北谷町文化財調査報告書　第 24 集

北谷町教育委員会 2005『キャンプ桑江返還に伴う試掘調査』 北谷町文化財調査報告書　第 23 集

北谷町教育委員会　2012『小堀原遺跡』北谷町文化財調査報告書　第 34 集

北谷町教育委員会　2012　史跡『伊礼原遺跡』保存管理計画書



第１図　伊礼原Ｄ遺跡の位置とキャンプ桑江北側地区の遺跡

第Ⅲ章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

調査区及びグリッド設定

調査地は、確認調査の結果を踏まえ伊礼原160番地一帯の標高4.0～5.5ｍの平坦地に定めた。地区割りについては、今後の桑江伊平土地区画整理事業地内における発掘調査でも整合性がとれるよう統一性を持たせた。具体的には、100m ×100ｍの大グリッドで事業地内全体を覆い、大グリッドの中には５ｍ× ５ｍの小グリッドを設定した。グリッド名称は、大小ともグリッドの北東を基準に南東へ01～20、南西へＡ～Ｔとし（第３図）、本調査区は大グリッドＡ５の一部とＢ５の範囲内に位置する。

・表土掘削

調査区の設定後、磁気探査を実施し機械力を用いて表土掘削を行った。磁気探査では、汚水管や鉄屑等、米軍基地に帰属する金属類が認められた。また、不発弾のほか磁気探査では探知できない小銃弾等も出土したが、これらについては関係部署と調整し自衛隊や警察が回収した。表土掘削ではこれら金属類を撤去しつつ、バケット容量0.8㎥のバックホウ３台と10ｔダンプ３台にて米軍基地建設時の造成土及び確認調査時の埋土の一部を掘削・運搬した。

・包含層掘削及び遺構検出

遺物包含層は、遺物量や出土状況に応じて小形のスコップや手鍬、ねじり鎌を用いて掘削を行った。出土遺物は層位・グリッド毎に取り上げ、特徴的な遺物や一括遺物については実測図作成と写真撮影を行った。遺構検出作業は基本的にジョレンを用いたが、より精査が必要な箇所についてはねじり鎌を用いた。排土はベルトコンベアを使用して場外搬出し、バックホウ及びダンプトラックを用いて残土置き場へ運搬した。

・遺構掘削

遺構は基本的に長軸で半截し、溝は規模に応じて２～４箇所程の土層観察用畦を残し掘削した。

・記録作業

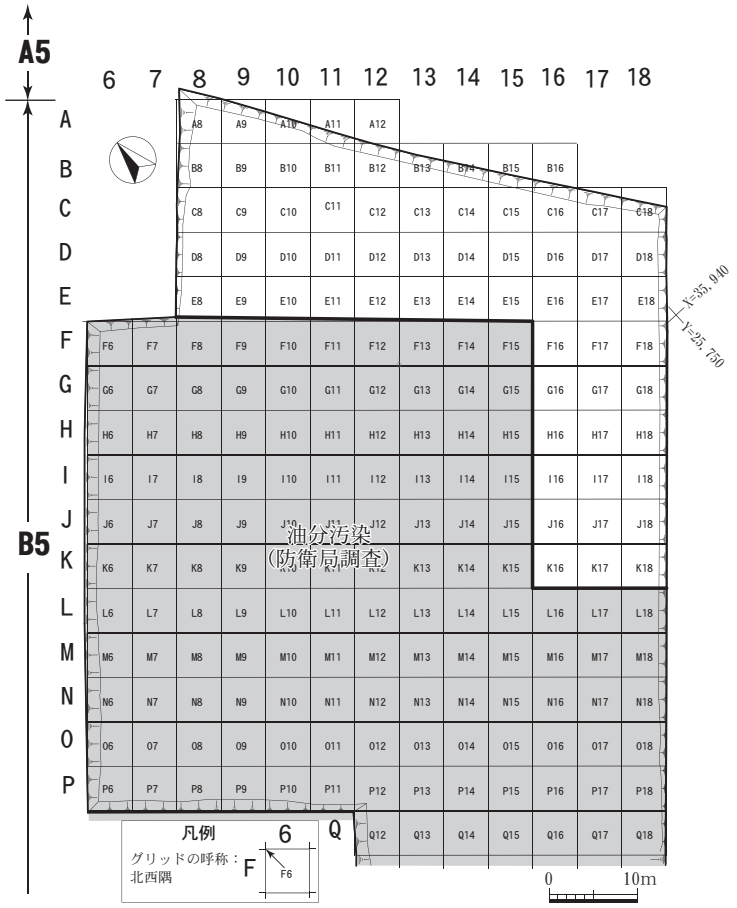
実測は基本的に電子平板を用いて行い、重要遺構については手実測も併用して行った。写真撮影では、35mm フィルムカメラと600万画素のデジタルカメラ、中判カメラ（6×7）を用い、フィルムカメラでは、カラーリバーサル、モノクロを使用した。全景写真については、状況に応じてラジコンヘリコプター・高所作業車を使用して撮影した。

・自然科学分析

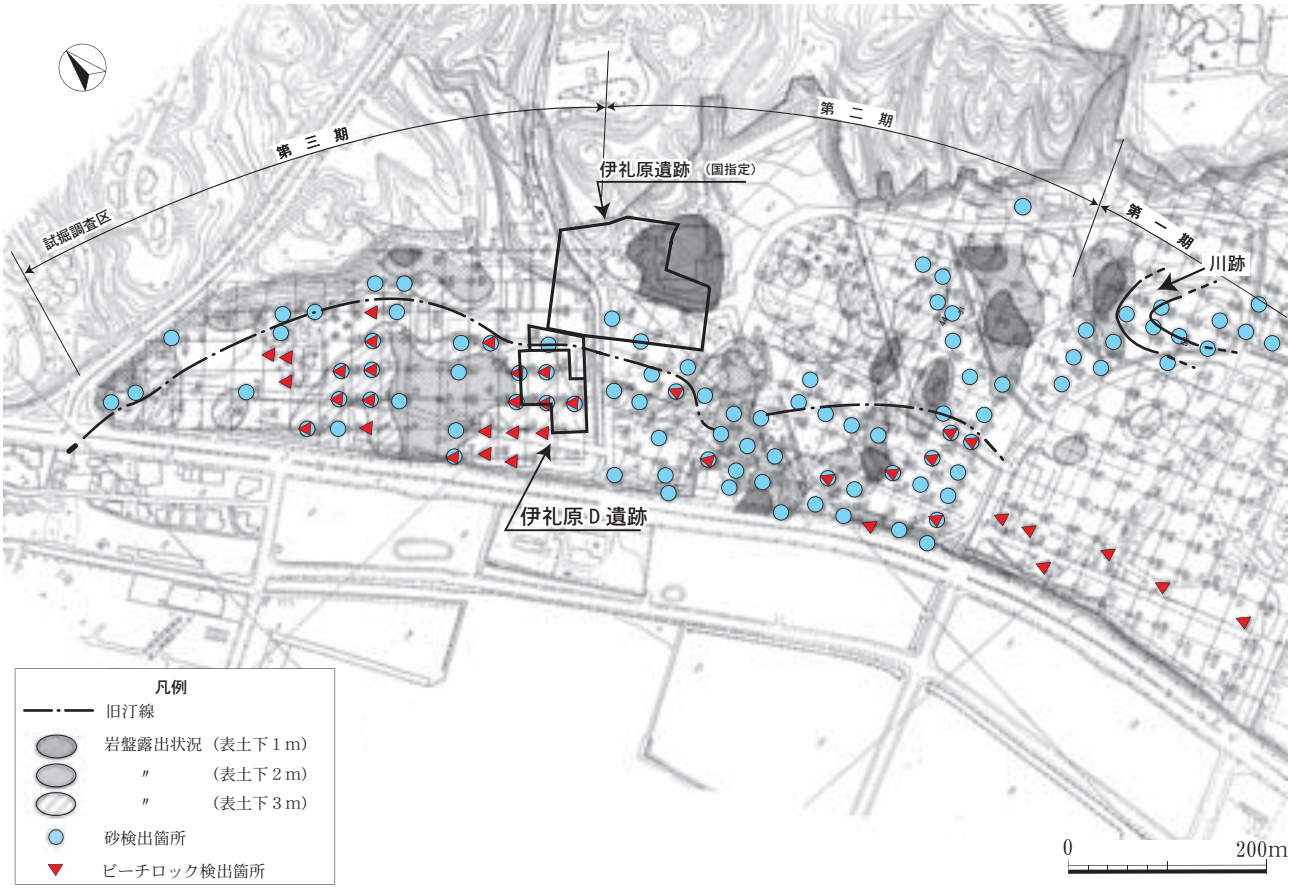
自然科学分析では、遺構番号4409SX 下部から出土した樹根や型式不明土器の年代測定のほか土器の胎土分析を専門機関に委託した。

・整理作業

整理作業では特徴的な遺物を抽出し、手実測及び実測器による図面作成を行った。トレースはデジタルトレースを行い、写真撮影では 1200 万画素のデジタルカメラを用いた。現場作業にて作成した遺構平面図は、時期毎の全体図のほか個別遺構図を掲載し、現地調査及び整理作業でも判然としなかったピット等ついては詳細な記述を割愛した。



第３図　グリッド設定



第４図　旧汀線の復元と試掘検出箇所

小堀原遺跡（2012）参考に『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』(2005)に加筆

第２節　層　序

本遺跡の層序は、Ⅰ～Ⅵ層に大別される。第６～９図に、調査時に付した層名称、層番号を示し、第２表に層序観察一覧、Ⅴ層検出面の色調による平面分布を第５図ｃ・ｄに示す。以下、各層について述べる。

Ⅰ層：表土。客土、層厚約 70cm ～ 1 m 40cm。３つに大別される。

1. 旧キャンプ桑江北側返還後の油分汚染土壌処理後の入換土。
2. 米軍基地整備の造成土で、戦後の大規模な造成によるものと見られ、返還以前のバスターミナル等の整地と見られる硬く締ったコーラルクラッシャーによる転圧路盤が東から西へ平坦化された様子が確認された。
3. 基地収用時の旧表土を用いた造成と見られる攪乱層。

Ⅱ層：近・現代（第１文化層）。

調査範囲のほぼ全面に堆積し、３枚（イ・ロ・ハ）に分けられる。

イ：調査区北側の 0008SF とその周辺に見られ、道路築造層（8 ～ 12・15 ～ 17・26 ～ 34・36・37・67 層）と耕作土（18 ～ 25 層）と考えられる。（第６図①・②）

道路築造層とした各層のうち、大型サンゴ石灰岩礫等を含む 37 層は厚さ約１ｍを測り、0008SF に関連した道路の基礎築造層と判断され（第Ⅲ章第６節１）、8 層はその路面の可能性があるものと思われ、厚さ約８～ 16㎝を測る。この 8･37 層の間に堆積する９～ 11、15 ～ 17、26、27、31、36 層は最も厚い部分で約 94㎝を測る造成土と考えられる。

耕作土は、東壁１（第６図①）の D12 付近で畦と見られる台形状を呈する部分（26 層）を境に 18（褐色細砂質シルト）、19 層（にぶい黄褐色粗砂層）、24 層（にぶい黄褐色細砂質シルト）が南北側に堆積している。これらの堆積は、後述する 1945 年の米軍上陸前の耕作地域の様相を示しているものと考える。

ロ：15 ライン付近から南側に堆積する〔45（包含層１）・75 ～ 77 層〕は、東壁２（第６図②）では C17・18、南壁では C ～K 18 に見られる。厚さ約 10 ～ 20㎝を測る。

南壁（第７図）では、耕作地境界と考えられる段差が４ヶ所（D・H・J・L ライン付近）に見られ、J18 グリットではⅢ層〔78 層（包含層 2)〕を切っており、削平による土地改変が行われたと見られる。土質は包含層２に類似しており、母材としたものと見られる。

ハ：SZ の埋土と A11、B12 ～ 14 に堆積する。前者は東壁１（第６図①）のⅡ層イ（0008SF）下位となる 4439SZ（38・41 層）、4436SZ（46 層）、0588SZ（68～70 層）、Ⅱ層ロ下位の 0350SZ（71 ～ 74 層）、東壁２（第６図②）は 4442SZ（39・41・42 層）と A11、B12 ～ 14 に堆積する 46 層である。

Ⅱ層ハのうち、Ⅱ層ロ下位にある 0350SZ によってⅢ層ロの柱穴群が失われていることから同 SZ（71 ～ 74 層）はⅢ層ロより新しく、Ⅱ層ロより古い、また、その他の SZ はⅡ層イ（0008SF）の下位にあることからⅡ層イ（0008SF）より古く A11、B12 ～ 14 のⅢ層イより新しい堆積と判断される。このⅡ層ハの下位にⅤｂ層は見られない。

本調査区北側の A ～ E8 北壁（巻首図版５）では、4442SZ 最下部の 41 層に 0008SF の石積が見られ、4442SZ の埋土は、乱れた堆積であることから、河川（後背湿地）に起因する自然地形の窪みと考えられ、0008SF は軟弱な地盤に礫を積んで道路の基礎を構築したものと考えられる。

近・現代の遺構である 0008SF、0019SL（第５図ａ）は、沖縄産陶器、瓦、本土産陶磁器等の出土遺物から大正頃までは遡れるものと見られる。

第 88 図の 1945 年の沖縄戦の米軍上陸前は、丘陵間を流れ平地部で蛇行するナガサ沿いの耕作地には水田の地籍も見られ、隣接する伊礼原遺跡（2007）の第３層（3a 層）は、水田床土と思われる堆積や畠の畝跡が検出されていることから、第５図ｂに示した本遺跡を縦横に走る SZ は、河川の氾濫または農耕に伴う治水の可能性もあるものと考えられる。

Ⅲ層：グスク時代の遺物包含層（第２文化層）。

土色や土質、堆積範囲からイ（47 ～ 50 層）、ロ〔78 層（包含層 2)〕に分けられる。

イ：47 ～ 50 層は、11 ラインから南側の 4409SX 一帯で、同遺構埋没後の浅く窪む地形に堆積し、16 ライン付近で途切れるが、出土遺物からⅢロ（78 層）と同時期と見られ、範囲確認調査４トレンチの③層（淡灰褐色～黒色砂質層）に相当すると判断される。Ⅲイ（47 ～ 50 層）全体での層厚は厚い部分で約 50㎝、南側では約 10㎝と薄くなる。北側へは、範囲確認調査４トレンチ跡の境目で約 36㎝、同トレンチ中央付近で途切れる。

ロ：78 層は柱穴群が検出された範囲に見られ、東壁１（第６図①）では D17 ライン付近から南側に堆積し、南壁（第７図）では D19 の 4400SD 付近の東側に堆積は見られず、西側は前述した J18 でⅡ層に切られている。本層の標高は約 3.3 ～ 3.7 m、層厚は厚いところで約 38cm、薄いところで約 8cm。本層の出土遺物には、15 ～ 17 世紀（青磁・褐釉陶器・染付・白磁等）の遺物が主体的に出土する。

Ⅲ層の広がりと国指定史跡伊礼原遺跡（2007）の調査成果と区画整理事業に伴う発掘調査成果から、集落は本調査範囲を中心に川沿いに形成され、隣接する国指定史跡伊礼原遺跡側に広がりを有することが確認された。また、後述するⅣ層の堆積状況などからこの頃は貝塚時代後期よりも陸地の形成が進んでいたことが本遺跡でも窺われた。

Ⅳ層：4409SX 埋土。

本遺構内には後述するＶａ層が堆積しており間層に相当すると見られる。

本層は、上位面（51・52 層）と下位面（53 ～ 60 層）に分けられる泥炭層。出土遺物の取上げは４枚に細分された。

上位面（51・52 層）は、4409SX 内に細かく細分される堆積が繰り返された後の上部で、52 層は約 8㎝と薄く、51 層は比較的安定した堆積の様相を呈する。51 層の層厚は中央部で約 34㎝、外側へ次第に厚さを減ずる。出土遺物の取上げでは１層となる。

下位面（53 ～ 60 層）は、出土遺物の取上げでは２層（53 層）、３層（54 ～ 56 層）、４層（57 ～ 60 層）。この３層で自然木や樹根が見られ、樹根による放射性 ^{14}C 年代測定結果は 950±30BP（第Ⅳ章第３節）である。層厚は２層（53 層）約 10 ～ 20cm、３層（54 ～ 56 層）は４～ 16cm、４層（57 ～ 60 層）は 12 ～ 34cm を測る。

Ⅴ層：貝塚時代後期の遺物包含層。Ｖａ層はシルト質層、Ｖｂ層は砂層である。

Ｖａ層：61・62 層（第３文化層）（第６図②）

4409SX 内の北側で、中央部へ傾斜して堆積しており、Ⅵ層（白砂層）上位で堆積が確認された範囲確認調査４トレンチの④層（黒色混貝土層）に相当すると判断される。土器、貝などを多量に含むシルト質層で、くびれ平底土器が主体である。層厚は厚いところで約 36cm を測る。

Ｖｂ層：80 層（砂１・2)、砂①～⑥（包含層３）（第４文化層）（第７図）

海成砂層で、概ね東から西側に緩く傾斜する堆積が繰り返されており、80 層は、第５図ｃで示したⅤ層面で砂１･２の色調により分けられており、(砂１、厚さ約 12 ～ 28cm、暗色砂層）は主に H18 に見られ、その周囲の砂２（白砂層、厚さ 25cm 程度）は H ～ L16 より南側に広がる。

G･H15 ～ 18、I18 では、さらに「砂２」下位の追加調査（50㎡）を行った結果、東から西へ緩やかに傾斜する６枚（砂①～⑥）（第２表）を確認した。

Ⅴｂ層の広がりは後述する遺物の出土状況から海側に傾斜する広がりと、隣接する国指定史跡伊礼原遺跡や国指定外の伊礼原遺跡に見られる。出土する土器は、貝塚時代後期土器の尖底が主体で、また、H17 でイモガイ集積遺構（第15図）が検出された。

Ⅵ層：地山。Ⅵａ層の砂層、Ⅵｂ層の砂利・枝サンゴ層に大別される。

Ⅵａ層：砂層（63 層、T1-2-1 ～ 18）

南壁の H・I19 や 4409SX の縁辺部の下層確認調査トレンチ南壁（C ～ F13）に見られるように、砂層は海側に向かって傾斜する層が連続して重なる（巻首図版６、第８図)。

本層は概ね海成砂層で、上部はやや中砂、色調は灰オリーブ色～灰黄色、黄色や黄褐色、明褐色に分けられ（巻首図版７)、下部では粗砂となり灰白色と明黄褐色の色調の異なる互層堆積や、灰白色細砂も見られる。灰白色細砂には 4409SX の近くで遺跡背後の丘陵間を流れる川に起因する川砂の堆積も僅かに見られる。巻首図版６（1 段目左上）にみえる 4409SX の下面には海砂が堆積する。

F18 ～ G18 では、本層上面に軽石のまとまる範囲、G17・18 で枝サンゴのまとまりが概ね南北方向で帯状に検出された（第５図ｄ)。

Ⅵｂ層：砂利・枝サンゴ層（81 層）

標高約 1.5 ｍ以下に堆積し、厚さ 1.6 ｍ以上堆積する。上部は粗砂が目立ち、その下位の枝サンゴ層はサンゴ礫を含む。(巻首図版６）

枝サンゴ層は、伊礼原、平安山原地域の試掘調査で広範囲に確認され、伊礼原Ｅ遺跡発掘調査報告書（2010）で報告されたビーチロックの下位に確認されている。本遺跡では、同報告の古汀線の復元ラインよりやや内陸側で確認された。

本遺跡や平安山原Ａ～Ｃ遺跡、伊礼原Ｅ遺跡が所在する伊礼原、平安山原地域では、枝サンゴ層やビーチロックから室川下層式土器（巻首図版６)、面縄前庭式土器、伊波式土器、大当原式土器、貝塚時代後期土器が出土した。本遺跡のⅥ層からも面縄前庭式土器、船元系土器が出土した（第 20 図３)。その船元系土器の破片に付着した炭による放射性 ^{14}C 年代測定結果は 4,450±40BP（補正年代）である（第Ⅳ章第３節)。

このようにⅥ層出土の貝塚時代前期の土器は、伊礼原遺跡（2007）及び伊礼原Ｅ遺跡（2010）で主体をなし、これらの暴浪や津波の痕跡が報告されていることから、両遺跡の遺物が二次堆積したものと考える。

また、4409SX はナガサの浸食や範囲確認調査（2008）によると調査区の北側で川跡が確認されていることから後背湿地が北側に広がっていたものと推察される。このことは南側に位置する小堀原遺跡（2012）でも沖積低地を蛇行する古い川跡が確認されていることから証左される。貝塚時代後期の集落は、背後の後背湿地をもつ緩やかに傾斜する砂丘に貝塚が形成され、集落の広がりは国指定史跡伊礼原遺跡側にある様子が窺えた。

第２表－１　層序観察一覧

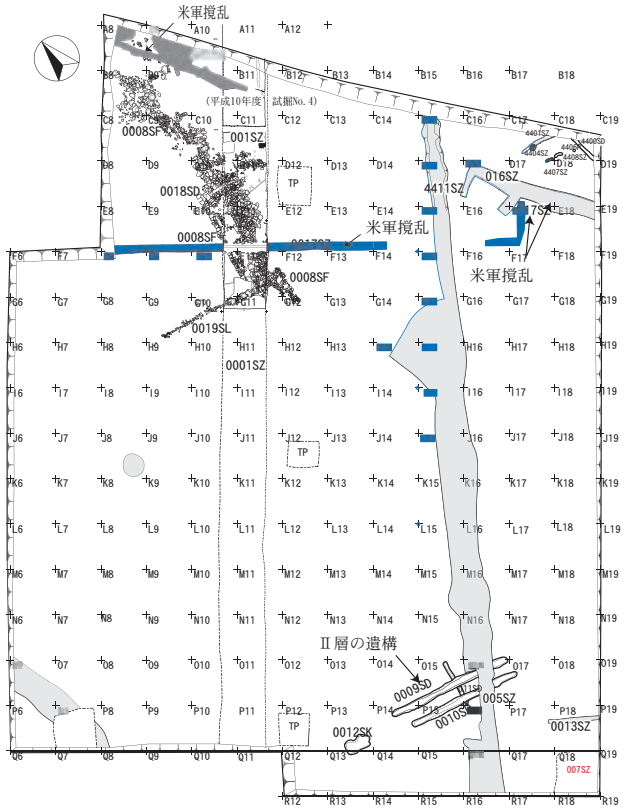
層序名		分層番号	層・埋土の特徴	色調	備　　考
Ⅰ層	Ⅰ	1	にぶい黄褐色細砂	10YR5/3	第６図①東壁１・第６図②東壁２・第７図南壁
		2	少量の黒褐色（2.5Y3/2）のシルトブロック、径１～ 5㎜ の貝片・コーラル片、含むにぶい褐色細砂質シルト	7.5YR5/3	第６図②東壁２・第７図南壁
		3	径１～ 3㎜の炭化物、径１～ 5㎜の貝片・コーラル片含むにぶい黄橙色中砂質シルト	10YR7/3	第７図南壁
		4	褐色粗砂まじりシルト	10YR4/6	第６図①東壁１・第６図②東壁２
		5	明黄褐色細砂質シルト	10YR6/8	第６図①東壁１・第６図②東壁２
		6	径１～ 5㎜の貝片・コーラル片含む灰黄褐色砂質シルト	10YR5/2	第６図②東壁２
		7	径３～ 5㎜の礫含む粗砂まじり褐色細砂質シルト	10YR4/6	第６図①東壁１
		13	粗砂まじり黄褐色細砂質シルト	10YR5/6	第６図①東壁１
		14	灰オリーブ色(5Y4/2)シルトのブロック含む粗砂まじり黄褐色細砂質シルト	2.5Y5/4	第６図①東壁１
		40	径１～ 5㎜の貝片・コーラル片含む暗褐色細砂質シルト	10YR3/3	第６図②東壁２・第７図南壁・4400SD の埋土
		43	径 2㎝の貝片、径 3㎝のコーラル含むオリーブ褐色細砂質シルト	2.5Y4/3	第６図①東壁１・第６図②東壁２・第７図・南壁下部に鉄分の沈着あり
		44	径１～ 5㎜の貝片・コーラル含むオリーブ褐色細砂質シルト	2.5Y4/4	第７図南壁
Ⅱ層	Ⅱイ	18	径 3㎝の礫含む粗砂まじり褐色細砂質シルト	10YR4/4	巻首図版５ 第６図①東壁１
		19	径 1㎝の貝片・コーラル含むシルトまじりにぶい黄褐色粗砂	10YR5/4	巻首図版５ 第６図①東壁１
		20	炭化物、貝片、鉄分含む粗砂まじりオリーブ褐色細砂質シルト	2.5Y4/2	第６図①東壁１
		21	径 2㎝のビーチロック、径 3㎝の礫含む粗砂まじり暗黄褐色中砂	10YR6/6	第６図①東壁１
		22	明褐色(7.5YR5/8)シルトのブロック含む粗砂まじりにぶい黄褐色細砂質シルト	10YR4/3	巻首図版５ 第６図①東壁１
		23	炭化物、鉄分含む粗砂まじりにぶい黄褐色細砂質シルト	10YR4/3	第６図①東壁１
		24	炭化物含む粗砂まじりにぶい黄褐色細砂質シルト	10YR4/3	巻首図版５ 第６図①東壁１
		25	炭化物、貝片、コーラル、黄褐色(10YR5/6)シルトのブロック含む粗砂まじりオリーブ褐色細砂質シルト	2.5Y4/4	巻首図版５ 第６図①東壁１
		8	径 3㎝の貝・コーラル含む明褐色粗砂まじりシルト	7.5YR5/6	巻首図版５ 第６図①東壁１・0008SF 路面層
		9	黄褐色細砂質シルト	10YR5/6	巻首図版５ 第６図①東壁１・0008SF 造成層
		10	径 15㎝ビーチロック含む粗砂まじり明黄褐色細砂質シルト	2.5Y6/6	巻首図版５ 第６図①東壁１・0008SF 造成層
		11	コーラルまじりの明黄褐色シルト質中砂	10YR6/6	巻首図版５ 第６図①東壁１・0008SF 造成層
		12	黒色(10YR2/1)・黄褐色(10YR5/6)シルトのブロック含むにぶい黄褐色シルト	10YR5/3	巻首図版５ 第６図①東壁１・しまり強い
		15	上部：径 5㎜～ 10㎜のサンゴ片・貝片・礫まじり黄褐色シルト質中砂	10YR5/6	巻首図版５ 第６図①東壁１・第６図②東壁２
		16	径１～ 5㎜の炭化物を少量含むにぶい黄褐色砂質シルト	10YR5/4	巻首図版５ 第６図②東壁２・4430SZ の埋土最上位？
		17	径 1㎝の礫含む粗砂まじり褐色シルト	10YR4/4	巻首図版５ 第６図①東壁１・0008SF 造成層
		26	鉄分含むにぶい黄褐色中砂まじりシルト	10YR4/3	巻首図版５ 第６図①東壁１・0008SF 造成層
		27	オリーブ色(5Y5/6)・黄褐色(10YR5/6)シルトのブロック含む粗砂まじり明黄褐色細砂質シルト	2.5Y6/8	巻首図版５ 第６図①東壁１・0008SF 造成層・第６図②東壁２・4430SZ の埋土
		28	にぶい橙色シルト	7.5YR6/4	巻首図版５ 第６図②東壁２・4430SZ の埋土
		29	暗褐色（10YR3/4）ブロックを少量含む明黄褐色細砂質シルト	10YR6/6	巻首図版５ 第６図②東壁２・4430SZ の埋土
		30	径１～ 5㎜の貝片含むにぶい黄褐色細砂質シルト	10YR5/4	巻首図版５ 第６図②東壁２・4430SZ の埋土
		31	上部に黄褐色(10YR5/8)シルトのブロック、下部に鉄分を含む中砂まじりにぶい黄褐色細砂質シルト	10YR4/3	巻首図版５ 第６図①東壁１・0008SF 造成層
		32	粗砂まじりにぶい黄色細砂質シルト	2.5Y6/4	巻首図版５ 第６図①東壁１・第６図②東壁２・4430SZ の埋土
		33	赤褐色砂質シルト	5YR4/8	巻首図版５ 第６図②東壁２・4430SZ の埋土・鉄分の沈着あり
		34	貝・コーラル含む中砂まじりにぶい黄褐色シルト	10YR4/3	巻首図版５ 第６図①東壁１・第６図②東壁２・4430SZ の埋土・下部に若干砂を多く含む
		36	粗砂まじり褐色細砂質シルト	10YR4/4	巻首図版５ 第６図①東壁１・008SF 造成層・しまり強い
		37	ビーチロック、貝片含む中砂まじり黄褐色細砂質シルト	10YR5/6	巻首図版５ 第６図①東壁１･008SF 基礎構築礫層
		67	褐色(10YR4/4)シルトのブロック含む粗砂まじり褐色細砂質シルト	10YR4/4	第６図① 東壁１・Ｄ 14・Ｐｉｔ 67
	Ⅱロ	45	炭化物、径 5㎝の貝片、径 1㎜のコーラル含むオリーブ褐色細砂質シルト	2.5Y4/3	第６図①東壁１･第６図②東壁２･第７図南壁･包含層
		75	径 3㎜ のコーラル、黄褐色(10YR5/8)・明褐色(7.5Y5/8)シルトのブロック、径２㎜の貝片含むにぶい黄色細砂質シルト	2.5Y6/3	第６図①東壁１・Ｄ 17・Ｐｉｔ 75
		76	径 1㎝の軽石、径 10㎝の貝片、オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルトのブロック含む黒褐色細砂質シルト	2.5Y3/2	第６図①東壁１・Ｄ 18・Ｐｉｔ 76
		77	径 1㎝の貝片、黄褐色(2.5Y5/3)シルトのブロック含む黒褐色細砂質シルト	2.5Y3/2	第６図①東壁１・Ｄ 18・Ｐｉｔ 77
	Ⅱハ	35	径 2㎜の礫含む粗砂まじり暗灰黄色細砂質シルト	2.5Y4/2	巻首図版５ 第６図①東壁１
		38	粗砂まじりオリーブ褐色細砂質シルト	2.5Y4/3	巻首図版５ 第６図①東壁１・4439SZ
		39	径１～ 10㎜の礫含む暗褐色細砂質シルト	10YR3/4	巻首図版５ 第６図②東壁２・4442SZ
		41	明黄褐色(2.5Y1.7/1)シルトのブロック含む中砂まじり黒色シルト	10YR1.7/1	巻首図版５ 第６図①東壁１・4439SZ・第６図②東壁２・4442SZ
		42	径１～ 10㎜の貝片・コーラル片含む黒褐色細砂質シルト	10YR3/2	巻首図版５ 第６図②東壁２・4442SZ
		46	オリーブ褐色(2.5 Ｙ 4/3)シルトのブロック含む黒褐色シルト	2.5Y3/2	巻首図版７ 第６図①東壁１・粘性強い・4436SZ 内・第６図②東壁２
		64	礫、貝片含む暗オリーブ褐色細砂質シルト	2.5Y3/3	巻首図版５ 第６図①東壁１
		65	シルトまじり褐色中砂	10YR4/4	巻首図版５ 第６図①東壁１
		66	粗砂まじり暗灰黄色細砂質シルト	2.5Y4/2	巻首図版５ 第６図①東壁１
		68	貝片含むオリーブ褐色細砂質シルト	2.5Y4/4	第６図①東壁１
		69	炭化物、貝片、径 1㎝のコーラル含む黒褐色細砂質シルト	10YR3/1	第６図①東壁１

第２表－２　層序観察一覧

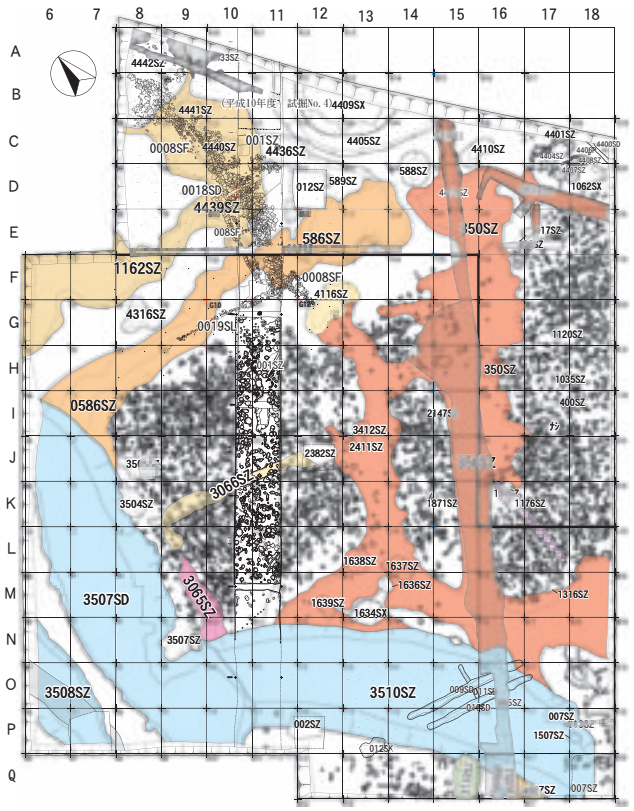
層序名		分層番号	層・埋土の特徴	色調	備　　考
Ⅱ層	Ⅱハ	70	赤褐色(5YR4/8)シルトまじり中砂のブロック含む粗砂まじり褐色細砂質シルト	10YR4/4	第６図①東壁１・落ち込み、礫あり
		71	粗砂まじりオリーブ褐色細砂質シルト	2.5Y4/4	第６図①東壁１
		72	径10cmの礫、暗灰黄色(2.5Y5/2)･黄褐色(10YR5/6)シルトのブロック、1mmのコーラル含む黄褐色細砂質シルト	2.5Y5/3	第６図①東壁１
		73	径5cmのコーラル、径5mm～3cmの貝片、径2mmのコーラル、オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルトのブロック含む黄褐色細砂質シルト	2.5Y5/3	第６図①東壁１・下部に鉄分の沈着あり
		74	炭化物、径3cmのコーラル、径5cmの礫、径２～5cmの貝片、径5mmのコーラル、黄褐色(2.5Y5/3)シルトのブロック含む明黄褐色細砂質シルト	10YR6/6	第６図①東壁１
Ⅲ層	Ⅲイ	47	径１～10mmの貝片含む褐灰色細砂質シルト	10YR4/1	巻首図版７　第６図②東壁２
		48	黒褐色砂質シルト	10YR3/2	巻首図版７　第６図②東壁２
		49	径１～15mmの貝片を多く含む黄灰色細砂質シルト	2.5Y4/1	巻首図版７　第６図②東壁２
		50	径１～5mmの貝片、径１～3mmの炭化物を含む黒褐色砂質シルト	2.5Y3/2	巻首図版７　第６図②東壁２
	Ⅲロ	78	炭化物、径5cmの貝片、径10cmの礫、径1cmの軽石、径2cmのコーラル、径3cmの土器片、暗灰黄色(2.5Y4/2)・褐色(10YR4/6)シルトのブロック含む黒褐色細砂質シルト	2.5Y3/2	第６図①東壁１・第７図南壁･包含層２。
		79	径2cmのコーラル、にぶい黄色(2.5Y6/4)・明褐色(7.5YR5/8)シルトのブロック含む黒褐色細砂質シルト	2.5Y3/1	巻首図版４　第６図①東壁１・第６図②東壁２
Ⅳ層	Ⅳ	51	にぶい黄褐色（10ＹＲ 5/4）シルトブロック、径１～20mmの貝片、径１～5mmの炭化物を含む黒褐色砂質シルト	10YR3/1	巻首図版７　第６図②東壁２・4409SX 埋土・上位面
		52	黒褐色細砂質シルト	2.5Y3/1	巻首図版７　第６図②東壁２・4409SX 埋土・上位面・やや粘性あり。
		53	灰白色（10YR8/2）砂ブロック、径１～10mmの貝片、径1cmの炭化物、自然木を含むオリーブ黒色粘質シルト	5Y3/1	巻首図版７　第６図②東壁２・4409SX 埋土
		54	径１～10mmの貝片、径１～30mmの炭化物、自然木を含む灰色粘質シルト	5Y4/1	巻首図版７　第６図②東壁２・4409SX 埋土
		55	径１～10mmの貝片、径１～20mmの炭化物、自然木を含む黒褐色粘質シルト	2.5Y3/2	巻首図版７　第６図②東壁２・4409SX 埋土
		56	径１～5mmの貝片を含む粘質シルト	10YR4/2	巻首図版７　第６図②東壁２・4409SX 埋土
		57	黄灰色（2.5Y4/1）シルトブロック含む粘質シルト	5Y4/1	巻首図版７　第６図②東壁２・4409SX 埋土・グライ化みられる。
		58	径１～2mmの貝片含む暗オリーブ褐色粘質シルト	2.5Y3/3	巻首図版７　第６図②東壁２・4409SX 埋土
		59	径１～30mmの炭化物含む黒褐色シルト質粘土	2.5Y3/1	巻首図版７　第６図②東壁２・4409SX 埋土
		60	径１～50mm炭化物、自然木含む黒褐色粘質シルト	2.5Y3/2	巻首図版７　第６図②東壁２・4409SX 埋土
Ⅴ層	Ⅴa	61	径１～20mmの貝・土器を多量に含むオリーブ黒色粘質シルト	5Y3/2	巻首図版７　第６図②東壁２・4409SX 内、遺物包含層・北側
		62	径１～10mmの貝片、径１～50mmの炭化物含む黒褐色砂質シルト	2.5Y3/2	巻首図版７　第６図②東壁２・4409SX 内、遺物包含層・北側・土器、貝多量
	Ⅴb	80	径１～2cmの貝片、コーラル含む灰オリーブ色粗砂	5Y6/2	巻首図版４　第７図南壁・砂１・H19、I19 一帯で見られる・砂２
		砂①	にぶい黄橙色中砂	10YR7/4	第７図南壁
		砂②	浅黄橙色中砂	10YR8/3	第７図南壁
		砂③	遺物を多く包含する灰黄色中砂、西側では色調がやや明るくなる	2.5Y6/2	第７図南壁　大当原式期？
		砂④	浅黄橙色粗砂	10YR8/4	第７図南壁
		砂⑤	にぶい橙色粗砂	7.5YR7/4	第７図南壁　獣骨多い
		砂⑥	にぶい黄橙色中砂	10YR7/3	第７図南壁
Ⅵ層	Ⅵa	63	径１～10mmの貝片・コーラル、自然木含む海砂	10YR4/2	巻首図版７　第６図②東壁２・4409SX 内の最下層の海砂
	Ⅵb	81	径１～5cmの礫、多量の枝サンゴ・貝片含む灰白色粗砂	2.5Y7/1	巻首図版６　第６図②東壁２・海砂・4409SX の63層の下位

第２表－３　層序観察一覧（下層確認調査）

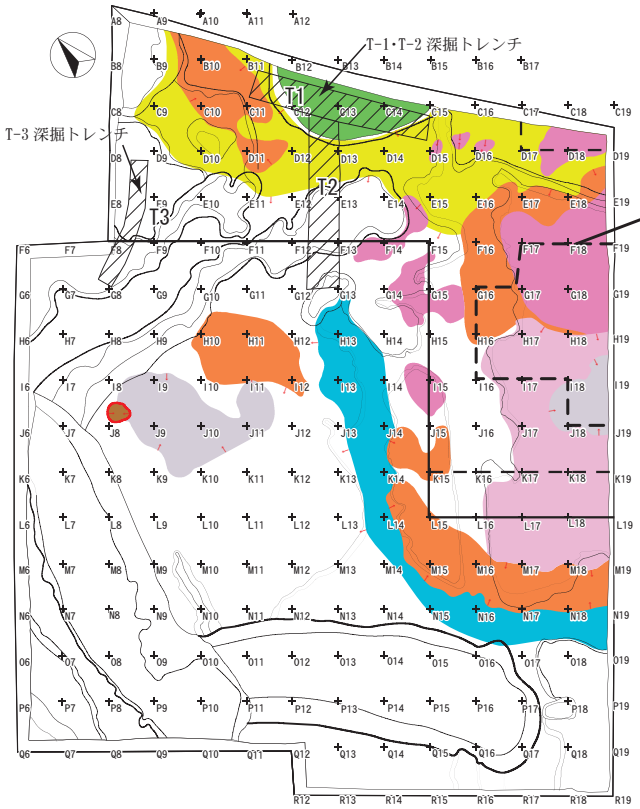
層名	分層番号	埋土の特徴	色調	備　　考
Ⅵa層	T1・2-1	径0.5～1mmの貝片・コーラル含む灰白色中砂	2.5Y8/2	巻首図版６　第８図　遺物包含砂
	T1・2-2	径２～20mmの貝片・コーラル・枝サンゴ含む灰白色中砂	2.5Y8/2	巻首図版６　第８図
	T1・2-3	径１～3cmの完形貝を多く含むにぶい黄橙色中砂東側に鉄分の沈着が局所的にみられる	2.5Y8/2	巻首図版６　第８図
	T1・2-4	灰白色中砂	2.5Y8/2	巻首図版６　第８図
	T1・2-5	灰白色粗砂	10YR8/2	巻首図版６　第８図
	T1・2-6	枝サンゴ・サンゴ礫片を含む灰白色粗砂。	10YR8/2	巻首図版６　第８図
	T1・2-7	径5mm以下の貝片・枝サンゴ片を全体に含むにぶい黄橙色粗砂	10YR7/4	巻首図版６　第８図
	T1・2-8	灰白色(10YR8/2)粗砂・明黄褐色(10YR6/8)粗砂・灰白色(7.5Y7/1)粗砂の互層	－	巻首図版６　第８図
	T1・2-9	径１～3cmの礫、径５～20mmの貝片・枝サンゴ片含む灰黄色粗砂	2.5Y7/2	巻首図版６　第８図
	T1・2-10	灰白色細砂	2.5Y8/2	巻首図版６　第８図
	T1・2-11	灰白色(2.5Y7/1)細砂・径５～20mmの貝片含む淡黄色(2.5Y8/3)粗砂の互層	2.5Y7/1	巻首図版６　第８図
	T1・2-12	径1cm以下の完形貝・枝サンゴ、径５～10mmの小サンゴ礫を含む浅黄色粗砂	2.5Y7/3	巻首図版６　第８図
	T1・2-13	明黄褐色(2.5Y6/8)粗砂・灰黄色(2.5Y7/2)粗砂・灰白色(5Y7/1)細砂の互層	－	巻首図版６　第８図
	T1・2-14	径３～5cmの円礫を含む灰白色細砂	10Y7/1	巻首図版６　第８図
	T1・2-15	灰白色細砂	10Y7/1	巻首図版６　第８図　川砂
	T1・2-16	枝サンゴ片・微小貝を含む灰白色粗砂で、筋状に堆積する	10Y7/1	巻首図版６　第８図
	T1・2-17	グライ化した土とにぶい黄色(2.5Y6/3)粗砂が不規則に混入する黒褐色細砂質シルト	2.5Y3/1	巻首図版６　第８図　根攪乱か？
	T1・2-18	径1cm以下の完形貝・枝サンゴ、径５～10mmの小サンゴ礫を含む浅黄色粗砂	2.5Y7/3	巻首図版６　第８図



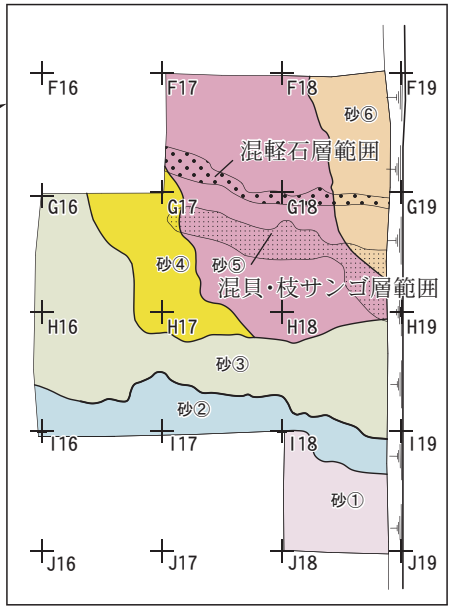
a：Ⅱ層面



b：Ⅲ層面



C：Ⅴ層面



d：Ⅴ層下層調査面

凡例

砂1（混軽石）	にぶい橙色砂
砂1：灰オリーブ色砂	灰オリーブ色～灰黄色砂
砂2：浅黄色砂	にぶい黄橙色砂
明褐色砂	海砂（4409SX底面で露出）

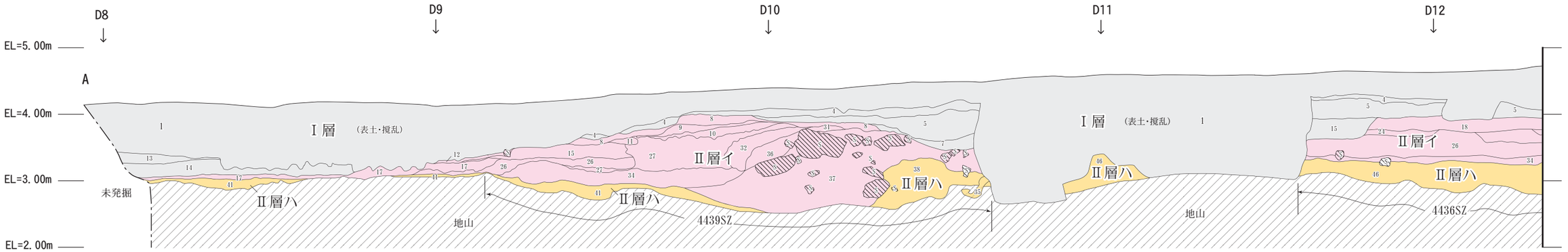
0　20m

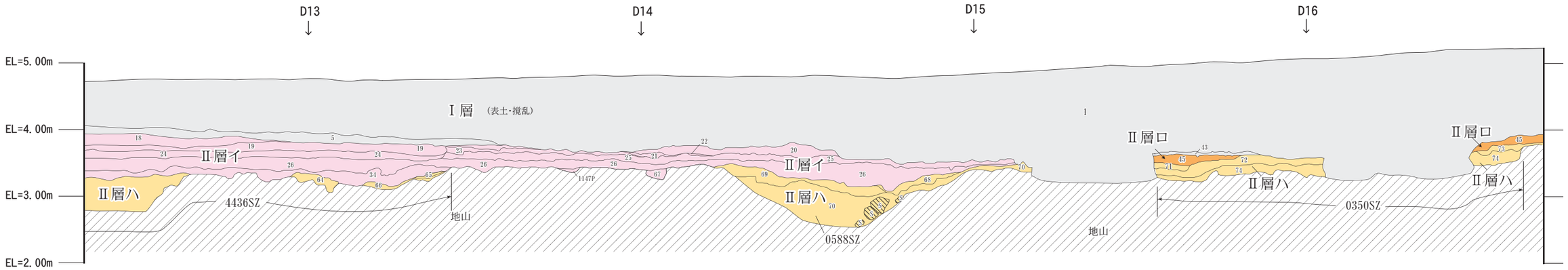
※本図面は下層調査着手前に作成。
※トーンなし部分は色調による分層が困難であった。
　G13では灰黄色、L11ではにぶい黄橙色を呈する。

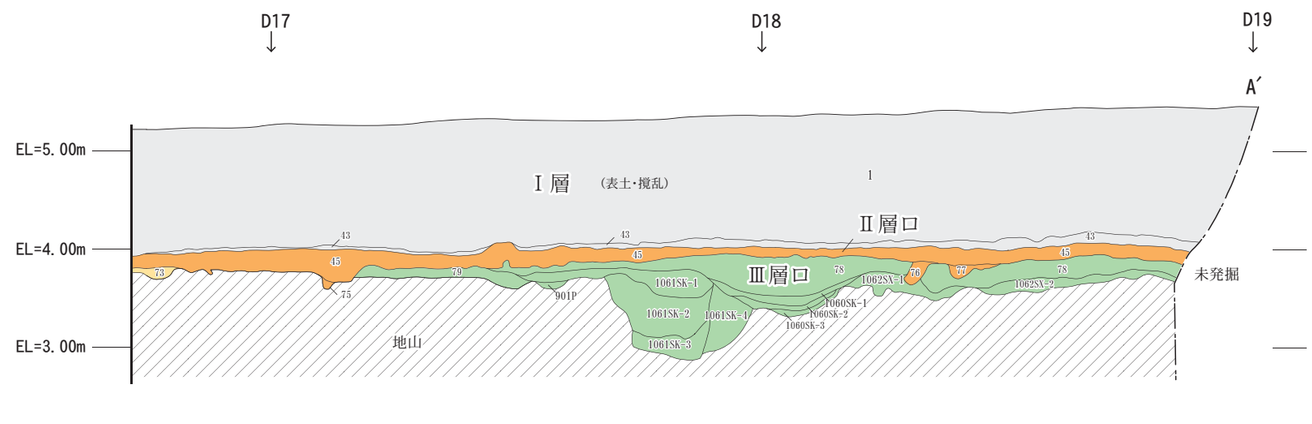
南側部分層図凡例

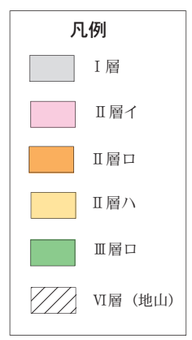
混貝・枝サンゴ層	
混軽石層	
砂①	砂④
砂②	砂⑤
砂③	砂⑥

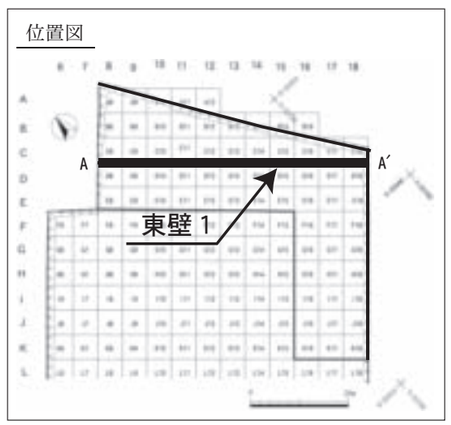
第５図　各層の検出面





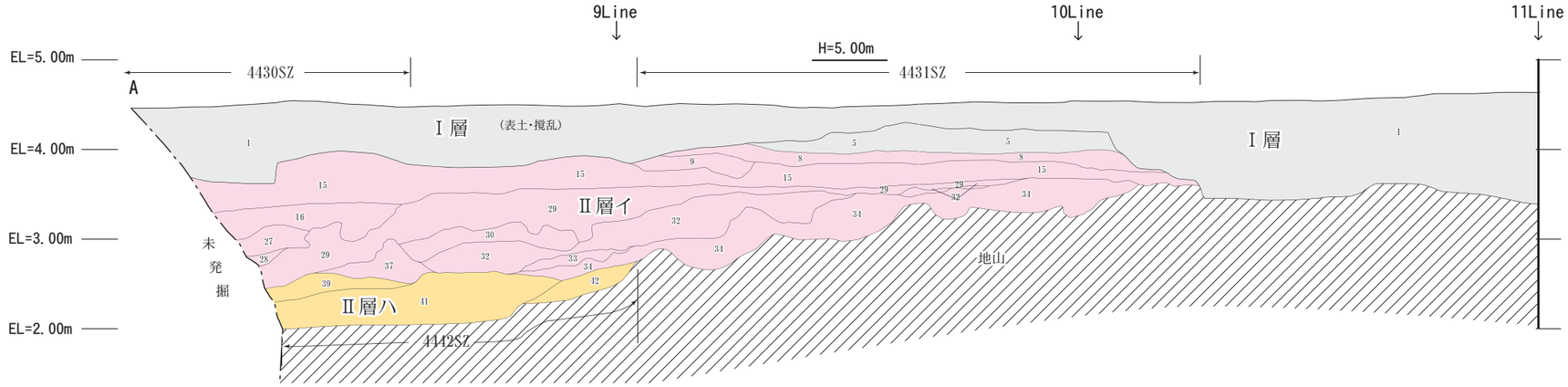


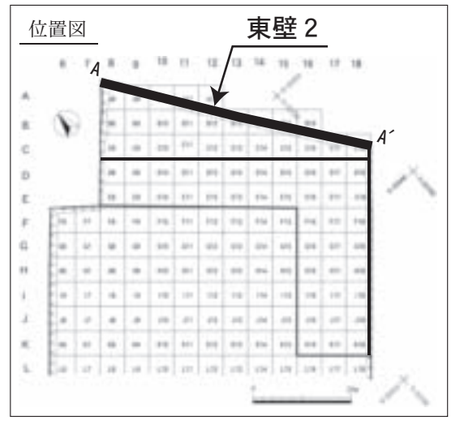


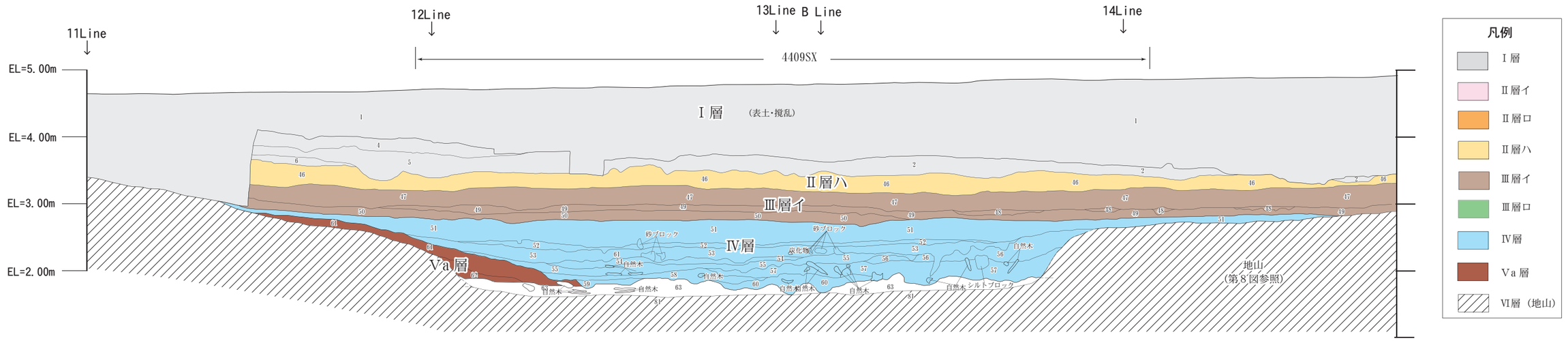


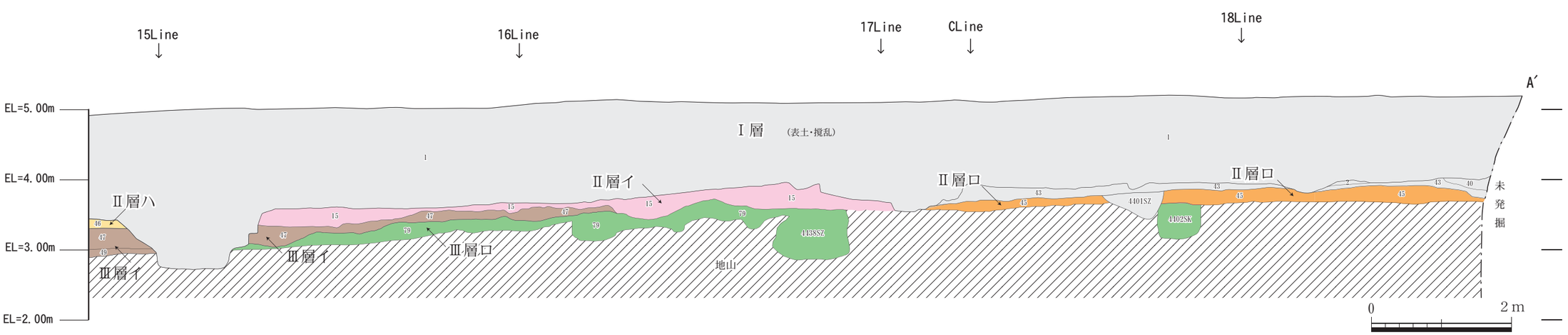
0　2m

第６図　①層序（東壁１）

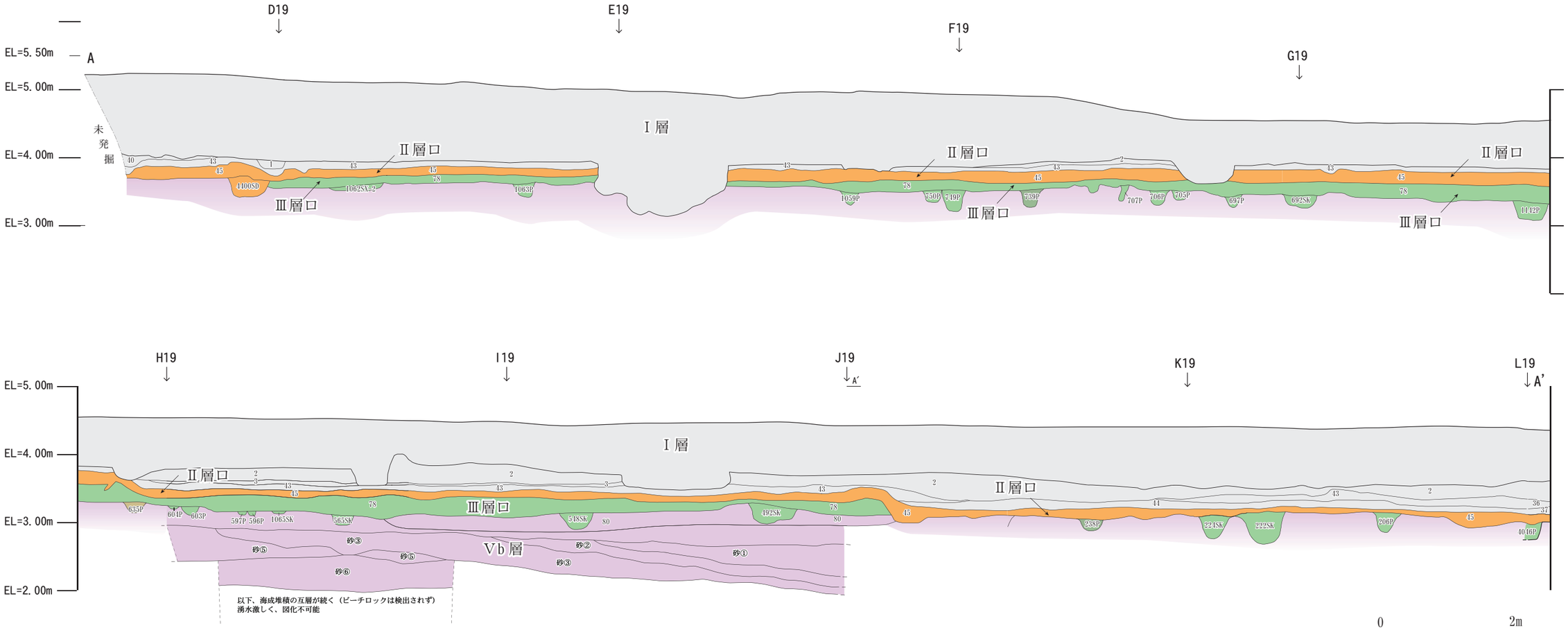

9Line
10Line
11Line
H=5.00m
EL=5.00m
EL=4.00m
EL=3.00m
EL=2.00m
A
4430SZ
4431SZ
4442SZ
Ⅰ層
（表土・撹乱）
Ⅱ層イ
Ⅱ層ハ
未
発
掘
地山


位置図
東壁２
A
A´


11Line
12Line
13Line
B Line
14Line
EL=5.00m
EL=4.00m
EL=3.00m
EL=2.00m
4409SX
Ⅰ層
（表土・撹乱）
Ⅱ層ハ
Ⅲ層イ
Ⅳ層
Va層
砂ブロック
炭化物
自然木
シルトブロック
地山
（第８図参照）
凡例
Ⅰ層
Ⅱ層イ
Ⅱ層ロ
Ⅱ層ハ
Ⅲ層イ
Ⅲ層ロ
Ⅳ層
Va層
Ⅵ層（地山）


15Line
16Line
17Line
CLine
18Line
A´
EL=5.00m
EL=4.00m
EL=3.00m
EL=2.00m
Ⅰ層
（表土・撹乱）
Ⅱ層ハ
Ⅱ層イ
Ⅱ層ロ
Ⅲ層イ
Ⅲ層ロ
4138SZ
4401SZ
4402SK
地山
未
発
掘
0
2m

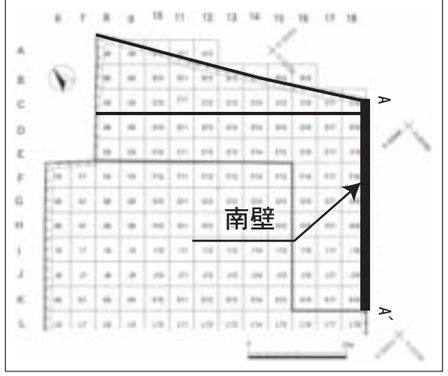
第６図　②層序（東壁２）



凡例

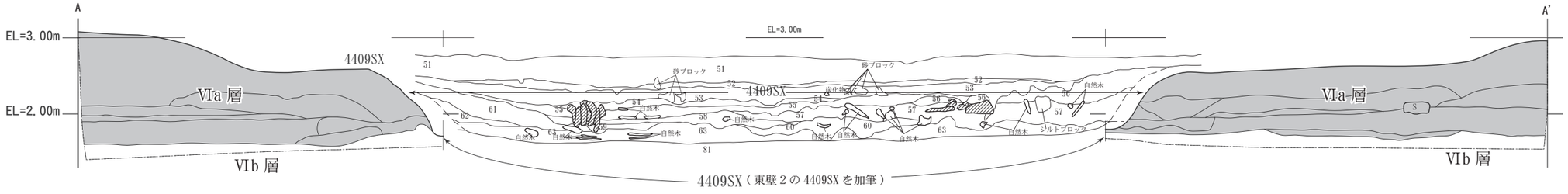
- Ⅰ層
- Ⅱ層ロ
- Ⅲ層ロ
- Vb層

位置図

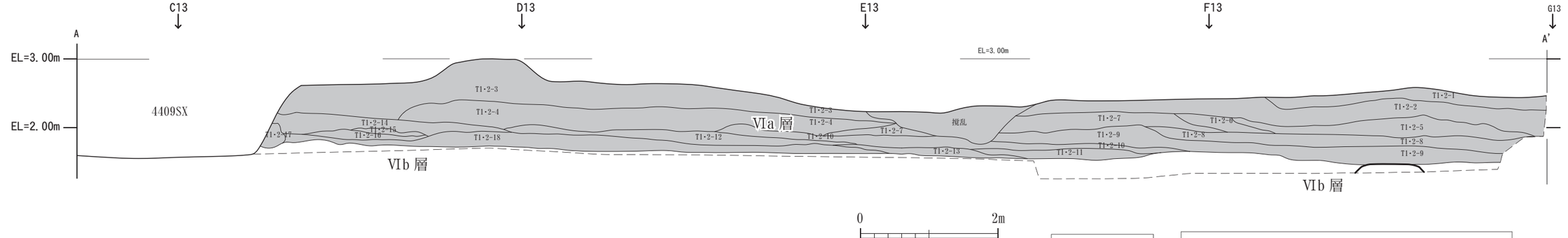


第７図　層序（南壁）

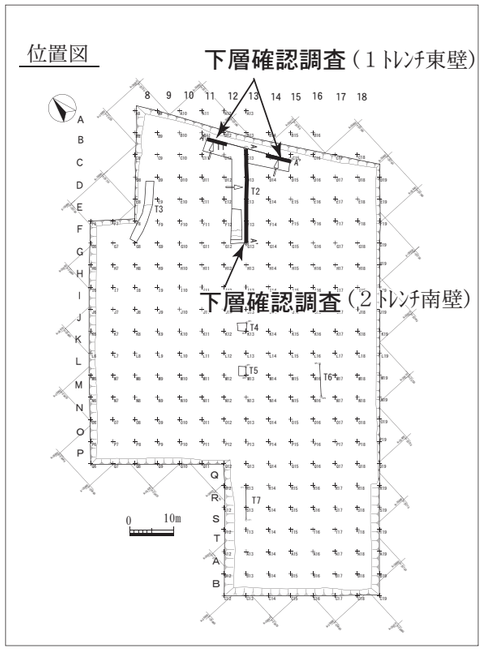
〈１トレンチ　東壁〉



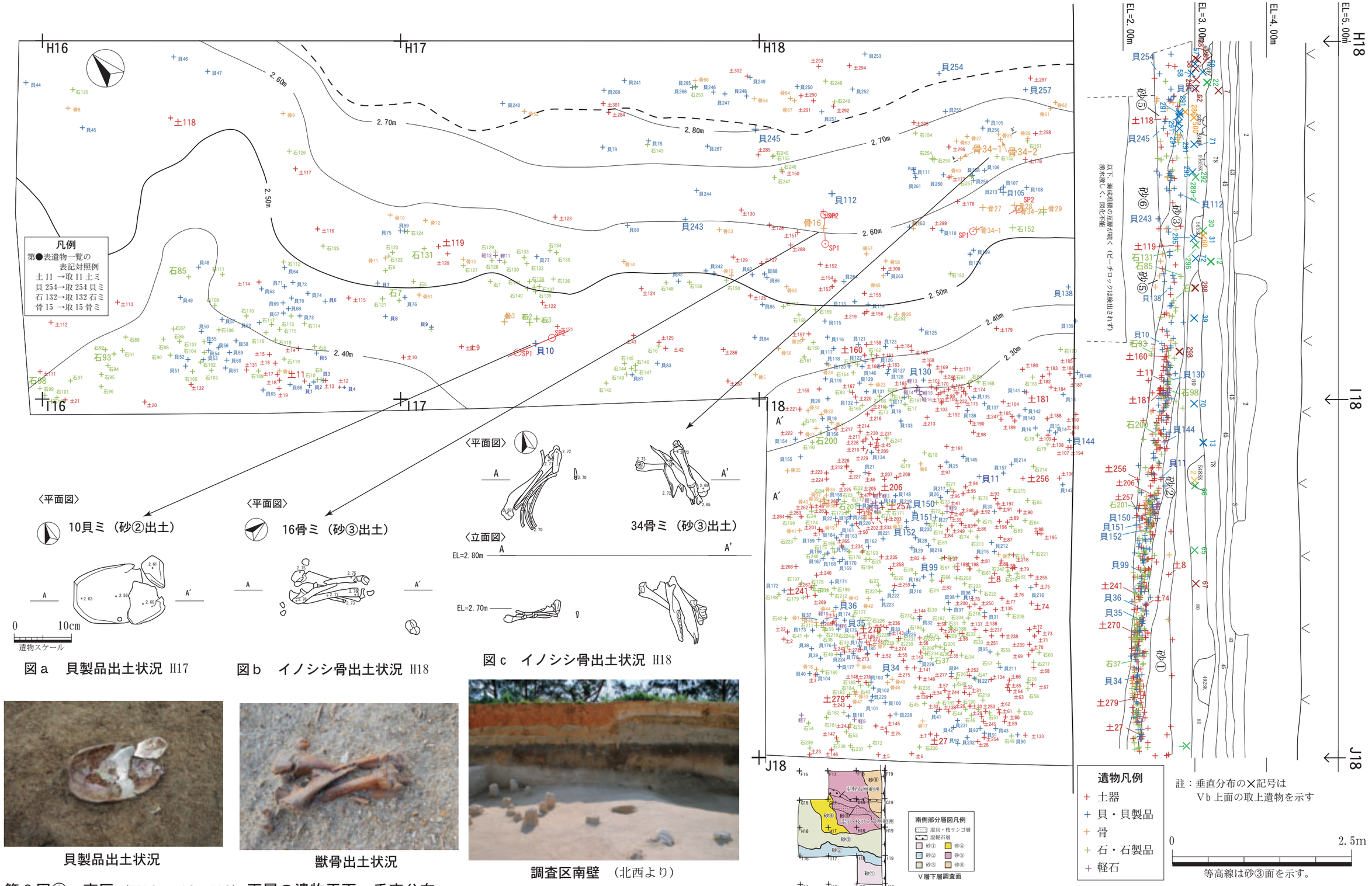
〈２トレンチ　南壁〉







第８図　層序（下層確認調査）



図ａ　貝製品出土状況 H17

図ｂ　イノシシ骨出土状況 H18

図ｃ　イノシシ骨出土状況 H18

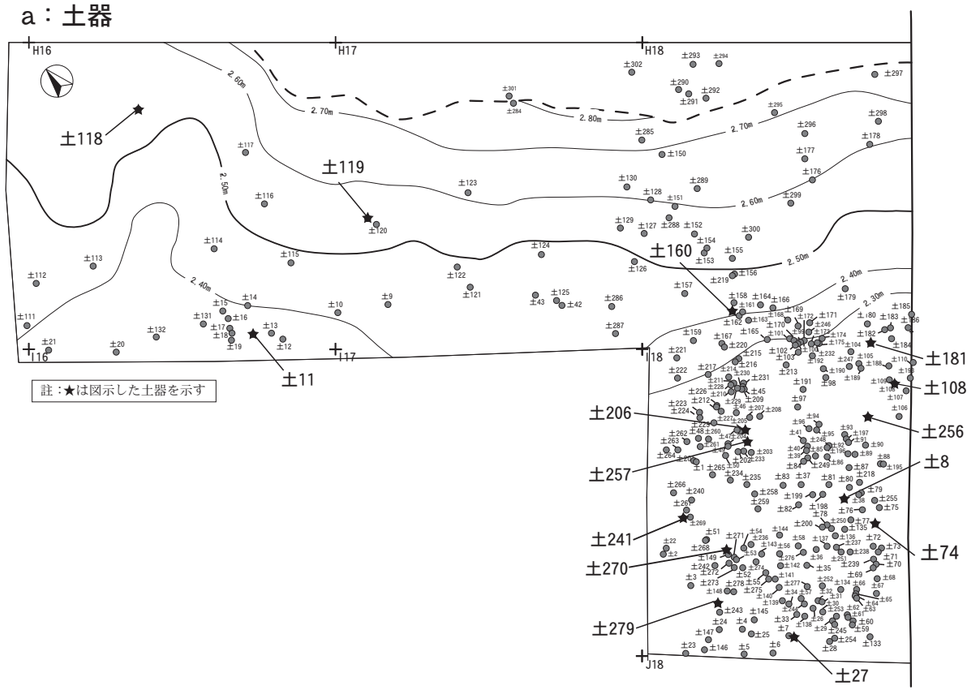
貝製品出土状況

獣骨出土状況

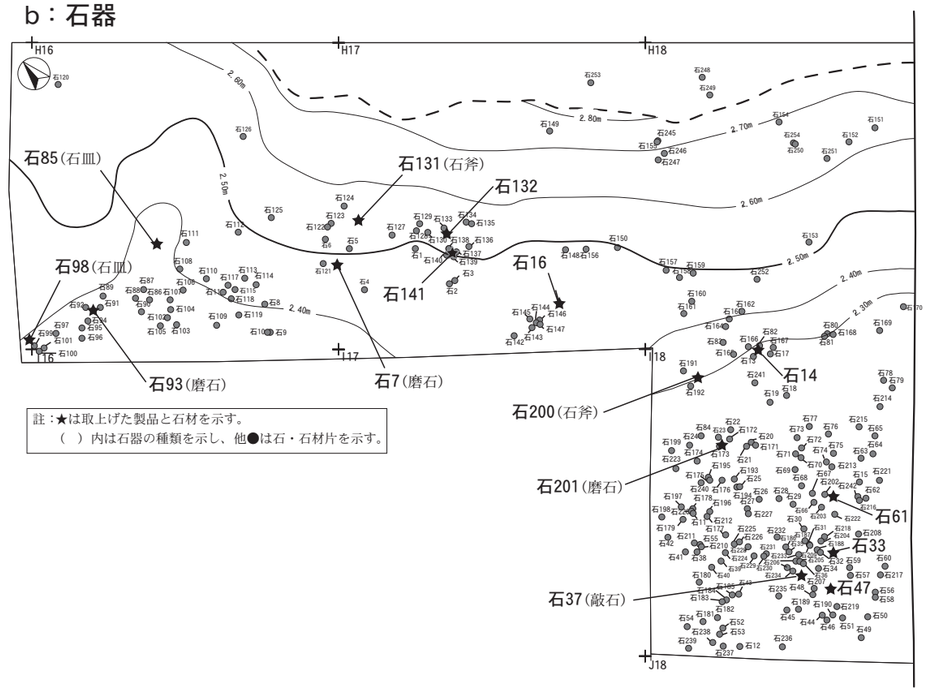
調査区南壁　（北西より）

第９図①　南区（H16 ～ 18・I18）下層の遺物平面・垂直分布

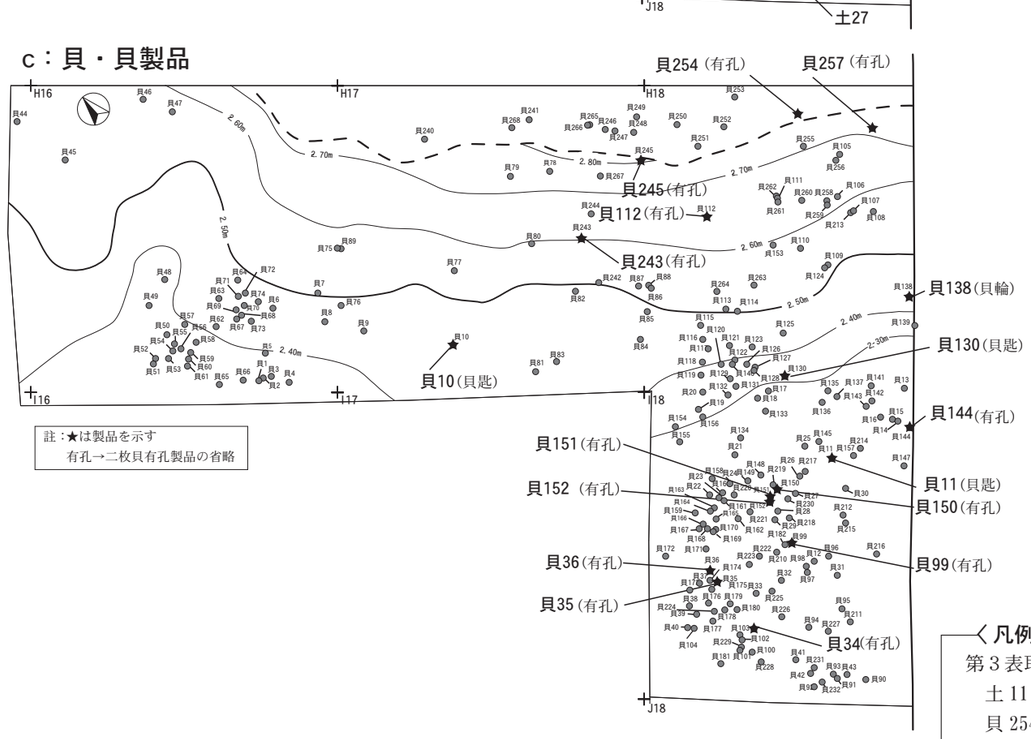
a：土器



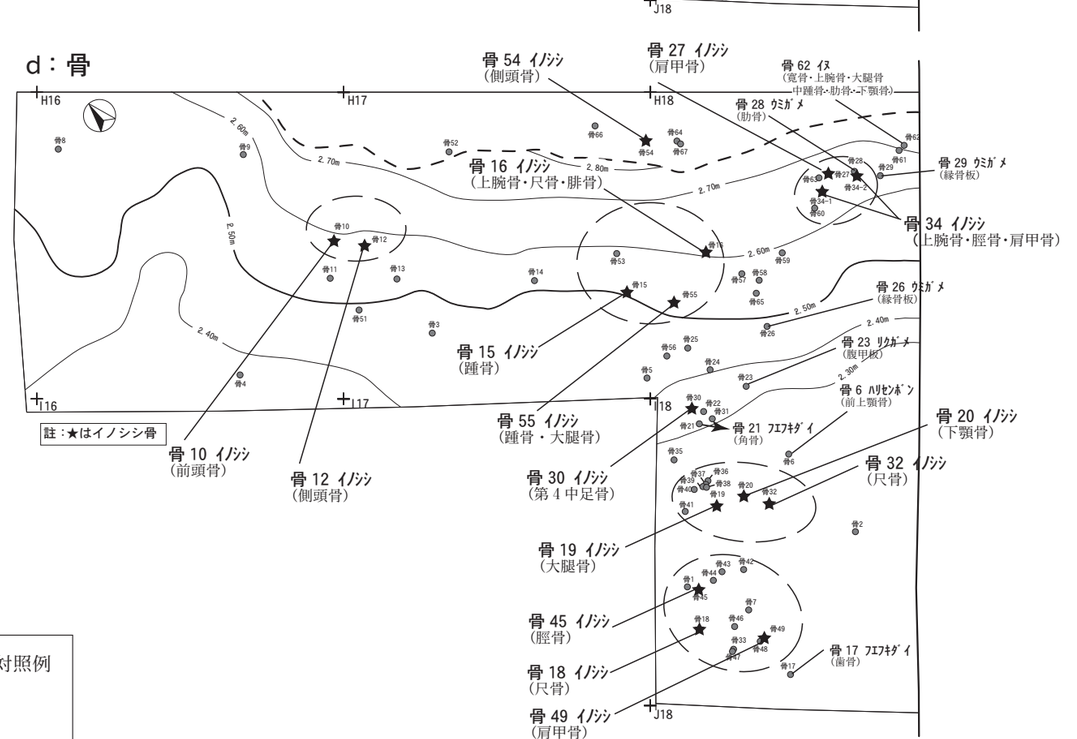
b：石器



c：貝・貝製品



d：骨



〈凡例〉

第３表取上遺物一覧の表記対照例

土 11 →取 11 土ミ

貝 254→取 254 貝ミ

石 132→取 132 石ミ

骨 15 →取 15 骨ミ

0　25m

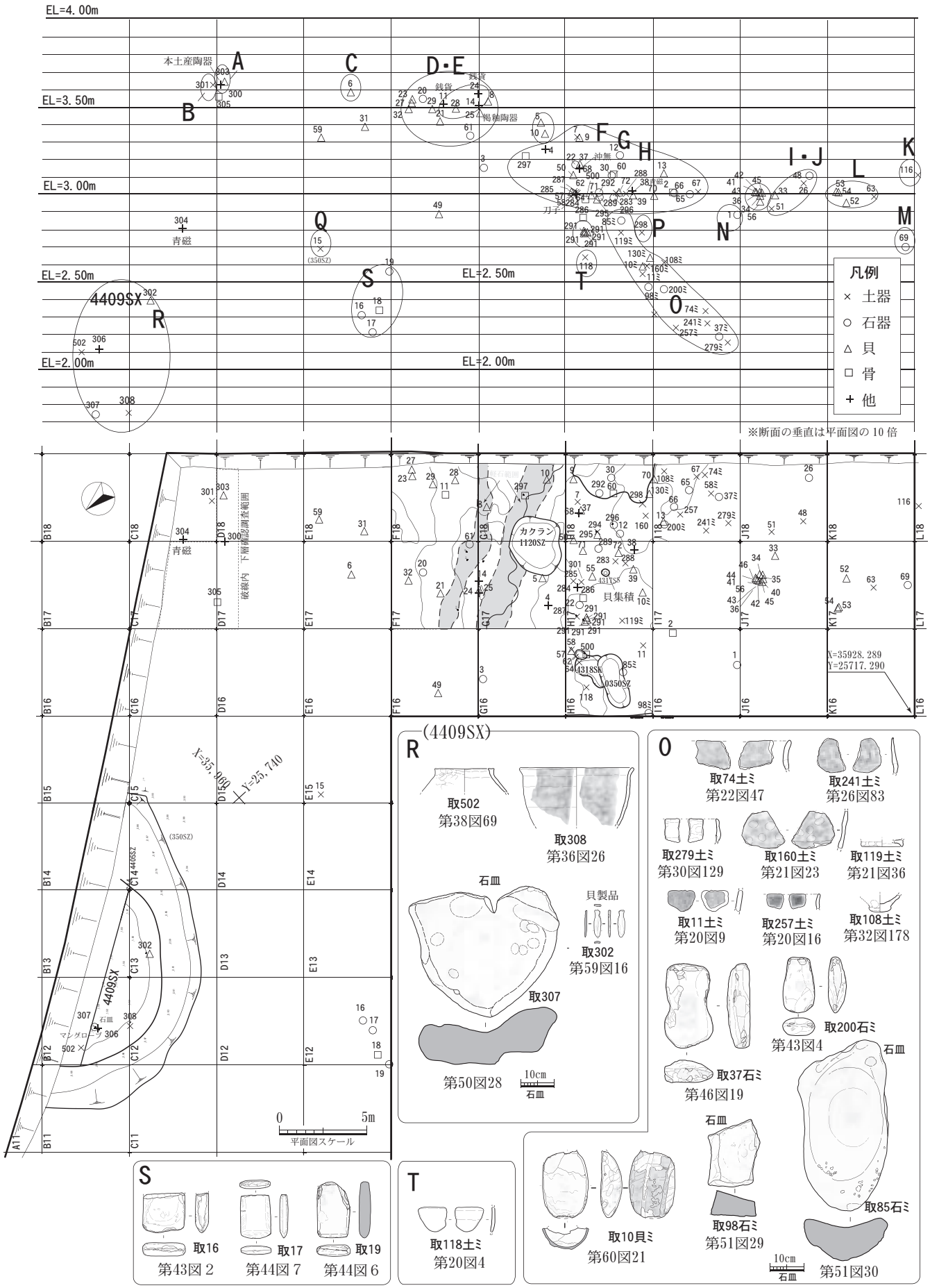
等高線は砂③面を示す。

第９図②　南区（H16 ～ 18・I18）**下層の遺物別平面分布**

第３表－１　取上遺物一覧

取上番号	X	Y	Z	台帳番号	グリッド	遺構	層序	図番号	遺物
1	35933.783	25726.416	2.892	156	I16	－	Ⅱ	第 44 図 10	石斧
2	35935.292	25730.248	3.067	158	I16	－	Ⅱ		ウシかヤギ　頸椎
3	35945.088	25735.586	3.160	240	G16	－	Ⅱ		剥片石器
4	35939.550	25736.238	3.236	279	G17	－	Ⅱ	第 82 図 8	三彩（水注）
5	35938.737	25737.573	3.410	372	G17	－	Ⅱ		ホラガイ
6	35946.693	25745.105	3.577	636	E17	－	Ⅱ	第 58 図 1	貝輪
7	35934.290	25739.483	3.335	634	H18	－	Ⅲ	第 29 図 112 第 92 図 31	土器鉢 沖施（急須）
8	35938.368	25742.742	3.538	637	G18	－	Ⅲ		貝輪
9	35933.612	25740.567	3.313	638	H18	－	Ⅲ		シャコガイ
10	35934.762	25741.584	3.349	639	G18	－	Ⅴb		貝輪
11	35939.619	25744.879	3.518	640	F18	－	Ⅲ	第 86 図 3	銭貨
12	35933.778	25736.676	3.236	641	H18	－	Ⅲ	第 44 図 8	石斧
13	35931.442	25735.298	3.124	642	I18	－	Ⅲ	第 62 図 38	ホラガイ
14	35941.564	25739.956	3.524	802	F17	－	Ⅲ	第 79 図 25	褐釉（壺）
15	35956.410	25737.010	2.692	831	E15	0350SZ	Ⅴb カ	第 29 図 113	土器口縁部
16	35963.383	25725.806	2.316	832	E12	0586SZ	Ⅴb カ	第 43 図 2	石斧
17	35963.330	25724.998	2.202	833	E12	0586SZ	Ⅴb カ	第 44 図 7	石斧
18	35963.884	25724.105	2.345	834	E12	0586SZ	Ⅴb カ		イノシシ　下顎骨Ｌ・Ｒ
19	35963.931	25722.844	2.505	835	E12	0586SZ	Ⅴb カ	第 44 図 6	石斧
20	35943.509	25742.460	3.550	836	F17	－	Ⅲ	第 44 図 5	石斧
21	35943.618	25740.786	3.408	837	F17	－	Ⅲ	第 58 図 2	貝輪
22	35938.073	25735.007	3.170	838	H17	－	Ⅲ	第 43 図 1	石斧
23	35940.306	25746.928	3.531	924	H17	－	Ⅲ		ホラガイ
24	35941.993	25739.495	3.580	987	F17	0656SS	Ⅱ	第 86 図 2	銭貨
25	35941.903	25739.545	3.472	988	G17	0656SS	Ⅴb		貝輪
26	35923.568	25731.587	3.116	1073	J18	－	Ⅴb		磨石
27	35940.143	25747.205	3.518	1138	F18	－	Ⅴb		貝匙
28	35938.680	25745.126	3.489	1148	F18	0702SK	Ⅴb カ		錘？　サンゴ
29	35939.753	25745.780	3.492	1149	F18	－	Ⅴb		ゴホウラ
30	35931.933	25739.213	3.122	1275	H18	－	Ⅴb		錘？　石製品
31	35944.462	25746.462	3.389	1274	E18	0805P	Ⅴb カ		二枚貝有孔
32	35944.525	25742.664	3.493	1486	F17	0850P	Ⅴb カ		貝輪
33	35928.015	25729.562	2.998	1487	J17	0294SK	Ⅴb カ	第 61 図 30	貝匙
34	35929.306	25729.256	2.994	1488	J17	－	Ⅴb		二枚貝有孔　メンガイ
35	35929.270	25729.231	3.005	1489	J17	－	Ⅴb		二枚貝有孔　メンガイ
36	35929.287	25729.300	3.013	1490	J17	－	Ⅴb		二枚貝有孔　ヒメジャコ
37	35934.530	25738.964	3.185	1491	H18	1160SS	Ⅴb	第 60 図 25	貝匙
38	35933.761	25735.360	3.086	1492	H17	1031SK	Ⅲ	第 72 図 33	青磁（皿）
39	35934.469	25734.412	2.991	1493	H17	－	Ⅴb		錘？　サンゴ
40	35929.544	25728.974	3.008	1494	J17	－	Ⅴb		貝
41	35929.561	25729.091	3.017	1495	J17	－	Ⅴb		二枚貝有孔　ヒメジャコ
42	35929.619	25729.133	3.011	1496	J17	－	Ⅴb		二枚貝有孔　ヒメジャコ
43	35929.509	25729.108	3.028	1497	J17	－	Ⅴb		貝
44	35929.354	25729.318	3.010	1498	J17	－	Ⅴb		二枚貝有孔　ヒメジャコ
45	35929.377	25729.355	3.007	1499	J17	－	Ⅴb		二枚貝有孔　ヒメジャコ
46	35929.311	25729.341	3.005	1500	J17	－	Ⅴb		二枚貝有孔　メンガイ
48	35925.474	25729.963	3.064	1616	J18	－	Ⅴb	第 23 図 53	土器口縁部
49	35947.541	25736.713	2.885	1617	F16	1051SK	Ⅴb カ		二枚貝有孔　ヒメジャコ
50	35935.948	25738.020	3.105	1618	H18	－	Ⅴb		螺貝製敲打器
51	35927.209	25730.760	2.929	1619	J18	1097P	Ⅴb カ	第 23 図 49	土器口縁部
52	35925.860	25725.867	2.945	1620	K17	－	Ⅴb	第 60 図 26	貝匙
53	35927.303	25724.949	3.049	1621	K17	－	Ⅴb		イモガイ
54	35927.382	25724.953	3.051	1622	K17	－	Ⅴb		イモガイ
55	35936.590	25735.777	2.991	1623	H17	1012SK	Ⅴb カ		タカラガイ
56	35929.401	25729.251	2.960	1624	J17	－	Ⅴb		二枚貝有孔　メンガイ
57	35940.314	25733.430	3.009	1625	H16	1049P	Ⅴb カ	第 61 図 34	ヤコウガイ
58	35940.210	25733.487	2.983	1626	H16	1049P	Ⅴb カ	第 32 図 181	土器底部
59	35945.954	25748.674	3.320	1627	E18	1091P	Ⅴb カ		シャコガイ
60	35932.422	25738.442	3.119	1794	H18	－	Ⅴb		ウミガメ　中・下腹板
61	35940.480	25741.877	3.346	1795	F18	0723SK	Ⅴb カ	第 43 図 3	石斧
62	35940.307	25733.034	3.088	1796	H16	1050P	Ⅴb カ	第 28 図 109	土器口縁部
63	35925.070	25724.456	2.997	1943	K17	－	Ⅴb	第 22 図 44 第 23 図 48	土器深鉢
64	35940.382	25732.647	3.041	1944	H16	－	Ⅴb	第 28 図 109	土器口縁部
65	35929.116	25735.687	3.005	1980	I18	－	Ⅴb		敲石？
66	35930.385	25735.552	3.021	1981	I18	－	Ⅴb	第 46 図 20	敲石
67	35928.285	25735.964	3.050	1982	I18	－	Ⅴb	第 22 図 39 第 26 図 80	土器深鉢
68	35934.628	25738.957	3.161	1983	H18	1160SS	Ⅱ	第 95 図 20	沖無壺
69	35923.512	25723.219	2.700	1984	K17	－	Ⅴb	第 49 図 26	敲石兼磨石
70	35930.211	25737.469	2.974	2031	I18	－	Ⅴb		貝匙
71	35935.940	25737.155	2.999	4689	H17	－	Ⅴb	第 62 図 37	ホラガイ
72	35934.555	25735.738	3.034	4690	H17	－	Ⅴb	第 60 図 20	貝匙

凡例（沖施：沖縄産施釉陶器　沖無：沖縄産無釉陶器）



第10図　遺物平面・垂直分布図　（取上げ）

「取85石ミ」→南側　石器　取上げ 85 の意

A 本土産陶器
取300
第98図5

D 褐釉陶器
取14
第79図25

C
取6
第58図1

B
取301
第24図62

E
銭貨
取11
第86図3
2cm
銭貨
銭貨
取24
第86図2
(0723SK)
取20
第44図5
取61
第43図3
取21
第58図2

G
(1160SS)
取68
第95図20
青磁 (1031SK)
取38
第72図33
(1160SS)
取37
第60図25

I
取33
第61図30

J
取48
第23図53
取51
第23図49

K
取116
第30図124

L
取63
第22図44
貝製品
取52
第60図26

取287
第27図97
取62＋64
第28図109
刀子
取284
第110図 1
5cm
刀子
取288
第21図32
取283
第21図33

F・H
取67
第26図80
取58
第32図181
取67
第22図39
取7
第29図112

取12
第44図8
取22
第43図1
取66
第44図20
取292
第47図22
取296
第49図25
取13
第62図38
取71
第62図37
(1049P)
取57
第61図34
取72
第60図20

P
取298
第28図103

Q
(0350SZ)
取15
第29図113

N
取1
第44図10

M
取69
第49図26

10cm
遺物スケール

第３表－２　取上遺物一覧

取上番号	X	Y	Z	台帳番号	グリッド	遺構	層序	図番号	遺物
116	35920.234	25726.084	3.013	2455	L18	－	Ⅴb	第30図 124	土器口～底部
283	35934.947	25735.514	3.062	4792	H17	－	Ⅴb	第21図 33	土器底部
284	35937.676	25735.901	3.046	4795	H17	－	Ⅴb	第110図１	鉄製刀子
285	35937.540	25736.264	3.054	4793	H17	－	Ⅴb		－
286	35937.777	25735.177	2.892	4794	H17	－	Ⅴb		－
287	35938.707	25734.622	3.022	4796	H17	－	Ⅴb	第27図 97	土器口縁部
288	35934.624	25735.029	3.002	4812	H17	－	Ⅴb	第21図 32	土器口縁部
289	35935.166	25736.692	2.958	－	H17	－	Ⅴb		石皿
291	35938.574	25734.195	2.791	4882～4886	H17	－	Ⅴb		シレナシジミ？
292	35933.030	25739.013	3.029	4887	H18	－	Ⅴb	第47図 22	敲石兼磨石
294	35934.606	25737.397	2.999	4914	H18	－	Ⅴb		－
295	35934.732	25737.291	2.973	4915	H18	－	Ⅴb		ヤコウガイ
296	35933.618	25737.089	2.914	4930	H18	－	Ⅴb	第49図 25	磨石
297	35936.278	25741.784	3.234	4916	G18	－	Ⅴb		イノシシ　下顎骨Ｌ・Ｒ
298	35931.617	25736.901	2.781	4917	H18	－	Ⅴb	第28図 103	土器口縁部
300	35950.781	25751.424	3.647	4515	D18	－	Ⅲ	第98図５	本陶（皿）
301	35949.757	25753.644	3.638	4514	C18	－	Ⅴb	第24図 62	土器口縁部
302	35969.977	25736.954	2.463	4544	C13	4409SX	Ⅳ	第59図 16	アンボンクロザメ イモガイ
303	35949.039	25753.354	3.648	4545	D18	－	Ⅴb		ゴホウラ
304	35952.490	25753.169	2.808	4615	C18	4402SK	Ⅲ		青磁（皿）
305	35953.381	25749.136	3.563	4667	D17	－	Ⅴb		イノシシ　肩甲骨Ｒ ウミガメ　腹甲板
306	35974.904	25735.560	2.127	－	B12	4409SX	Ⅳ		サガリバナ
307	35974.999	25735.805	1.727	4731	B12	4409SX	Ⅳ	第50図 28	石皿
308	35973.328	25734.667	1.756	4732	B13	4409SX	Ⅳ	第36図 26	土器口縁部
500	35939.795	25732.729	2.960	4997	H16	－	Ⅴb		－
502	35976.342	25735.326	2.100	5230	B11	4409SX	Ⅴa	第38図 69	土器口縁部
289-1	35935.166	25736.692	2.958	4912	H17	－	Ⅴb		石皿
289-2	35935.166	25736.692	2.958	4913	H17	－	Ⅴb		石皿
８土ミ	35928.594	25735.575	2.637	８	I18	－	Ⅴb		土器脚台 土器口縁部
11 土ミ	35936.682	25730.589	2.539	11	H16	－	Ⅴb	第20図９	土器胴部
27 土ミ	35927.477	25733.456	2.279	27	I18	－	Ⅴb		土器胴部
74 土ミ	35927.944	25735.675	2.338	74	I18	－	Ⅴb	第22図 47	土器口縁部
108 土ミ	35930.166	25737.610	2.522	108	H18	－	Ⅴb	第32図 178	土器底部
118 土ミ	35941.045	25731.383	2.564	118	H16	－	Ⅴb	第20図４	土器胴部
119 土ミ	35937.201	25732.933	2.766	119	H17	－	Ⅴb	第21図 36	土器底部
160 土ミ	35932.067	25736.295	2.598	160	H18	－	Ⅴb	第21図 23	土器胴部
181 土ミ	35930.166	25737.610	2.522	181	H18	－	Ⅴb		土器胴部
206 土ミ	35930.498	25735.142	2.395	206	I18	－	Ⅴb		土器胴部
241 土ミ	35930.123	25733.437	2.251	241	I18	－	Ⅴb	第26図 83	土器口縁部？
256 土ミ	35929.309	25736.764	2.211	256	I18	－	Ⅴb		土器胴部
257 土ミ	35930.335	25735.039	2.223	257	I18	－	Ⅴb	第20図 16	土器口縁部
270 土ミ	35929.264	25733.595	2.206	270	I18	－	Ⅴb		土器胴部
279 土ミ	35928.713	25732.906	2.152	279	I18	－	Ⅴb	第30図 129	土器口縁部
７石ミ	35937.188	25731.862	2.694	641	H16	－	Ⅴb		磨石
37 石ミ	35928.319	25734.127	2.190	644	I18	－	Ⅴb	第46図 19	敲石
85 石ミ	35939.237	25730.074	2.815	639	H16	－	Ⅴb	第51図 30	石皿
93 石ミ	35939.147	25728.578	2.405	647	H16	－	Ⅴb		磨石
98 石ミ	35939.491	25727.492	2.472	648	H16	－	Ⅴb	第51図 29	石皿
131 石ミ	35937.313	25732.763	2.777	649	H17	－	Ⅴb		石斧
200 石ミ	35931.678	25735.113	2.468	652	I18	－	Ⅴb	第43図４	石斧
201 石ミ	35930.614	25734.657	2.359	653	I18	－	Ⅴb		磨石
10 貝ミ	35935.285	25733.018	2.589	568	H17	－	Ⅴb	第60図 21	貝匙
11 貝ミ	35929.742	25736.332	2.548	569	I18	－	Ⅴb		貝匙
34 貝ミ	35928.556	25733.510	2.200	334	I18	－	Ⅴb		二枚貝有孔　ヒメジャコ
35 貝ミ	35929.526	25733.593	2.261	335	I18	－	Ⅴb		貝
36 貝ミ	35929.739	25733.621	2.273	336	I18	－	Ⅴb		二枚貝有孔　ヒメジャコ
99 貝ミ	35929.176	25734.914	2.358	399	I18	－	Ⅴb		貝
112 貝ミ	35934.037	25737.478	2.815	412	H18	－	Ⅴb		貝
130 貝ミ	35931.257	25736.665	2.633	430	H18	－	Ⅴb	第60図 22	貝匙
138 貝ミ	35930.852	25739.034	2.670	438	H18	－	Ⅴb		貝
144 貝ミ	35929.259	25737.598	2.584	444	I18	－	Ⅴb		二枚貝有孔　メンガイ
150 貝ミ	35929.982	25735.328	2.419	450	I18	－	Ⅴb		貝
151 貝ミ	35929.960	25735.159	2.370	451	I18	－	Ⅴb		二枚貝有孔　シラナミ
152 貝ミ	35929.900	25735.100	2.339	452	I18	－	Ⅴb		貝
243 貝ミ	35935.164	25735.731	2.496	543	H17	－	Ⅴb		二枚貝有孔　Ｒサルボウ
245 貝ミ	35935.432	25737.301	2.599	545	H17	－	Ⅴb		二枚貝有孔　Ｒサルボウ
254 貝ミ	35934.273	25739.717	2.509	554	H18	－	Ⅴb		二枚貝有孔　Ｒマスオ
257 貝ミ	35933.292	25740.457	2.668	557	H18	－	Ⅴb		貝
16 骨ミ	35933.758	25737.069	2.750	586	H18	－	Ⅴb		イノシシ 上腕骨・尺骨・腓骨
34 骨ミ	－	－	－	604	H18	－	Ⅴb		イノシシ 下顎骨・上腕骨

「160 土ミ」→**南側**　土器取上げ 160 の意

第３節　遺物の出土状況

Ⅱ層の近・現代、Ⅲ層のグスク時代、Ⅴ層の貝塚時代後期の各時期の主な遺物について、それぞれの遺物の項で示し、遺物全体の出土量を第４表に示した。これによると前節の層序の項でも触れたが、本遺跡は米軍の基地建設により大きく攪乱（第５図）を受け、Ⅰ・Ⅱ層の SZ（攪乱）やⅢ層及び SD（溝状遺構)、P（柱穴）等の遺構からⅤｂ層に属する遺物が多量出土し、なかでも土器は全体量の 48.7％を占める。このことから貝塚時代後期（Ⅴｂ層）はグスク時代（Ⅲ層）の集落、近現代（Ⅱ層）の水田、畠の耕作によって壊されていたことがわかる。

これらの状況から、Ⅱ・Ⅲ層の遺構から出土した貝塚時代後期の遺物（土器・石器・貝製品・骨製品）はⅤｂ層攪乱としてまとめた。

出土する主な遺物については点上げを実施した。その点数は 364 点で、主に貝塚時代後期の遺物である（第10図)。その後、砂層の観察を行った結果、南側にさらに貝塚時代後期の遺物が出土する可能性があることから、H16 ～ 18・I18 の追加調査を行い、その分に関しても点上げを実施した（第９図)。

以下、これらの状況について概略する。図面上の表記は前者が「取 No.」、後者が「取 No.〇ミ」とし、各遺物の種類や挿図番号については第３表に示した。以下、概略する。

第４表　伊礼原Ｄ遺跡の遺物出土量

時代 / 遺物 / 層	貝塚時代後期					グスク時代											近・現代																		合計
	土器	土製品	貝製品	石器	骨製品	カムイヤキ	白磁	青磁	染付	瑠璃釉	褐釉陶器	三彩	瓦質土器	焼土	銭貨	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	本土産磁器	本土産陶器	先島系土器	木製品	円盤状製品	瓦	簪	煙管	人形	鉄製品	銅製品	軽石製品						
Ⅰ	54		2	1			2	5	17		9					2	9		4	1			1	2											109
Ⅱ（攪乱）				3																															3
Ⅱ	982		62	24		1	62	337	172	2	299	4	2	76	2	123	185	63	68	10	19	1	7	40		2			1	1						2545
Ⅱ（遺構）	210		3	5		1	17	65	23		103		1	11	1	25	72	16	14	3		1	1	17	1		1	2							593
Ⅲ	2793		69	10			19	148	41		137	3	2	61	2	6	6	3		1	3			1											3305
Ⅲ（遺構）				4			18	77	31	1	91	1	1	75		2	6	1	2	1	15		2												328
Ⅳ	1904	1	29	10				1													1														1946
Ⅴａ	1099		8	5																															1112
Ⅴｂ（攪乱）	1477		49	9										3																					1538
Ⅴｂ	1878	1	113	14	1																						1								2008
Ⅴｂ（遺構）	190		11	1	1																														203
Ⅵ	44		1		1																														46
排土･表採･不明	201		3					1								4	3							1												213
合　計	10832	2	350	86	3	2	118	634	284	3	639	8	6	226	5	162	281	83	88	16	38	2	11	61	1	2	1	3	1	1					13949

（１）取上げ資料

第10図は主にⅤ層（a・b）の遺物を点上げしたものであるが、前述したようにⅡ・Ⅲ層の時期がⅤ層の文化層を破壊しているため、その状況は点上げにも現れている。

点上げの最も高いのは C18 の標高 3.638 ｍの土器（取 301・第24図 62）で、最も低いのは I18 の標高 2.152 ｍの土器（取 279 土ミ・第30図 129）である。しかし、さらに海岸寄りの J18 で標高 3.064 ｍの土器（取 48・第23図 53）があり、Ⅴｂ層の下位は南西側に約 10 度の傾斜が考えられる。

Ⅳ・Ⅴａ層の 4409SX では最も高いのは標高 2.463 ｍの貝錘（取 302・第59図 16）で、最も低いのは標高 1.727 ｍの石皿（取 307・第50図 28）である。標高を比較しても他の点上げより低いことから低湿地であったことが窺える（第４節参照)。

第10図に示したように平面と垂直分布を確認しながら、Ａ～Ｔにグルーピングを試みた。以下、各グループについて略述する。

Ⅱ・Ⅲ層の時期の遺物としてはＡ・Ｄ・Ｅ・Ｇ・Ｉのグループがある。

Ａの取 300 は本土産陶器（標高 3.647 m）、Ｇの取 68 は沖縄産無釉陶器（標高 3.161 m）がⅡ層、Ｄの取 14 は褐釉陶器（標高 3.524 m）、Ｅの取 11 と取 24 は銭貸で（標高 3.518 m･3.580 m）の出土。ＩとＧはⅢ層遺構の出土でＩの取 33 は腹面利用のヤコウガイ製貝匙(標高 2.998m)で J17 の 0294SK、Ｇの取 38 は青磁（標高 3.086 m）で 1031SK の出土で前２者より低い。

Ｖｂ層の遺物としてはＣ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｊ・Ｋ・Ｌ・Ｍ・Ｎのグループがある。

Ｃ・Ｅ：取 6 と取 21 のオオツタノハ貝輪及び、取 20・取 61 の石斧は前者が扁平（図 5）と厚手（図 3）の両刃なすものである。いずれも標高 3.5 m前後で、ＦラインＶｂ層の高さを示す資料と思われる。

Ｇ：取 37 のヤコウガイ製貝匙は（標高 3.185 m）1160SS の出土である。

Ｆ・Ｈ：土器や石器、貝製品などまとまりのあるグループで、標高 3.1 m前後に集中するものである。土器は取 67 でⅡ群Ⅱ類とＶ類（標高 3.05 m）で、Ⅱ類土器（図 39）は初例で、Ｖ類土器（図 80）との共伴から時期を示唆するものである。取 288 はスセン當式土器（新里 2000）の範疇に含まれるもので、取７のⅦ類土器と文様の種類及び構図が前述の取 67 のⅡ類土器と酷似する。この時期の土器に一石を投じるものである。ほかに取 287 のⅥ類土器が出土している。

取 292 はチャート製敲石兼磨石で、沖縄では伊礼原Ｅ遺跡に次いで２例目である。取 12 の小型扁平石斧、取 22 の中型両刃石斧の他、取 66 の敲石・取 296 の磨石が検出されている。また、貝製品では取 13・71 のホラガイ有孔製品、取 57・72 のヤコウガイ製品があり、一定のまとまりをみせ、貝塚時代後期の安定した面と判断される。

取 284 の鉄製刀子（第110図１）は標高 3.046 mで、H17、Ｖｂ層（包砂）の出土である。形状からは熱田貝塚の製品に類似するが、やや小型である。上層ではくびれ平底も得られており、Ｖｂ層上位の遺物としての可能性は高い。

Ｉ：取 58 は平底に分類されるもので、標高 2.983m、H16 から出土している。

Ｊ：取 51 と取 48 はいずれも J18 の標高 3.0 前後で検出されている。取 51 が口唇と外面に刺突文を施すもので、文様構図は貝塚時代前期に類似するが、形状や胎土はⅥ類に近い。

取 48 は小降りで、口唇に文様が施されることから、アカジャンガー式土器に近いが、底部が丸底になる可能性が高い。タイプの異なるものが近い位置で得られている。

Ｋ：取 116 は口縁部～底部まで残るくびれ平底土器で、標高 3.013 mで検出され、他の資料と比較すると海岸側のＫ 18 で得られ、くびれ平底土器が乳房状尖底土器より上位で出土することを示す好資料である。

Ｌ：取 63 は前者と同じく口縁部～底部まで残るⅡ類に分類される土器で、取 52 のヤコウガイ製貝匙の近くで得られ、前述のくびれ平底土器より下位から出土。

Ｍ・Ｎ：取 69 は三角形の敲き石（標高 2.7m)、取１は石斧（標高 2.892m）で貝塚時代後期の特徴を示す石器である。

Ⅵｂ層の下位の遺物としてはＢ・Ｏ・Ｐ・Ｑ・Ｓ・Ｔのグループがある。

Ｂ：取 301 はⅢ類に分類されるＶｂ層の時期では古手の土器で C18、標高 3.638m と最も内陸側で高いいちの出土である。

Ｏ：南側の部分で土器は取 74 土ミ、取 279 土ミが摩耗、取 11 土ミが室川下層式で、標高 2.539 m、取 257 土ミが面縄前庭式、標高 2.223 mと低く、ローリングを受けたＩ群の土器が得られている。取 119 土ミの土器はこれまで報告例がなく、詳細は不明。石器は両刃石斧（取 200 石ミ)、敲

石（取 37 石ミ）、石皿（取 85 石ミ・98 石ミ）、ヤコウガイ貝匙（取 10 貝ミ）標高 2.589 m、これらの状況からＶｂ層、最下層面と捉えることができる。

取 74 土ミは（標高 2.338 m）は約 0.7 m下で出土し、水魔を受けている。

Ｐ：取 298 はⅥ類土器で標高 2.781 mを測り、H18、Ｖｂ層下位の中心部分と考える。

Ｑ：取 15 はⅦ類土器で、標高 2.692 mで、E15 では低く，0350SZ の攪乱である。

Ｔ：取 118 土ミで、船元系土器で顕著に摩耗する。ローリングを受けた土器はＶｂ層の最下面及びⅥ層で数点検出されている（第10表）。主にＩ群土器である。

Ｓ：取 16 は厚手、取 17 と取 19 は扁平の両刃石斧である。Ⅵｂ層の指標となるが、標高 2.3 m前後で E12、0586SZ（攪乱）の出土である。

4409SX 遺構内

Ｒ：4409SX 内の点上げで、土器は取 502 の壺、取 308 のⅧ類土器、石器は取 307 の石皿、貝製品は取 302 の貝銛が検出された。この中で取 307 石器、取 308 土器の標高 1.756 mと点上げの中では最も低い。本遺構出土のものは、ほかに比べて出土レベルが低く、水没していたことを示す資料である。

（２）南区の追加調査（H16 ～ 18、J18）

第２節の層序に示したように、貝塚時代後期、砂①、砂②、砂③、砂④、砂⑤、砂⑥と徐々に海岸に広がる。

混軽石層、混貝・枝サンゴ層が斜めに帯状に広がり、貝塚時代後期の堆積状況を示している。垂直分布でみると砂③に遺物が集中（第５表）している。第９図に示した図の記号は「×」が上層、「＋」が南側の下層調査のものである。「×」は第10図の番号と一致する。石 254 点、土器 302 点、貝 268 点、骨 67 点で、そのうち石は測点のみ 238 点で、自然石が主で測点にとどめた。

第９図①に全点を色分けで示し、第９図②に主となる土器・石器・貝製品・骨製品別に平面分布を示した。

第９図①の垂直分布でに示したように砂③に遺物が集中し、出土遺物の高低差をみると標高 2.8 m～ 2.1 mと海岸方向に低くなることから砂丘の自然堆積を示すものと思われる。

各遺物の出土状況をみると

土器は（第９図② a）平面分布でみるとI18 に集中する。

H16 ～ 18・I18 の土器の出土量は 334 点で、そのうち、302 点は点取りを行った。出土点数が他の遺物より多いため、各面ごとに土器を取り上げた。その面は砂①～⑥で最も多いのは砂③で 76％（246 点）を占め、Ｖｂ層下位の中心部分と判断される。

多数ある土器の関係を知るため、上位層のⅡ・Ⅲ・Ｖｂ・Ｖｂカと下位層の砂①～⑥の分類別出土状況を第５表に示す。これによると土器はⅢ層・Ｖｂ層・砂③層で多く得られた。これらの層を中心に土器の分類（分類の記述は「土器」の項）をみると砂③ではⅥ類（大当原式土器）が 190 点と主体を示し、底部でも乳房状尖底が４点得られた。

Ｖｂ層ではⅧ類の割合が下層に比べて高く、Ⅵ類の厚手が少なくなる傾向が見られ、Ⅲ層ではさらにⅧ類の割合が高く、Ⅷ類の泥質の割合が増し、底部ではくびれ平底の出土が見られる。このことから土器はⅥ類（大当原式土器）→Ⅷ類（くびれ平底系土器）の変遷が窺え、これまでの貝塚時代後期土器の変遷過程を証左するものである。また、海岸側に近い I18 でくびれ平底土器が多く得られている。

石器は(第９図②b)測点のみの自然石も含まれている。こらからみるとH16～18の海岸側とI18に集中する。これは砂丘の堆積方向を示唆するものと思われる。石器は16点得られている。詳細は石器の項でふれる。

貝・貝製品としたものを第９図②に示した。本品も自然貝を含み、石器と同様、砂丘の堆積を示唆するものであるが、製品としてはヤコウガイ製貝匙（第60図 23)、二枚貝有孔製品（シラナミ・メンガイ）が出土している。

骨（第９図② d）はイノシシの骨や魚骨が検出され、そのうち、第９図①に示したようにイノシシ下顎骨、上腕骨（取 34 骨ミ)、イノシシ上腕骨、尺骨、腓骨（取 16 骨ミ）など、骨はあまり破損してなく、まとまって出土する。また、H18 から I18 方向に一定の出土が見られることから砂③は包含層として安定していたことが窺える。

この骨のまとまりは小堀原遺跡（2012）の貝塚時代後期層で同じような状況が見られた。

第５表　南区（H16～18・I18）**土器分類別出土量**

層＼分類			口縁部・胴部															底　部								合計
			Ⅰ群	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵア	Ⅵウ	Ⅶ	Ⅷ砂	Ⅷ中	Ⅷ泥	Ⅸ類	分類不可	小計	丸	尖底	乳	平	くびれ	脚	底付近	小計	
Ⅱ			1		3	2		3	4	12	2	4	7	4		15	57		2	1				1	4	61
Ⅲ			3	8	6	3	9	14	47	97	10	42	20	22		45	326		7	3		9		5	24	350
Ⅴb カ									1	6				6			13			1					1	14
Ⅴb	上		16	1	3	1	3	16	51	90	5	20	17	9	1	82	315	1	3	2	1		1	8	16	331
	下	砂①						1		1		2					4								0	4
		砂②	3					1	16	11		4	6	1		1	43								0	43
		砂③	4	4	2	3	1	13	99	91		11	9	1	1	1	240		1	2			1	2	6	246
		砂④	2						1	1			1			1	6								0	6
		砂⑤	6	1				4	4	4		1				1	21			1					1	22
		砂⑥							1			1				1	3								0	3
Ⅵ			8					1	1								10								0	10
合　計			43	14	14	9	13	53	225	313	17	85	60	43	2	147	1038	1	13	10	1	9	2	16	52	1090

註：2.5cm 以下は不集計。

第４節　貝塚時代後期

貝塚時代後期はＶａ層、Ｖｂ層としたものである。層序の項でもふれたように貝塚時代後期の文化層はⅡ・Ⅲ層の攪乱を受けており、本時期の遺物はⅡ・Ⅲ層で出土するが、文化遺物との観点から貝塚時代後期にまとめて扱う。なお、前述の南区下層の遺物は部分調査のため、遺物の項ではＶｂ層としてまとめ、観察一覧に詳細な出土を示し、Ｖｂ層に内の土器については考察でふれる。以下、遺構、出土遺物の順に報告する。

1. 遺構

貝塚時代後期の遺構としてはＶａ層の 4409SX とＶｂ層の土坑（4318SK)、貝集積（4317SS)があり、それ以外にＶｂ層の堆積の痕跡を示す貝だまり（0656SS・0658SS・1160SS・1163SS)、軽石集中部が検出された。

以下、略述する。